

2019 年度（令和元年度）
WWL コンソーシアム構築支援事業
研究開発報告書

管 理 機 関

学校法人 渋谷教育学園

事 業 拠 点 校

渋谷教育学園渋谷高等学校

目次

巻頭言	3
WWL コンソーシアム構築支援事業構想計画書（概要）	4
2019年度 WWL コンソーシアム構築支援事業研究開発完了報告書	5
WWL コンソーシアム構築支援事業活動構想図	13
研究開発活動報告	14
I Peace, Justice and Strong Institutions Project	14
1 国語科（現代文）の取り組み：比較文化論としての核	14
2 情報科の取り組み	19
3 公民科（現代社会）の取り組み：ヒロシマから戦争を考える	22
4 英語科の取り組み	26
II Partnerships for the goals project	38
1 公民科（現代社会）の取り組み：「2050年の世界」を生きる	38
2 英語科の取り組み	41
3 家庭科の取り組み	64
III Research and Analysis Project	67
Write for the Future	67
IV 海外プロジェクトへの参加	75
1 Global Responsibility 国際会議（渋谷教育学園幕張高校と連携）	75
2 台湾国際高校生サミット	75
3 修学旅行プロジェクト	76
4 相互交流の取り組み	80
V 特別授業・講演会の実施	82
1 高校生 G20 サミット	82
2 Model G20 サミット	82
3 SDG s Talk 大会	82
4 LGBTQ セミナー	83
5 SDGs Discussion	84
VI 学びあいの場の開催	85
1 さくらサイエンスプログラム	85
2 オープンスクールデーの開催	85
3 主権者教育の取り組み	86

VII 評価・分析.....	89
WWL アンケート分析	89

巻頭言

ワールドワイドラーニングコンソーシアム構築支援事業（WWL）1年目を終えて

渋谷教育学園
理事長 田村 哲夫

本校が WWL 事業の取り組みをはじめ、1年が過ぎました。この間、連携大学、高校、企業、団体の皆さまに、一方ならぬご尽力をいただき、感謝申し上げます。

文部科学省が実施している、WWL コンソーシアム構築支援事業において、今年度全国10校の拠点校の1校として渋谷教育学園渋谷高等学校が選ばれ、幕張高等学校、広島女学院高等学校、清教学園高等学校とともに、プロジェクトに取り組んで参りました。この事業は、高校生のもつエネルギーを世界で共有し、より発展的な内容につなげ、SDGs を担う地球市民への意識づけにつながるものと期待しています。これまでの SGH 事業での知見をいかし、海外だけでなく、国内の学校ともその知見の共有を進めて参りました。

この一年、渋谷高等学校の生徒たちは、幕張高校とともにスペインの高校生会議へ参加し、広島女学院を訪問して核と安全保障に関する意見交換をし、論文研究発表会を清教学園の生徒さんに参加いただくなど、国内の学校との合同プロジェクトに取り組んで参りました。海外連携校との交流は、年数を重ねるごとに深まりを見せております。

8月には、最終年度に予定している「学びのオリンピック」の開催にむけた準備の取り組みとして、オープンスクールデーを開催しました。社会的課題に対する真摯な姿勢を多くの方に見ていただいたことは生徒たちの自信につながったようです。

昨年度末より、世界的に新型コロナウイルス感染が拡大し、本取り組みでも、予定していた海外交流事業の実施がストップいたしました。実際に訪問しての活動が厳しくなる中、オンラインを活用した新たな取り組みも試験的に始まっております。

高校における学びは、義務教育から続く教科学習のまとめにあたります。今後も、学びを活かしつつ、同世代との交流を通じて、自身の経験や思考を深める機会をつくり、「協働型探究学習による、SDGs 達成を担う次世代地球市民の育成」を目的として事業に取り組んで参ります。引き続き温かいご支援をいただきますよう、よろしくごお願い申し上げます。

WWL コンソーシアム構築支援事業構想計画書（概要）

【別紙様式4-1】

期間	ふりがな	しふやきょういぐがくえん	都道府県番号
2019～2021	管理機関	渋谷教育学園	13
	ふりがな	しふやきょういぐがくえんしふやこうとうがっこう	
	事業拠点校	渋谷教育学園渋谷高等学校	

2019年度WWL（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム構築支援事業
構想計画書（概要）

構想名（30字程度以内）

協働型探究活動による、SDGs達成を担う次世代地球市民の育成

構想概要（400字以内）

テーマをSDGs(持続可能な開発目標)とし、中でも、環境、人権、平和を取り上げる。その特徴でもある参画型、統合性を活かした取り組みとする。教科連携型学習アプローチと探究学習活動を重視し、大学等の学問ネットワークを利用できる仕組みを整えることで、教科の枠に収まらない学びをカリキュラムの中に位置づける。それにより、社会課題に対する認識を深めると同時に、課題設定力や論理的思考力の強化を図る。さらに自らネットワークを作りだし、活用する意欲とスキルを身につける。また、高校生が主役となった国際的な場(学びのオリンピック(仮称))を定期的で開催する。それにより個々の対話力、英語力、探究力を高め、同じ理念を共有する高校と協働して空間を超えたチームワークを学ぶ。取り組みの見える化・ネットワーク化は、本校のSGHから続く研究成果の発信を容易にし、全国規模でのSDGs達成を担う次世代地球市民の育成を可能にする。

研究開発・実施体制

		機関名・学校名・情報						代表者・校長名	
管理機関		渋谷教育学園						田村 哲夫	
事業拠点校		渋谷教育学園渋谷高等学校 (私立)						田村 哲夫	
		学科・コース名	1年	2年	3年	計	学校規模		
	対象:	普通科	200	200	20	420	600		
	対象外:	普通科	0	0	180	180			
事業共同実施校	①	()							
			学科・コース名	1年	2年	3年	計		学校規模
		対象:				0	0		0
	対象外:				0	0			
	②	()							
			学科・コース名	1年	2年	3年	計		学校規模
対象:					0	0	0		
がい				0	0				
事業協働機関 (国内外の大学、企業、国際機関等)	①	東京外国語大学						三浦 吉永	
	②	電気通信大学						福田 喬	
	③								
事業連携校 (国内外の高等学校等)	①	渋谷教育学園幕張高等学校 (私立)						田村 哲夫	
	②	清教学園高等学校 (私立)						森野 章二	
	③	広島女学院高等学校 (私立)						渡辺 信一	
	④	St. Stephens' Episonal School ()						Dr. Jan Pullen	
	⑤	Ruffles Insutitution ()						Mr. Frederick Yeo	
	⑥	Loreto College ()						Ms. Judith Potter	

※行数は適宜調整すること

2019年度WWL コンソーシアム構築支援事業研究開発完了報告書

(別紙様式3)

令和2年3月31日

事業完了報告書

文部科学省初等中等教育局長 殿

住 所 東京都渋谷区渋谷1-21-18
管理機関名 学校法人 渋谷教育学園
代表者名 理事長 田村哲夫 印

2019年度WWL(ワールド・ワイド・ラーニング)コンソーシアム構築支援事業に係る事業完了報告書を、下記により提出します。

記

- 1 事業の実施期間
2019年5月24日(契約締結日)～2019年3月31日
- 2 事業拠点校名
学校名 渋谷教育学園渋谷高等学校
学校長名 田村 哲夫
- 3 構想名
協働型探究学習による、SDGs達成を担う次世代地球市民の育成
- 4 構想の概要
テーマをSDGs(持続可能な開発目標)とし、中でも、平和、貧困、保健、ジェンダー、水問題、エネルギー、気候変動、イノベーションなど、高校生の生活に身近な課題を取り上げ、その特徴でもある参画型、統合性を活かした取り組みとする。教科連携型学習アプローチと探究学習活動を重視し、大学等の学問ネットワークを利用できる仕組みを整えることで、教科の枠に収まらない学びをカリキュラムの中に位置づける。それにより、社会課題に対する認識を深めると同時に、課題設定力や論理的思考力の強化を図る。さらに自らネットワークを作りだし、活用する意欲とスキルを身につける。また、高校生が主役となった国際的な場(学びのオリンピック(仮称))を定期的に開催することで、個々の対話力、英語力、探究力を高め、同じ理念を共有する高校と協働して空間を超えたチームワークを学ぶ。取り組みの見える化・ネットワーク化は、本校のSGHから続く研究成果の発信を容易にし、全国規模でのSDGs達成を担う次世代地球市民の育成を可能にする。
- 5 教育課程の特例の活用の有無
無し

6 管理機関の取組・支援実績

(1) 実施日程

業務項目	実施期間 (2019年5月24日 ~ 2019年3月31日)											
	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	
P&Jプロジェクト	←	←	←	←	←	←	←	←	←	←	←	
P&Fプロジェクト	←	←	←	←	←	←	←	←	←	←	←	
R&Aプロジェクト	←	←	←	←	←	←	←	←	←	←	←	
特別講座			←	←	←	←	←	←	←	←	←	
運営指導委員会		←	←	←	←	←	←	←	←	←	←	
報告書及びHP									←	←	←	
学びあいの場活動		←	←	←	←	←	←	←	←	←	←	

(2) 実績の説明

本学園は、「自調自考」—自ら調べ、自ら考える—という教育の基本目標のもとに、「高い倫理感を養う」、「国際人として資質を養う」ことを教育目標に掲げている。この3つの目標のもと、社会課題に対する問題意識をもち、課題探究活動、社会貢献活動を通じて、その解決にむけて尽力する姿勢を育む教育活動に取り組んできた。平成26年度より、学園内の2つの高校がそれぞれSGHの指定を受け、グローバル人材の育成に取り組んでいる。その連携のもとで進めてきた人材育成をより発展的なものとするべく、海外や遠隔地の高校に連携のネットワークを広げ、協働して人材育成を進めるため、下記のように、連携校との合同プログラムを行った。また、多くの人材を輩出している東京外国語大学、電気通信大学との連携を進め、高大連携のもと、より発展的な学びを求める生徒たちへのカリキュラムの構築支援のための検討を進めた。引き続き、海外への留学や進学、協働型研修、国際会議、国際コンクールへの参加、報告への支援を行った。

① ALネットワーク委員会の開催

ネットワーク構築のための特別委員会を開催し、国内、海外との情報共有、連携構築のための準備を行った。(2019年度開催回数7回)

② カリキュラム特別委員会の開催

実施計画の運営、検討、評価を行う特別委員会を開催し、特に3つの大型プロジェクト(Peace, Justice and Strong Institutions Project / Partnerships for the Goals Project / Research and Analysis Project)に関する研究開発及び高大連携プロジェクトの検討に取り組んだ。
(2019年度開催回数14回)

③ 連携校及び近隣校との協働プロジェクトへの支援

- ・学園の取り組みを公開し、SDGsへの理解を深める活動として、オープンスクールデーを渋谷高等学校にて開催した。開催にあたっては、運営ボランティアとして、在校生が参画し、様々なイベントを通じて、活動の理解を深めた。このプロジェクトには、連携校である渋谷教育学園幕張高等学校及び近隣校2校(豊島岡女子学園・浅野学園)の生徒も参加した。また、清教学園の教員も招待し、次年度にむけての参加の在り方について協議した。

(実施日:8月28日(水)) 【学びあいの場活動】

- ・広島女学院を訪問し、核と平和について次世代への継承をテーマに自分たちの取り組むべきことを考える機会を設けた。【Peace, Justice and Strong Institutions Project】
- ・渋谷高等学校で開催された探究活動の発表会に、連携校である清教学園高等学校の教員、生徒を招待し、本校生徒とともに、発表(日本語または英語)を行った。発表は、ポスターセッション形式で行い、それぞれが取り組む活動についての理解を深める機会を設けた。【Research and Analysis Project】

(清教学園の参加者 教員2名 生徒4名)

- ④ 連携大学との協働カリキュラム開発および発展的な学びの場支援
- ・ 渋谷高等学校の授業へ、東京外国語大学の大学院生に参加していただき、異文化への理解を進めるとともに、社会課題に対する日本以外の国の考え方に触れる機会や、課題解決に向けた生徒へのアドバイスとともに、カリキュラム開発に関する助言をいただく機会を設けた。(2019年度 来校人数 22名)
 - 【Peace, Justice and Strong Institutions Project, Partnerships for the Goals Project】
 - ・ 電気通信大学が主催する The Irago Conference 2019 に教員を派遣し、次年度参加に向けた検討を進めた。また、高校と大学の連携についての会議への出席し、今後の連携の在り方についての情報共有を行った。
 - ・ 卒業生ネットワークの構築支援
生徒の探究活動を支援するため、卒業生によるライティングセンターを開催した。開催にあたり、より多くの卒業生から協力が得られるようネットワークの構築に取り組んだ。また、来校せずにアドバイスがもらえるように、メールによる相談が可能になるような仕組みの構築にも取り組んだ。
(ライティングセンター協力卒業生数 75名)
 - ・ 外部講師による講演会
2050年の世界を理解するため、専門家を招いての講演会を行った。大規模なものから、ワークショップを伴う小規模のものまで、開催できるよう支援を行った。
(2019年度講演会開催 16回)
 - ・ マレーシア・日本国際工科院との連携
生徒の発展的な学びを可能にするため、マレーシア・日本国際工科院との連携プロジェクトの検討を進めた。現地視察を含め、環境問題に関する探究を支援できる体制の検討を行った。(現地視察 2019年12月)
 - ・ 生徒の留学・進学を増やすために、海外大学との連携を視野に視察を行い、情報の共有を図った。(現地視察 2019年8月及び11月)
- ⑤ 国際協働プロジェクト実施
- 下記の交際交流プロジェクト実施についての支援を行った。
- ・ St. Stephen's Episcopal School との協働【フロリダ研修】
人間の安全保障について、日米の高校生が授業を通じて、学びあう機会を設け、実施した。(2019年2月実施 派遣生徒10名 教員1名)
 - 【Peace, Justice and Strong Institutions Project】
 - ・ Ruffles Institution との協働【シンガポール研修】
授業参加を前提とした相互交流プロジェクトの実施を支援した。ホームステイを手配し、拠点校と連携校の2校での受け入れ準備を整えた。
(2019年9月訪日 受入れ校：渋谷教育学園渋谷高等学校及び暮張高等学校)
*2020年3月予定のシンガポール研修は、新型コロナ感染のため中止
 - ・ Loreto College / Nazareth / Star of the Sea との協働【オーストラリア研修】
授業参加を前提として相互交流プロジェクトの実施を支援した。ホームステイを通じて、多民族国家の現状や移民についての理解を深めるプログラムを行った。
(受入れ人数 16名)
*2020年3月のオーストラリア研修は、新型コロナ感染にともなう措置のため中止
 - ・ 世界大会への派遣
スペイン及び台湾で開催された高校生世界会議に代表生徒を派遣する支援を行った。
- Global Responsibility 2019
(主催校 Col-legi Mare de Deu del Carme)
(派遣生徒14名=渋谷教育学園渋谷高等学校6名+暮張高等学校8名、教員1名)
The2019 International Senior High School Students Summit

(主催校 台湾国立師範大学・台北市立中正中学校)
 (派遣生徒 5名=渋谷教育学園渋谷高等学校 5名、教員 1名)

- ・さくらサイエンス受け入れ
 さくらサイエンス事業により、東南アジア (インド・パングラディッシュ・インドネシア・フィリピン) の高校生との交流を支援した。
 (開催日時 2019年4月21日(木) 10時~16時 生徒 144名 教員 24名受け入れ)

- ⑥ 生徒の自主的な社会課題活動への支援
 生徒たちの自発的な活動を支援すべく、校内での広報や保護者への説明を行った。校内で生徒が開催するさいの留意事項を定め、実施マニュアルの共有と公開を進めた。
 また、高校生による会議会場として、渋谷高等学校の会場利用を進めた。
 (高校2年生による活動 206名/その他の活動 多数/会場利用 4回)
- ⑦ 運営指導委員会開催
 取り組みの状況を確認、指導・助言をいただくために、2回の運営指導委員会を予定した。なお、第2回については、新型コロナウイルス感染拡大による中止を余儀なくされ、文書による説明を行った。(開催回数 2回)
- ⑧ 国内外からの視察・訪問の受け入れ
 本校の取り組みの理解を進めるため、積極的な視察の受け入れを行った。
 特に、ジャマトラ・ウィクラマヤヤケ ユース担当国連事務総長特使の訪問では、校内でミニディスカッションの会を設け、若者の活動への理解を深めた。
 (海外からの視察 4回 台湾・トルコ・モンゴル・国連特使)
 (国内の視察 10回 主権者教育及び文科省による視察を含む)

7 研究開発の実績

(1) 実施日程

業務項目	実施期間 (2019年5月24日 ~ 2019年3月31日)											
	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	
P&Jプロジェクト	←————→											
P&Fプロジェクト	←————→											
R&Aプロジェクト	←————→											
特別講座		←————→						←————→			↔	
運営指導委員会		←————→							←————→			
報告書及びHP		←————→							←————→			
学びあいの場活動		←————→							←————→			

(2) 実績の説明

探究型学習活動を教科、学校の枠を超えた連携のもと発展的な内容とし、高校生同士のネットワークを構築する目的のために計画に基づき、実施した。

① Peace, Justice and Strong Institutions Project

平和な社会のあり方とその構築課題について、教科横断的な学びを通じて、近現代が抱えるジレンマについての理解を深める。多様な文化、価値観に触れるとともに、AIや宗教など、幅広い分野に学びを深めた。現地でのフィールドワーク、広島女学院との交流を通じて、一人ひとりの意見を持った上で、チームで議論し、平和の構築に自分たちができることを発表した。発表や成果物の作成については、東京外国語大学の大学院生の指導を受けた。代表チームの生徒 10名が、連携校であるフロリダの St. Stephen's Episcopal School の授業に参加し、英語で授業を行った。

(連携教科：情報・公民・英語・国語)

(連携校：広島女学院、St. Stephen's Episcopal School、東京外国語大学)

(対象：高校1年全員 年間)

② Partnerships for the Goals Project

SDGs が策定された経緯を理解し、貧困、健康、ジェンダー、水問題、気候変動、イノベーションをテーマとして、その要因について、教科の枠を超えて学んだ。その上で、SDGs に取り組む企業や機関、団体と連携し、関連した社会貢献活動を自ら見つけて参加し、その成果を発表した。社会活動としての SDGs に触れることで、世界とのつながりを意識し、自分たちの行動が SDGs 達成に影響しているという自覚を育んだ。また、学びを他者と共有すべく、校内での主体的なワークショップを開催した。

(連携教科：英語・地歴・生物・保健体育・家庭)

(連携校：渋谷教育学園幕張高等学校)

(連携大学：電気通信大学・東京外国語大学)

(連携団体：福祉法人・民間企業・地域ボランティアなど)

(対象：高校1年希望者・高校2年全員・高校3年希望者 1・2学期)

③ Research and Analysis Project

2～3年にわたる長期な研究に取り組み、フィールドワーク、アンケート、実験を行い、論文を作成した。作成過程において、卒業生の支援をうける機会を設け、スキルを身につけることができた。優秀論文発表会を実施し、下級生や連携校の生徒とともに、自分たちの学びを共有した。

(連携教科：理科・数学・情報・国語・総合的な探究の時間)

(連携校：清教学園高等学校・渋谷教育学園幕張高等学校)

(連携大学：電気通信大学・東京外国語大学・企業)

(対象：高校1年全員・高校2年生全員・高校3年生希望者)

④ 海外プロジェクトの充実と参加支援

オーストラリア研修、海外短期留学、国際会議への派遣等を通して、英語4技能が身についたことを実感させると共に、多様性を学ぶことで、地球市民としての自覚を促した。さらに、将来の目標として、海外の大学において研究を深めたいと希望する生徒に対しては、海外進学への支援に取り組んだ。国際会議で発表した研究内容は、12月に行われた全国フォーラムで文部科学大臣賞を受賞するなど、多くの実績をあげた。

(連携校：渋谷教育学園幕張高等学校・Ruffles Institution・Loreto College)

(対象国：オーストラリア・アメリカ・シンガポール・UK・スペイン・台湾)

(対象：中学3年生希望者・高校生希望者)

⑤ 特別授業・講演会の実施(年14回)

土曜日や夏休みを利用した、多様な言語による構想内容に関する特別授業を年間のカリキュラムに位置づけ、実施した。今年度は、長期休暇期間内だけでなく、放課後も活用することができ、予定を超える回数を実施できた。これにより、連携校・連携大学、企業とのつながりが深まった。

(講演会テーマ AI・環境・LGBT・異文化理解・宗教等)

(対象：全学年希望者)

⑥ 報告書及びホームページの作成(3学期)

年間の取り組みを公表できるよう報告書を作成、また国内外の視察を積極的に受け入れ、活動の周知を図った。また、連携校と協働できるプログラムを検討し、実際に連携校生徒を招待し、事例発表や研修を実施した。

⑦ 学びあいの場の開催(夏休み)

学園の取り組みを公開する機会として、オープンスクールデーを開催した。連携校及び近隣の学校の生徒も参加し、SDGsについて考え、意見を交換する機会を設けた。開催にあたっては、事業拠点校の生徒たちが、ボランティアとして、運営に携わった。

テーマ：SDGsについて考えよう

取り組み例：SDGs 関連本によるビブリオバトル

東京五輪でのペットボトルの消費量を半分にするアイデアソン
気候変動に関する国際的取り組みを話し合う模擬国連活動
世界の貧困対策における公的支援のあり方についての英語ディベート
LGBTQ への啓発活動など社会課題についてのプレゼンテーション

8 目標の進捗状況、成果、評価

- (1) 生徒には、授業アンケートと WWL アンケートの2種類を実施し、SGH からの継続的な変化を成果として分析する予定である。今回は、高校1年、2年のアンケートの実施日は休校となり、4月に延期となったことから、高校3年生のみ分析となった。アンケートでは、地球市民としての意識や意欲がどの程度高まったかに注目した。

項目24 日本がグローバル社会の中で存在価値のある国になるよう自分ができることしたい

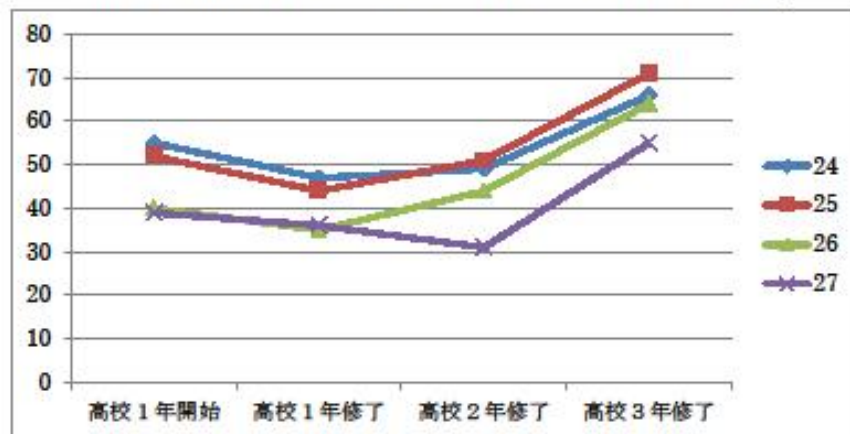
項目25 地球社会が抱える課題の解決に貢献したい

項目26 グローバルリーダーとして活躍したい

項目27 海外の会社や国際会議での発言をしたい

リーダーとして活躍したいという項目だけでなく、地球市民として活躍することを意識する生徒が増えていることが読み取れる。

それぞれの項目で「多いにそう思う」「そう思う」と答えた生徒の割合



- (2) 活動事例における生徒たちの活躍

① Peace, Justice and Strong Institutions Project に関する活躍

- ・高校生G20サミットの開催及びY20サミットのオープニングセレモニーでの発表
※全国から約二百名の高校生たち本校に集まり、AIと教育、少子高齢化と労働不足、ジェンダー平等と働き方改革に関する問題について話し合い提言をまとめ、Y20に提出
- ・第59回国際理解・国際協力のための全国中学生作文コンテスト全国大会金賞

② Partnerships for the Goals Project に関する活躍

- ・第13回全日本高校模擬国連大会 優秀賞
- ・全国高校生フォーラムポスターセッション部門 文部科学大臣賞受賞
- ・第31回知能ロボットコンテスト 下川ロボット「Stella」 チャレンジャーズコース 参加ロボット63台中4位
- ・拓殖大学 後藤新平・新渡戸稲造記念 第21回全国高校生・留学生作文コンクール

- 2019 優秀賞 (3~6位/2,555人)
- ・全国中学生人権作文コンテスト東京都大会 特別優秀賞
 - ・小さな親切作文コンクール 入選
 - ・LGBTQセミナー「ふつうってなんだろう」主催
- ③ Research and Analysis Project に関する活躍
- ・京都先端科学大学主催 高校生論文コンテスト 2019 (バイオ環境学部部門) 佳作
 - ・図書館振興財団主催 第23回 図書館を使った調べる学習コンクール
調べる学習部門・高校生の部
優秀賞・毎日新聞社賞 受賞
優秀賞・読売新聞社賞 受賞
優秀賞・図書館振興財団賞 受賞
 - ・第19回高校生地球環境論文賞 受賞
 - ・東京家政大学生生活科学研究部主催「生活をテーマとする研究・作品コンクール」
佳作
 - ・旺文社主催「第63回 全国学芸サイエンスコンクール 人文社会科学研究部門」
入選
 - ・全国高校生フォーラムポスターセッション部門 文部科学大臣賞受賞
 - ・教育と探究社主催 クエストカップ全国大会 出場
 - ・日本政策金融公庫主催 第7回 高校生ビジネスプラン・グランプリ in TOKYO
東京都知事賞大会 出場
- ④ 海外プロジェクト及び英語を活用する大会での活躍
- ・Global Responsibility 世界高校生会議において
Environmental and Natural Disaster 部門 優勝 Sustainability 部門 準優勝
 - ・高校模擬国連世界大会 優秀賞受賞
 - ・第8回日本高校生パラメンタリーディベート連盟杯
全国大会 第3位 ベストディベーター賞 第1位、第3位
 - ・第8回日本高校生パラメンタリーディベート連盟新緑杯 東日本大会
準優勝 ベストスピーカー賞経験者部門 第1位
ベストスピーカー賞新人部門 第3位
 - ・第8回日本高校生パラメンタリーディベート連盟新緑杯 全国大会 準優勝
 - ・大学生ディベート大会第十六回エリザベス杯 第6位
 - ・JWSDC 世界高校生ディベート大会日本戦 優勝 ベストスピーカー賞 総合4位
※中国や東南アジアのナショナルチームを招いての大会。
 - ・2019年度 WSDC 世界高校生ディベート大会 E S L国 ベスト5入賞
※世界で一番レベルの高い高校生のディベート大会。この成績は日本新記録
 - ・Tokyo Debate Open 準優勝 ベストスピーカー賞 第5位
 - ・第23回 東京都高校生英語ディベートコンテスト 優勝
 - ・2019年度ディベート韓国大会 Korea School Open ベスト8入賞
 - ・パラメンタリーディベート大学大会 Feminism Open 2019 第5位
ベストディベーター賞 第3位
 - ・第23回 東京都高校生英語ディベートコンテスト 優勝
 - ・東京大学主催大学生ディベート大会 第10回銀杏杯 ベスト8入賞
 - ・日本高校生パラメンタリーディベート連盟東京都オープン2020 優勝
 - ・第5回 PDA 高校生即興型英語ディベート全国大会
優勝 ベストスピーカー賞第1位、
 - ・第5回 PDA 高校生パラメンタリーディベート世界交流大会 第3位
 - ・WSDC 世界高校生英語ディベート大会 2020 全日本代表選考試験 2名合格
 - ・第9回日本高校生パラメンタリーディベート連盟杯東京都大会

準優勝 ベストスピーカー賞 第3位

⑤ その他の大会での活躍

- ・第14回全国高校生短歌大会 短歌甲子園2019 3位
※予選全国52校67チーム、本選全国21校21チーム中
- ・第12回全国数学選手権大会（数学甲子園）本選出場
※715チーム中36チームが全国大会に出場
- ・第30回数学オリンピック 本選出場
※全国大会出場相当、全受験者数5,045名中上位217名
- ・第20回若山牧水青春短歌大賞 高校生部門 大賞受賞
※高校生5,563首応募の中第1位
- ・株式会社Nadie 起業（ショップの運営）

⑥ 特別授業・講演会に関する活躍

- ・「AI時代を生きる私たちの命～どうなる？ 医療とテクノロジーがつくる未来～」
（主催：読売新聞社、協力：日本臓器移植ネットワーク）フォーラム参加
- ・トビタテ！留学JAPAN 日本代表プログラム高校生コース説明会開催
- ・高校生環境サミット（開催延期）
- ・主権者教育の取り組み～岐阜の中学生と考えよう～（読売教育ネットワーク）
- ・明日へのレッスンセミナー開催（主催：朝日新聞社）

9 次年度以降の課題及び改善点

年度末に新型コロナウイルス感染症に対する措置が講じられたため、アンケートや成果物の評価に支障がでる事態となり、次年度は残った業務を完遂した上で、新年度を始めることとなる。また海外連携校の休校があいつぎ、大幅な見直しを迫られることも課題となる。

WEBを活用した会議で一定の成果をあげることはできたが、その一方でFace to Faceの関係性が、生徒たちの学びを深化させ、刺激を与えることがわかったので、引き続き実施できるようにすることが課題である。

業務としては、高大連携における大学との連携強化や国内での連携校との交流が引き続き課題であり、各学校の学事暦をみながら学習テーマをそろえ、活動することが弱かったので改善していく予定である。

なお、生徒や教員がICTを使った会議を複数回実施したが設備的な課題があり、WWLに適した容量をいかに確保するかが課題となった。

【担当者】

担当課	学校法人 渋谷教育学園	TEL	03-3400-6363
氏名	河元 保之	FAX	03-3486-1033
職名	事務長	E-mail	kawamoto@shibushibu.jp



研究開発活動報告

I Peace, Justice and Strong Institutions Project

平和な社会のあり方とその構築課題について、教科横断的な学びを通じて、近現代が抱えるジレンマについての理解を深める。多様な文化、価値観に触れるとともに、AIや宗教など、幅広い分野に学びを深めた。現地でのフィールドワーク、広島女学院との交流を通じて、一人ひとりの意見を持った上で、チームで議論し、平和の構築に自分たちができることを発表した。発表や成果物の作成については、東京外国語大学の大学院生の指導を受けた。代表チームの生徒10名が、連携校であるフロリダのSt. Stephen's Episcopal Schoolの授業に参加し、英語で授業を行った。

(対象：高校1年全員 年間)

国語科の取り組み ～比較文化論としての核～

情報科の取り組み

公民科の取り組み ～ヒロシマから戦争を考える～

広島女学院との連携

英語科の取り組み

St. Stephen's Episcopal School との連携 (フロリダ研修)

1 国語科 (現代文) の取り組み：比較文化論としての核

(1) 単元名 『黒い雨』とハリウッド映画 ～比較文化論としての核～

(2) プロジェクトとの関わり

多様な文化・価値観との比較を通して『安全保障』についての多角的な理解を深める」について、もともと高校1年生の夏休みの読書課題として設定していた『黒い雨』(井伏鱒二)を軸とし、核兵器使用に関する描写を含むハリウッド映画と比較することで、核兵器についての被害者側の意識と加害者側の意識とが文化的な表現にどのような差異として表れているのかを考察する授業を構想した。

(3) 教材と教材観

- 『黒い雨』(井伏鱒二 1966 新潮文庫)

『黒い雨』は、広島の被曝体験をその悲劇が風化されつつある日常生活から掘り起こした作品である。本作はその内容上、「反戦・非核」という文脈の中で語られることが多いものではあるが、本授業においては、あくまで核兵器を取り扱った文学的表現を学ぶ一資料として扱う。

- 映像資料 (映画5作品)

あえて娯楽性の高い作品も入れることで『黒い雨』との違いを意識しやすくすると共に、異なるジャンル・制作年度の作品を並べ、アメリカ映画の中にも違いが見つけられるよう配慮した。

- ・『渚にて』(1959) / 『未知への飛行』(1963)

冷戦期に制作されているため、核戦争の勃発が現実的な問題として捉えられており、核兵器を使用することに対する緊張感が伝わってくる。爆発の

威力の強大さに加え、放射線被害という事後の影響への言及がある。

・『トゥルーライズ』(1994)

テロ集団に奪われた核兵器が悪用されるのを防ぐため、核兵器を輸送車ごと海に落とし爆発させるシーンがある。爆発の際に「It's show time!」というセリフがあったり、陸地からさほど離れていない距離での爆発に対し、閃光を見なければ害がないとも取れる発言がなされたりする。また爆発シーンをバックに主人公のキスシーンが描かれるという演出もなされている。

・『ブローケン・アロー』(1995)

地下での核爆発が描かれるが、放射線による影響は地下での爆発であれば問題がないというように受け取れる。放射線よりも爆発の衝撃波による影響の方が前面に描き出されている。

・『ダークナイト・ライジング』(2012)

爆発間近の核爆弾を飛行機で海上へ運び、爆発させるという描写がある。陸地からの距離は定かではないが、陸上で爆発しなかったから全く問題がないとも受けとれる描写がなされている。

(4) 学習の目標

ア 思考・対話能力の強化

- 様々な作品を分析的、批評的な態度で対象化し、そこに主体的に問題を見出し、自分なりの意見としてまとめることができる。
- 自分の意見を他者にわかりやすく伝えることができる。
- 自分とは異なる他者の考えを排除することなく受け入れて吟味し、自分の意見を相対化することができる。

イ 学習内容の理解

- 広島原爆について多角的な視点から考察を深め、多様性に対処する際の軸となる日本ならではの観点を獲得する。
- 文化的表現が、その文化に属する人々の意識と密接に結び付いたものであることを理解する。
- 実際に体験することと表象を介して知ることとの懸隔を実感し、異なる時間・空間を生きる他者と分かりあうための条件について考えを深める。

(5) 学習指導の計画 (全8時間)

事前 夏期休業中の課題で『黒い雨』を通読し、印象に残った場面をその理由と共にまとめた。

第1時 『黒い雨』の印象に残った場面・そこから考えたことを2分間のスピーチにまとめ、3～4人のグループ内で互いに発表し合う。

第2時 班ごとに優れた発表を行った1名を代表として選出し、その代表者がクラス全体に向けてスピーチを行う。

第3時 『はだしのゲン』などの漫画作品などの参考資料に触れ、日本における核表象への理解を深める。

第4・5時 核兵器に関する表現を含むアメリカ映画を鑑賞し、各自で気づいた

ことをまとめ考察する。

第6時 考察をグループ内で共有するとともに、キノコ雲のエンブレムを校舎の壁にあしらった米国の高校を伝える記事といった参考資料に触れ、日米の核兵器に関する文化的な表現の違いについて考察する。

第7時 映画『インデペンデンスデイ』の映像とシナリオを用いたグループワーク。

第8時 授業を通して、自分が理解したこと・感じたこと・考えたことを文章にまとめる。

(6) 全体所見・生徒の反応

- 学習前には、原子爆弾によって広島や長崎の人々がこうむった被害について、主題的に学んだこと、考えたことのない生徒が数多くいた。その生徒たちは、文章や漫画による具体的な表現を通じて核兵器の被害を目の当たりにし、衝撃を受けたようだった。
- アメリカと日本では原爆投下に関する認識が異なっているということを理解していた生徒は、帰国生を中心に多くいた。しかし、彼らにとっても、映画という身近な娯楽作品を比較文化論的な視点から実際に分析する作業は新鮮であったようである。使用した側と使用された側との間の核兵器の認識という比較に加え、冷戦中と冷戦後とでアメリカ国内での核兵器の描かれ方が変化しているという通時的な比較にも目を向け、表現と社会的意識との関連性について理解が深まっていた。
- 本単元では広島での研修よりも前に、自分の考えをまとめる場を設けることを原則とした。研修後に小論文を書く機会があり、事前と事後の意識や考えの変化を明確にするためである。また、事前に考えを整理することで、現地での学びの深化が期待できる。現地での研修では、被爆体験を理解することの難しさ、その理解を次世代へ伝えていくことの難しさと重要性とを深く痛感していた。異なる歴史をもつ者同士が分かりあうために必要な努力と知性について、理解を深めたようである。

《使用教材》

高一現代文『黒い雨』ワークシート 組 番 氏名

▼井伏鱒二『黒い雨』を読み、最も心に残った場面を抜き出してください。

【例】○ページ(新潮文庫版のページ数を基本とする)
 □□に△△が××だった。*本文の抜き出し

▼心に残った理由とそこからあなたが考えたことを書いてください。

【理由】

【考えたこと】

▼次のアンケートに答えて下さい。

(1)あなたは、これまでに核兵器が登場する作品や、核兵器の存在が影響している作品(映画・映画ドラマ・アニメ・漫画など)を見たことがありますか？あったら作品名を教えてください。

(2) (1)で答えた作品を見たとき感じたことや考えたことがあったら教えてください。

1年 組 番 氏名:

高1現代文『黒い雨』

●感想・意見・反省など	★発表者:	★発表者:	★発表者:	★発表者:	★発表者:
	★発表者:	★発表者:	★発表者:	★発表者:	★発表者:

『黒い雨』発表 感想記入用紙

●アメリカ映画における核兵器の表現

以下に挙げた映画の各場面を鑑賞し、核兵器そのものや核の使用に対する表現上の特徴について気づいたことや考えたことを空欄に記入しましょう。その際に、以前に授業で扱った『黒い雨』や補助資料を参考にして日本とアメリカにおける表現の違いに注目すること。

渚にて(1959)
ON THE BEACH
監督:スタンリー・クレイマー



あらすじ: 第三次世界大戦が勃発し、世界全土は核攻撃によって放射能汚染が広がります。最終的に残った南半球の一部地域に人々が暮らすだけになっていく。そんなある日、本国に帰国出来なくなったアメリカ原子力潜水艦がメルボルンに入港する。そこで艦長ターズは美しい女性モイラに出会いしばしばの休日を過ごす。その地にも死の灰は確実に落ちていた……。

トゥルーライズ(1994)
TRUE LIES
監督: ジェームズ・キャメロン



あらすじ: 秘密情報オメガ・セクターの連綿情報員ハリール・タスクーの扱いは、妻ヘレンが享受しているかもしれないという事。職務乱用で妻の調査を行うハリールだが、ヘレンと共に、核武装したテロリストに捕らえられてしまう。

未知への飛行(1964)
FAIL-SAFE
監督: シドニー・ルメット



あらすじ: アメリカの軍事コンピュータが、誤ってソ連に対する核攻撃指令を発してしまふ。命令を受けた爆撃機は直ちにモスクワへ向けて発進。待避可能ポイント＝フェイル・セーフを超えてしまう。ソ連側の攻撃部隊も、爆撃機を撃墜することができず、ついに全ての手段は失われる……。

ブローケン・アロー(1996)
BROKEN ARROW
監督: ジョン・ウー



あらすじ: 二基の核弾頭を搭載したステルス戦闘機の訓練飛行中、少佐ヴィクター(トウ・ウォルター)によって機がへ破り出されるヘイル大尉(スレイター)。全ては機を強奪するためのヴィクターの企みであった。空海に落下したヘイルは公衆監視員のテリー(マシス)の協力を得て、ヴィクターと核の跡を追う……。

ダークナイト・ライジング(2012)
THE DARK KNIGHT RISES
監督: クリストファー・ノーラン



あらすじ: ジョーカーがゴッサム・シティを襲撃するもの、ダークナイトが死闘を繰り広げ破産してから8年後、再びゴッサム・シティの破壊を企てるバイン(トム・ハーディ)が現われ……。

あらすじと写真はyahoo!映画 movies.yahoo.co.jp より

◀

★広島研修の経験を経て、核兵器に関する日本とアメリカにおける表現の違いについて考察してきたこれまでの授業で理解したことをまとめ、感じたことを考えたことを書きましょう。(1)〇すべし」というように明確な「答え」が出ていなくても、いま抱えている「問い」をその半筆書き記しておきましょう。

2 情報科の取り組み

(1) 本科目の目標

情報の授業では、現在の情報社会に対応していくために、情報を適切に収集・処理・表現するための情報活用の実践力が必要となるため、これらの基礎的な知識と技能をコンピュータや情報通信ネットワークなどの活用を通して身につけていくという狙いがある。さらに社会生活の中で情報技術が果たしている役割や及ぼしている影響を理解し、情報モラルの必要性や情報に対する責任についても考えていくことを念頭に置いている。

(2) プロジェクトとの関わり

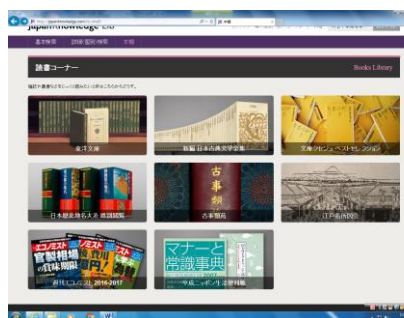
情報科では、公民科、英語科、国語科との教科連携を図り、「プロジェクトの学習のまとめ」として、ホームページを2学期に完成させた。

本校では高校1年次の10月に校外研修行事として広島を訪れている。この事前学習として調べる項目を生徒自ら主体的に選定しホームページとしてまとめた。この授業を通じて、これまでに培ってきた情報発信力や情報モラルの知識を応用させ、情報活用の実践力を発揮する機会を与えることができた。なお、情報モラル教育については、各教科・行事・校外研修などそれぞれの機会と場面において中学1年次より発達段階に応じた指導を継続している。

(3) 学習指導の計画

本科目は実習が多いため、情報科と数学科の教員でチームティーチングを行っている。ホームページを作成するにあたり、基本的な知識や用語については授業プリントにまとめて授業を進める。検索エンジンやブラウザ、便利な検索術、サーバーやインターネットの仕組みなどを理解させる。情報源がインターネットからの情報に限らないように、本校図書館と連携してレファレンスツールと参考図書（辞書・事典サイト「ジャパンナレッジ Lib」、朝日新聞データベース「朝日けんさくくん」、読売新聞データベース「スクールヨミダス」を含む）を授業で紹介し、いつでも活用できるようにしている。同時に、制作物をまとめる上では著作権についての考え方も重要で、情報モラルという観点から、ルールの説明や参考文献のまとめ方なども理解を深めさせ実践していくことが大切である。

■レファレンスツールの一例



JapanKnowledge Lib



朝日けんさくくん



スクールヨミダス

ホームページの作成においては、HTML言語を理解させて、ソースの基本となる代表的な「タグ」を用いながら、今後の作成に応用が利くように学習を進行

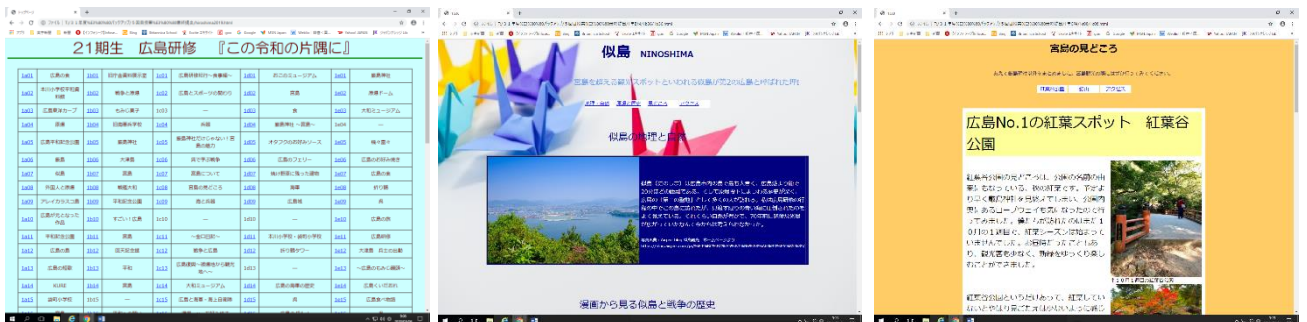
している。ファイルの種類や拡張子の違いについて理解させ、文化の発展をささえる著作権の概念、ホームページでの表の作り方と画像の貼り方などを授業で説明して実践させることを繰り返し、最終的には各々のページにリンクさせて「学習のまとめ」のページを制作した。

■授業プリントの一例



■21期生 広島研修 学習のまとめ

広島地域周辺に関するキーワードを各自が選定し、インターネット、文献、現地調査などから調べ、HTML言語を用いてホームページをまとめた。調べる項目は「歴史」「産地」「みどころ・おすすめ情報」「体験」「インタビュー」などを中心に、広島研修の学習のまとめとしてふさわしい内容を取り上げて興味関心を高めることができた。



21期生 広島研修 学習のまとめ

似島

宮島の見どころ



小学校と戦争



広島研修紀行 ～食事編～



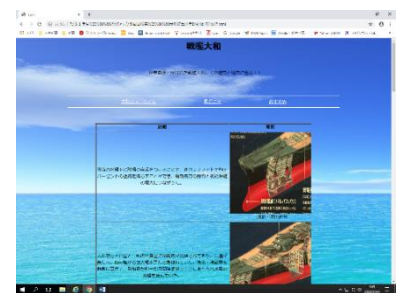
広島の伝統的工芸品



広島と海軍・海上自衛隊



折り鶴について



戦艦大和

(4) 今年度の取り組みを振り返って

——協働型探究活動による、SDGs 達成を担う次世代地球市民の育成——

本テーマにおいて情報科では知識・発信・行動を目的とした Project Hiroshima の連携授業を展開した。ホームページ作成を理解しつつ、事前に調べた内容や研修先で得た情報を組み込んでまとめ学習を遂行した。共通テーマである平和学習はもとより、班別で現地研修を実施し、WWL コンソーシアム構築支援事業プログラムの1年目としての学びを実践することができた。

3 公民科（現代社会）の取り組み：ヒロシマから戦争を考える

生徒たちにとって現在の国際情勢はヒロシマから考えるための生きた教材であり、議論が活発に行われるよう授業を工夫し、広島でのフィールドワークを通じて生徒各人がヒロシマからどう考えるのかを期待しながら授業を進めていった。広島への原爆投下だけをテーマとするのではなく、1学期の『2050年の世界』の授業においては、アメリカ合衆国トランプ大統領の誕生・米朝会談・米中覇権争い・中東情勢など時事問題を取り上げることや、前年（中学3年次の公民の授業）の日本の安全保障政策（集団的自衛権）や憲法改正議論などとも結び付けて、「戦争」とは何かという広いテーマについて考えられるように配慮した。また、国連を中心とした核兵器禁止条約の採択、英語表記された「ヒバクシャ」の存在が世界に紹介されるなど、人類社会の前進にも注目をさせることに留意した。

(1) 事前学習

前年（中学3年次の歴史の授業）で取り組んだ、第二次世界大戦と日本の十五年戦争については「なぜ戦争に向かったのか」を多角的に考えた経験を踏まえ、WWLでは「戦争の加害と被害」という視点から考える授業に取り組んだ。ABC兵器の非人道性、安全保障と核の抑止という観点から考えを深めていった。原爆関連のDVDはNHK特集の『“ヒロシマの声”がきこえますか～生まれ変わった原爆資料館』や、NHKアナザーストーリー『オバマ大統領～広島への地へ歴史的訪問舞台裏～』を視聴した。また、放課後にNHKドキュメンタリー『忘れられた“ひろしま”～8万8千人が演じた“あの日”』や南京事件のルポなどを、任意で視聴する機会も設けた。

(2) 学習指導の計画…生徒が考える「ヒロシマから考える事前学習」

「核兵器の使用を禁止している一方で、核を保有しているのはなぜか」といった問題を提起した。ここであえて「安全保障の理想と現実」という2つの視点や立場から議論を交わした。また今年度は世界情勢の大きく変化したため、例年行っていたSGHプログラムを大幅に修正することとなった。

ア 工夫・配慮した点

戦争に対する理解、国際法上禁止される兵器、戦後の核開発と軍縮、現在の状況を整理したが、前年までの反省として、被害者視点に偏った研修になっている点を修正し、多面的に学べるよう下記の点に留意した。

- 議論難民を出さない。全員が意見を言える授業にするよう配慮した。
- 熱い議論ができるようなグループ分けを行う。お互いの立場がかみ合わない方がよく、お互いに正当性を主張することができるようにする。いくつかの案の中から、原爆投下直後の広島市民の立場、原爆を投下したトルーマン大統領（軍部）の立場、国連安全保障理事会常任理事国5か国の立場の3グループに分けた。1時間でグループの主張を調べ話し合いまとめさせた。
- 1クラス約40人なので、生徒に希望を聞きA・Bの2グループにそれぞれ4つの立場に分かれた（1班が4～6人）。議論では自分の立場をメッセージ・ボード（画用紙）に書き発表し、その主張内容について3グル

ープそれぞれが1対1で議論をした。

イ 実際の授業を通じて

この議論から各立場によって「核兵器を廃絶すべき」、「核の抑止力は必要」、「積極的に保持し使用すべき」という意見に分かれ、日本政府としてはどの立場に立つべきかを考えることにもつながった。クラスによって、またグループによってもアプローチが異なり、議論の方向性も異なることがあった。しかし、8つのグループが、「主張」と「議論」と「まとめ」という3段階を経ることで、多角的な視点を持つことができたと感じている。現段階では日本を取り巻く東アジア情勢から、アメリカとの同盟関係を中心とした核抑止論を支持する生徒が多かった。

ウ 授業の振り返り...生徒たちへのアンケート結果

当初の授業の目的は達成について...クラスの反応・振り返りシートより

- ・アメリカ合衆国という存在の大きさ、そして大統領の意向によって世界秩序が大きくかわることへの驚きを感じ取ることができた。
- ・核の抑止力という発想が、現時点の世界で弱まっている。核の使用を否定しない状況を踏まえ、米朝対話や中東情勢を見ていく必要がある。
- ・日本で暮らす自分たちにとって「核廃絶」はできないという印象。というよりも議論への無気力感もある。結果的には「抑止論」が圧倒的多数を占め、現状を維持することを望んでいる。
- ・議論難民にならず活発に参加し議論できた。意欲的なチームの主張に刺激され、反論の議論などが深まっていったと思う。

エ 課題の発見と提案

昨年同様、流動的な世界情勢の中で、どの視点から見るとかによって考えが変わる。広島でのフィールドワークで、考えのきっかけや、自分なりの答えを見つける傾向が高いと感じた。ロールプレイのための事前調べにより多くの時間を取る必要があると感じた。トランプ政権誕生は世界と歴史を受け身になってみる傾向が高まってきている。世界情勢は激変しており議論の枠組みがわずか1年毎に違っている現状だけに、最新の情勢をみて教材を精選し授業を組み立てる必要がある。

オ 話し合いを終えてのまとめ(改善策)

現在の国際情勢そのものが、議論を生む雰囲気がなく、最後は大国の論理によって決まるのだと言ったあきらめムードを払拭するため、安易に立場を分けなくて、討論⇒議論⇒交渉といった国際社会の中で、廃絶や抑止論に導く話し合いができたチームもあったが、やや議論の難しさが増した。

(3) 広島研修(10月9日~11日)

ア 広島研修の目標

- ・ 広島の過去と現在を知り、戦争と平和について考える。
- ・ 原爆体験を後世に伝えることに努めている広島の方々の思いを理解し、大切にす。
- ・ 自発性と自律性を大いに発揮し、各人が常に問題の発見と解決に努める。

- ・ 事前調査、現地での一歩踏み込んだ研究から得た知識や考えを海外へ発信する。

イ フィールドワークの行程

- ・ 平和資料館とボランティアのガイドの案内の下、碑めぐりをおこなった。
- ・ 原爆死没者慰霊碑前に集合し、大地讃頌を合唱。原爆の子の像に千羽鶴を手向けた。
- ・ 宿舎にて語り部さんのお話を聞く

ウ その他の主な平和学習関連の研修先

- ・ 大津島フィールドワーク...人間魚雷「回天」を秘密裏に製造していた島を訪れ見学
- ・ 江田島術科学校および資料館、呉の大和ミュージアム等の見学
- ・ 広島湾の似島でのフィールドワーク

エ 研修のまとめ

広島研修は平和学習のフィールドワークという意味をもっていた。自分の目で見て、語り部さんのお話を聞いて、自分が感じとったことから考える体験をした。研修後の授業では45分間で「ヒロシマから戦争を考える」小論文のテストを行った。

英語や現代文の授業でも学んだことを生かし、それぞれの生徒がテーマを決めて書いた。この論文集「20期生 ヒロシマから考える」に一部を掲載した。

■ 2学期中間テストより

◎ヒロシマから戦争を考える(2学期小論文) 21期 1組

タイトル	真の平和とは
<p>世界から戦争がなくなる日はくるのだろうか。二十一世紀を生きる人の多くは、二度の世界大戦から戦争の悲惨さ、愚かさを学んで平和を求めている。今、SDGsを国の目標としている。貧困の撲滅、格差の是正は、全て地球上から戦争をなくす事と直結しているのだ。しかし私は、人間が人間である以上、世界から争いをなくす事は不可能であると考え、人は必ず自己を守ろうとするからだ。他者よりも自分を大切にしたい、他人よりも良いものを望み、昨日よりも良いものを望む。自分よりも優位にある者を妬み、深い嫉妬の念を持つ。こうした人間の根本的な性質や欲求がある限り、人間と人間の間には争いは生まれる。現に、アメリカなどの先進国は自国を危機に晒しかねない途上国に対し、経済制裁や軍事制裁をかけている。これは先進国の自己保存の心と途上国の嫉妬の情という二つの人間の心で動かされているのである。では、人間は己の悲しい性質とたた然と受け入れ、他者と戦い続けるしかないのだろうか。私はそうは思わない。確かに、人が人を殺す戦争の終焉は人間が人間でなくなった時初めておとされるものかもしれない。人間が人間でなくなるというのは、人間が他者に関心を持つにできなくなるということだ。他人と関わりない、孤独の中ならは、他人への攻撃欲も被害感情もおこらない。それは無条件の平和である。しかし、これは果たして、平和と言えるのだろうか。</p> <p>人間は無条件の平和はもとめていない。他者と殺し続ける日々を望んでいない。なぜならそれは「よい」のか。人間は戦争と戦う心さである。人間が他者と争う心をもっている生きた物であるならば、その己の心と戦わなくてはならないのだ。オバマ大統領は広島で「核を放棄する覚悟を持って戦わなければならない」と言った。これは人間の自己保存の性質と勇気を持って戦わなければならないということだ。</p> <p>我々は、アメリカの核の傘の中で、原爆は「悲しかった」とし、戦争は「愚かた」と論じている。これは愚かな行為ではないのか。平和を実現したいのなら、人は自己の人間性をもつと戦う必要がある。いや、もうすでに己と戦っている人類もいるのだ。一部の被爆者や、偉大な大統領のように。</p>	

■広島女学院との連携

広島研修では、連携校である広島女学院を訪問し、それぞれの広島への思いを話あう機会を設けた。

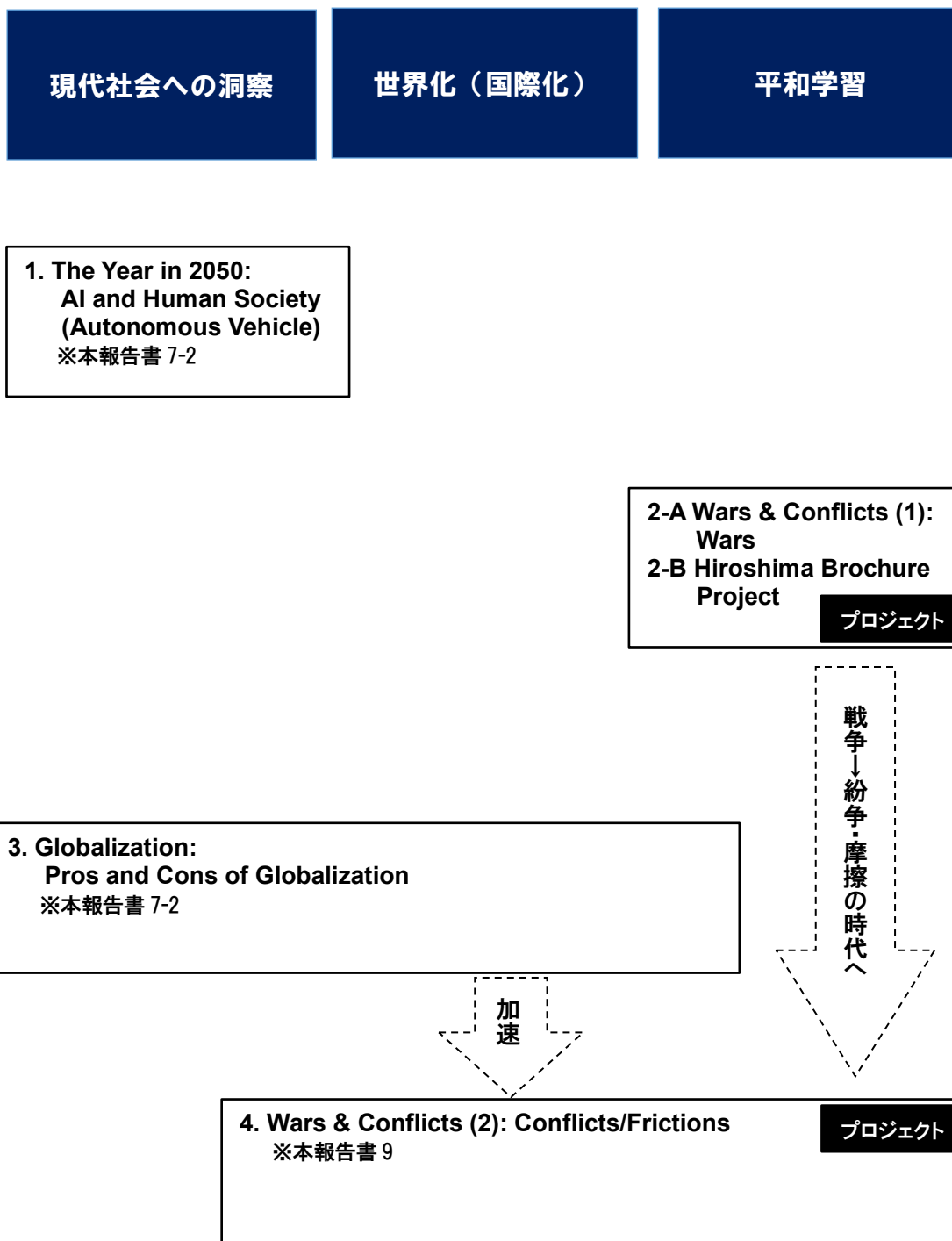
事前に打ち合わせを行い、ディスカッションテーマをまとめ、事前学習に取り入れた。相互でプレゼンテーションを行ったあと、グループに分かれてディスカッションを行った。短い時間であるが、これをきっかけに、その他のプロジェクトへの参加が始まるなど、交流が拡大している。また、広島女学院とともに、核廃絶にむけた署名活動に協力した。

《交流会の様子》



4 英語科の取り組み

本校の英語科では、高校3年間の学びとWWLの関わりについて、下記のような概念図をもとに構成した。これにより、教科横断型による学習（横のつながり）と英語科としての取り組み（縦のつながり）が明確になり、他校との連携共有もスムーズになることが期待される。



(1) プロジェクトの関わり

「現代社会」「現代文」の授業で扱っている「広島・長崎の原爆投下」に関して、一言で言えば“put it into perspective”（大局的に見る）という点を意識して設計した。具体的には、過去年度の「広島への原爆投下の是非を問う」といった深さを求めるよりも、次の点を強く意識した。

日本のみからの視点では、ともすると「唯一の被爆国」と被害者視点で捉えがちだが（無論、水爆実験で被害を受けた地域は日本以外にも存在する）、それ以外の視点を得るため、次を主軸に置いた。

- 原爆投下が、米国も含めて、世界各国でどのように扱われているか
 - 被害者ではなく加害者としての日本
 - 日本国外での、日本人の被害としての、米国における日本人強制収容
- また、広島へのフィールドワーク実施後には、学びをいかして、Brochure を作成し、海外連携校との学びに繋げた。

(2) 学習指導計画

Wars Project

ア 本章特有の学習の狙い

様々な資料を提示し、多様な考え方に触れるとともに、英語 4 技能を活かした活動を継続的に行った。また、連携大学の大学生をメンターとして招聘し、授業への参加、制作物の評価など行い、生徒個人への細かなフィードバックにつなげた。

イ 内容

- ・ How the Hiroshima Bombing Is Taught around the World
＜素材＞ posts on Reddit (via Washington Post) (Washington Post サイト記事からリンクされている掲示板) ※記者等による記事ではなく、一般個人の経験の投稿
＜内容＞ 日本・米国から離れ、第 3 国において（ヨーロッパ・アフリカ・南米・アジア等 10 カ国）、原爆投下がどのように教えられているか（4 国は空欄として、どの国か議論して推測させる）
- ・ Textbook Approach, The Atomic Bomb: Hiroshima and Nagasaki
＜素材＞ Teachinghistory.org (サイト：米国教員用資料)
＜内容＞ 米国教科書における原爆についての記述の変遷（終戦直後は中立的な立場での記述が一般的だったが、特に 21 世紀に入って、より深く価値判断に踏み込んだものが増加してきた）
- ・ What Japan Did, Part 1: Sook Ching Massacre (Singapore)
＜素材＞ Understanding Our Past Singapore: from Colony to Nation (excerpted)
＜内容＞ シンガポール歴史教科書（国定）における、日本軍の行為の記述
- ・ What Japan Did, Part 2: Pearl Harbor (US)
＜素材＞ kidzworld.com (サイト：小中学生向け学習用) / Wikipedia

<内容> 真珠湾攻撃の概要

- Propaganda

<素材> 諸ウェブサイト

<内容> パールハーバーがどのように受け止められたか (“Remember Pearl Harbor”)、当時の米国の戦争プロパガンダ広告

※それ以外の、日本も含めた、プロパガンダ広告も同時に紹介

- Internment of Japanese Americans

<素材> History.com / Densho.org / Britannica School / various YouTube videos

<内容> 在米日本人の強制収容に関する概略

※放課後に、NHK ETV特集「シリーズ日系人強制収容と現代 暗闇の中の希望」上映

- 主な追加配布資料

アメリカの歴史教科書に描かれた日本 ※日本語論文

<素材> 琉球大学教育学部 アメリカ教育プロジェクト 2000年度研究集録

<内容> アメリカの教科書で「もしあなたが大統領だったなら原爆を投下したか」といった議論の問いが成されており、日本以外でもこのように議論され、考えられているという実態

It truly was a vision of Hell' - a Hiroshima survivor speaks out

<素材> Public Radio International (サイト：公共ラジオ局)

<内容> ある被爆者の、原爆投下後の惨状を生々しく伝える体験談

ウ 担当所感・生徒の反応等

2学期末の授業アンケート、(7-2「2050年の世界」同様、人数が限られているが) 学年末アンケート等も参照しつつ挙げると、

➤ 難易度は高かったという声が多かったが、興味関心も高く、極めて真摯に授業に参加していた

➤ 「興味深かった Unit は? (複数回答可)」という問いへの答えは (19名から 36 票なので統計的正確さは差し引きつつ答えを記すと)、(3) : 9、(1)(2)(5) : 各 7、(4) : 6 と、ほぼ同等であるが、シンガポール教科書の記述が最大であった。また、授業アンケートや生徒との会話からも、確かにこの Unit が最も印象に残っただろうことが伺い知れた。

➤ アンケートの声には、次のようなものがあった。

◇ 「自国以外の視点から戦争を考えることの重要性」

◇ 「太平洋戦争に関して、多角的な視点で、英語を媒介として知ることができて、本当にいい経験になりました」

参考：教材抜粋

(1) How the Hiroshima Bombing Is Taught around the World

TASK 1. Imagine how the Hiroshima Bombing is taught around the world.



TASK 2. (1) Guess the countries (blank 1-4) from the context.

(2) OPTIONAL: Read the rest to find out more about TASK 1.

1

I only did history up to high school, and **ww2 history mostly covered the Japanese invasion and subsequent horrific crimes they committed in our country.** The war ended when the Americans dropped the bombs, after which the Japanese surrendered unconditionally and returned us to the British (we were a crown colony back then). **The main questions raised were not why the bombs were dropped, but why they were dropped so late, and only after so many died and suffered.** Pearl Harbor was covered a little, so we had an idea why America joined the war, and **the sentiment I got was that if not for the bombs we might still be a Japanese colony.** (略)
My grandparents, who were alive during the war, would have been perfectly happy if a dozen more had been dropped. → 解答：Singaporean

2

here. (略)
Nowadays, when we were taught this important moment in history, the bombing of Hiroshima and Nagasaki was seen as a stepping stone that eventually provided the opportunity to proclaim our independence. Very little emphasis is given on the suffering of the people in Japan - which is consistent with the portrayal of Japan at that time as a cruel invader to our homeland. Fortunately, since our independence and Japan's revival from the bombing, we have seen a strong bilateral cooperation in many aspects - hopefully a sign of healing and reconciliation. → 解答：Indonesian

6

In it was explained and filed away under the category of atrocities of WWII, right up there with the rape of Nanking and Holocaust.

In post-USSR Russia they added Stalin's atrocities to the list.

7

I'm from . When I was in school **it was taught as the horrible means to the good ends which was the end of the war.** America was portrayed as the good guys in the

war, who were put in a difficult position and had to make a tough call, which may or may not have been right or wrong.

8

I'm French. In high school, the Hiroshima bombing was taught in parallel with Nazi extermination camps, as an illustration of how WWII used science as an instrument for death, and the epistemological consequences in intellectual debates and global policy.

10

A Canadian. We spent about a week in class learning about Hiroshima & Nagasaki, I remember *Sadako and the Thousand Paper Cranes* was a big part of that unit. Must be different to teach now that kids can go home and pull up images of radiation poisoning instead of just seeing a ruined city on the overhead projector.

B I'm an American and I read *Sadako and the Thousand Paper Cranes* in middle school for our history class. Heartbreaking story... :/

(3) What Japan Did, Part 1: Sook Ching Massacre (Singapore)

2 The Japanese regarded the Chinese as their enemies because the Japanese soldiers had met with strong resistance during their invasion of China. Before the outbreak of war in Singapore, the Chinese in Singapore had actively helped China in its fight against Japan's attack as well. Moreover, in the Battle of Bukit Timah, the Chinese volunteers put up a fierce defense against the Japanese troops. This made the Japanese hate the Chinese even more. To punish them, the Japanese ordered all Chinese men between 18 and 50 years old (sometimes women and children too) to report at the mass screening centres. There, they were questioned by the Japanese. There was no proper way of deciding who was anti-Japanese. At some centres, local informers wearing hoods or masks would simply point out certain people as enemies of the Japanese.

The Japanese took us to Bedok. There were about 90 of us. When we alighted from the lorry, we were still with our hands behind our backs. In the open, they pushed us down to the trench and asked us to stand up. The order came and then they would just shoot. So all those who died would fall down. I was hit on my knee but I was still alive. So when the first man dropped dead, I fell with him. Then the third man covered me on top. To make sure all were dead, they gave a third fire, Another ten rounds, bomp-bomp-bomp. Then they moved to the next group. They finished the whole thing in about 20 minutes. Everything ended.

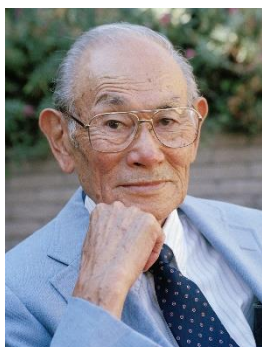
- Chan Cheng Yean, a war survivor

Adapted from an oral essay account in "The Japanese Occupation 1942-1945" by Tan Beng Luan and Irene Quah

(5) Internment of Japanese Americans

10 After staying at the assembly centers for a few weeks or months, the Japanese Americans were then moved to internment camps located in isolated areas far from the coast. Each camp was like a town; it had schools, post offices, work facilities, and even farmland for

growing food and keeping livestock. This was all surrounded by barbed wire and guard towers; anyone who tried to leave would be shot.



Fred Korematsu (1919-2005)

Discussion Questions

1. How does a democracy weigh individual rights against national security?
2. Who is considered a “real” American [Japanese]? Does this change during times of fear?
3. What is *our* responsibility to citizens and immigrants denied their constitutional rights?

Hiroshima Brochure Project

ア 本章特有の学習の狙い

広島研修旅行（10月中旬、2泊3日）で実際に現地を訪れる経験も含め、米国の高校生に向けて、発信したい内容を考え、発表する。

イ 内容

- ① 授業 10 時間を使い、広島と戦争に関する話題について、米国フロリダ州 St. Stephen’s Episcopal School (以下 SSES) の高校生に向けて、他教科や実際の研修で学んだことを元に、アメリカの高校生に広島を紹介するパンフレット（ブローチャー）を、全て英語で、パワーポイントスライド（または Word 等で A 4 片面）4～5 枚製作する。また、4 分間の発表の準備を行う。
- ② うち、第 5～10 回目の授業各回で、1 班 10～20 分のアドバイスを、東京外国語大学メンター（大学生・院生）11 名から頂く。公平を期すために、メンターは各班担当を固定するのではなく、回ごとに入れ替わる。
- ③ 4 分間の発表のジャッジもメンターが担当し、発表後は 2 分の Q & A がある。主観を排すため、教員は担当しない。
- ④ ジャッジは、発表のある週に、オンラインで内容を確認し、評価を与える。

9 月	3～5 人班で、パンフレット（ブローチャー）のテーマを決める。
9-11 月	テーマが設定できた班から内容のアイデア出しを行い、パ

上旬	パンフレットを作成していく。 東京外国語大学の留学生が、メンターとして付き、英語にて a)アイデア出し b)テーマ設定 c)デザイン d)英文添削やプレゼン指導を行う。
10月中旬	広島研修。各自、班ごとに決めたテーマに基づいて、インタビューや現地調査を行う。
11月上旬	パンフレット完成。SSES の生徒と作品をシェアするために、ウェブサイトにパンフレットをアップロード。
11月中旬	プレゼンテーション・セッション。パンフレットの良さがうまく伝わるように、各自プレゼンテーションを用意。評価には、東京外国語大学の留学生があたる。
12月上旬	パンフレットを SSES の教員と東京外国語大学のメンターに評価してもらい、それをプレゼンの評価と総合して、上位 14 チームを選考。 校内選考の結果を SSES に送り、その中からトップ 2 を選んでもらう。
12月中旬	SSES がトップ 2 を決定。学年集会にて表彰式。本年度は 10 名の生徒が選ばれる。
2月初旬	WWL フロリダ研修実施 ※詳細は「WWL フロリダ研修」の項を参照

ウ 担当所感・生徒の反応等

(ア) Wars で意図していた「大局的に広島、長崎を位置付ける」ということも踏まえた上で、真摯に本プロジェクトに取り組んでいたことは、素直に評価される。

(イ) アンケートの「一番気づきが大きかったことは？」に対する声には、次のようなものがあった。

「外国の人が原爆をどう捉えているかが知れて、もっと日本が主体となって発信しなければ何も進歩しないということに気づけたことです」

「日本人は知らず知らずのうちに『原爆＝広島、長崎』と考えていることです。私たちのテーマは psychological distance of nuclear weapons だったのですが、最初、数直線を作ろうという話になっていました。ですが、発表の 2 日前に『広島の人が 0 でも、アメリカの人を 100 の位置に置くのって間違っていないか?』と気づきました。話し合いの途中、何度もフェアな視点で話すことを確認したのにも関わらず、知らず知らずのうちに偏った見方をしていたことが個人的にショックでした。」

「世の中には様々な情報が溢れかえっていて、それらは調べようと思えばすぐに得ることができ、その一步は簡単に踏み出せるということ」

(ウ) このプロジェクトの満足度は、何と云っても、ご協力頂いている、東京外国語大学メンター様ならびに SSES の授業で使っていただけるという、コミュニケーションにおけるリアリティ、密度にある。この枠組みは、

今後も維持していきたい。

Saint Stephen's Episcopal School との連携 (フロリダ研修)

- ア 日程: 2020年2月1日(土)~2月7日(日)
- イ 担当: 岡祐司 (渋谷教育学園渋谷高校)、Mr. Patrick Whelan (Saint Stephen's Episcopal School)
- ウ 経緯: ※SGH での取り組みを継続し、今回が6回目の派遣であった。
高校1年一般英語科を対象としたSGHカリキュラムの一環。
生徒は9月より11月まで Hiroshima Brochure Project に取り組み、広島を海外に発信するパンフレット (英語) を作成した。全36班の中から、パンフレットの完成度・英語での発表・東京外国語大学留学生とのやり取りを総合的に評価し、まず14班を選抜した。その中から、米国フロリダ州にある連携校の Saint Stephen's Episcopal School (以下 SSES) が上位2班を選び、SSES にて研修を行った。
- エ 事前学習: 計8回 (冬休み~研修前まで。昼休み・放課後を使用): 研修趣旨・概要説明、発表準備
- オ 研修内容:

2/1 (土)	09:00 成田空港出発 ※途中、ダラス州ダラス・フォートワース空港で乗り継ぎ 15:09 フロリダ州タンパ空港到着 16:00 学校のスクールバスで SSES のあるブレイデントン市に向けて出発 16:45 SSES の教室で、ホストファミリーと対面、帰宅 ※以降、家族ごとに自由時間
2/2 (日)	終日 ホストファミリーと過ごす
2/3 (月)	7:50 ホストファミリーと登校 8:00 学校案内 (ガイドとして代表の SSES 有志生徒が同行) 8:50 学校のマスコットと記念撮影 9:00 スケジュールの確認 9:35 クッキーブレイク 9:50 ①Friendship Bridge (Water is Life で本校を迎えるクラス) で小学3年生と交流 10:15 ②高校生の中国語の授業に参加 11:00 ③小学6年生と交流 本校の学校紹介のビデオ、クイズ、折り紙 11:40 ④「Modern World History」授業 (日本の歴史の授業及び教科書における太平洋戦争の扱い方、核兵器の芸術における表現方法とその変遷 発表・議論) 12:40 昼食 13:20 ⑤「AP World History」授業 (④と同内容の発表)

	<p>※AP：習熟度授業の上位クラス</p> <p>14:10 ⑥Mr. Whelan との意見交換</p> <p>14:30 ⑦中学生の Global Leaders Club によるウェルカムパーティー</p> <p>15:00 ホストファミリーと下校 ※以降、家族ごとに自由時間</p>
2/4 (火)	<p>7:50 ホストファミリーと登校</p> <p>8:00 ⑧「Modern World History」授業 (④と同内容の発表) ※①とは別クラス</p> <p>8:50 ⑨高校生と意見交換</p> <p>9:15 チャペルへ移動、準備</p> <p>9:40 ⑩チャペルにて自己紹介、本校の学校紹介のビデオ</p> <p>10:15 ⑪「Journalism」授業に参加、一部生徒はインタビューを受ける</p> <p>11:00 昼食、カヤック体験ができる近くの川まで移動</p> <p>12:00 ⑫カヤック体験 (2人乗りボート) @Robinson's Preserve 自然観察</p> <p>14:30 SSES に戻る</p> <p>15:00 ホストファミリーと下校</p> <p>※以降、家族ごとに自由時間</p>
2/5 (水)	<p>7:50 ホストファミリーと登校、荷物を預ける</p> <p>8:00 ⑬音楽の授業 (歌、楽器) に参加</p> <p>9:40 Team Success (チャータースクール) へ移動</p> <p>10:00 ⑭Team Success の生徒と交流 昼食、本校の学校紹介ビデオ・日本紹介のプレゼン</p> <p>12:45 SSES に戻る</p> <p>13:00 ⑮小学6年生と校庭でスポーツ (キックボール、バスケットなど)</p> <p>14:30 ⑯学園全体の校長 (Dr. Pullen) /Mr. Whelan と研修振り返り</p> <p>14:55 バディとお別れ、記念撮影</p> <p>16:00 SSES を出発</p> <p>17:00 Linger Lodge (ワニ肉が食べられる個性的なレストラン) で夕食→タンパ空港へ移動</p> <p>20:30 前泊ホテル (Tampa Airport Marriott) に到着、Mr. Whelan とお別れ</p>
2/6 (金)	<p>5:45 起床、ホテルのロビーに集合</p> <p>7:15 タンパ空港出発 ※途中、ダラス・フォートワース空港で乗り継ぎ</p>
2/7 (土)	<p>16:25 成田空港到着</p>

カ 参加授業・巡見先詳細

◆本校側で準備・発表を行った内容

主要な内容として上表④（⑤⑧も同様）、⑩、⑭の3つがあり、派遣生徒10名がそれぞれ分担して準備。

④⑤⑧ 高校世界史授業

2学期からの Hiroshima Brochure Project で、本年度は、日本側の視点のみに留まらず、日米以外の国でヒロシマがどのように教えられているか、と多角的な視点から広島長崎原爆投下について捉えた。さらに、現代文の授業で扱った、日米映画における原爆の表象（及びそれに反映されている原爆への認識）の差異という点も、派遣生徒たちには特に印象深い内容だったということであった。以上より、以下のような授業展開を行った。

【プレゼンテーション：各国の第2次世界大戦に関する描写と日本との比較】

20分程度の発表を行った。担当生徒たちは「日本の歴史の授業及び教科書における太平洋戦争の扱い方」、「核兵器の芸術における表現方法」という2点に着目し、自分たちが日頃触れている事柄がどのように過去につながっているのか、そして未来に語り継がれているのか、日本国内で高校生がアクセスできる範囲での文献にあたり、それを発表とした。アメリカはもちろん、インドネシア、中国、シンガポール、ロシア、韓国などの教科書での記述に着目した。その際、アジアのバックグラウンドを持つ SSES 生にも配慮し、日本が他国に対して行ってきた部分もできる限り客観的に示しつつ、他教科や広島での研修を含む自分たちの学習を通し、戦争について多角的に学び、お互いを認め合っていくことこそが世界平和のために必要だという立場を示した。その後、Mr. Whelan の助けも借り、3～6人程度のグループでアメリカの教科書を比べたり、ディスカッションをしたりして授業が展開していった。研修に出発する前、生徒は核兵器の使用について意見がぶつかることを予想していたが、実際に話し合ってみると自分たちと意見が似ていることに驚いていた。発表後は短い時間であったが、日米の生徒同士がフリーに会話し、互いに感想を述べあった。参加した全員が、相互に意見を交換することの大切さや英語で発信をすることの難しさを、再認識したようであった。

⑩ チャペルでの全体集会（自己紹介、学校紹介ビデオ）

昨年度までは代表者が平和についてのスピーチを行っていたが、今年は時間の都合もあり一人一人の簡単な自己紹介をしてから事前に用意した学校紹介ビデオを流した。この学ビデオは日本の高校生がどのような1日を過ごしているのか、アメリカとの違いを考えながら作ったものであり、短いながら大変凝った内容であった。また、ユーモアも利かせてあり、聴衆の笑いを誘っていた。

⑭ Team Success での発表

Team Success はチャータースクールと呼ばれる、特別な認可を受けて開校される公立校であり、この学校では特に低所得層の家庭の子供に教育と食事を与えるというミッションを持った学校である。栄養の整った朝食を学校でとるなど、正しい生活習慣の習得、資金を含めた生活面での補助を一義的目標にしているが、それに留まらず、学力面での高い達成目標を掲げ、一般の公立学校に勝るとも劣らない学業格付けを得ている（全国統一テストより）。恵まれた SSES や本校とはまた違う移民（ヒスパニック系）が殆どを占める学校空間は、生徒に教育観に全く新しい視座を与えたようである。今年度は交流の時間を長く取ることができた。まず創立者のお話を聞き、その後生徒たち同士で昼休みを取った後、パソコンルームでプレゼンを行った。プロジェクターが置いてある部屋がここしかなかったので、3回に分けて3学年の生徒に同じ内容の発表を行った。

発表は⑩の学校紹介ビデオに加え、日本の文化を紹介するプレゼンテーションを用意した。その理由として、この学校に通う生徒は経済的な理由から、海外の文化と触れ合うことが難しい立場にいると考えたからである。初めて出会う日本人として、何を伝えると興味を持ってもらえるかを入念に考え発表を作り上げた。実際の子どもたちと話すことで、教育が持つ可能性と現状の課題とを深く考えるきっかけとなったようである。

◆先方が準備してくださった内容

①③⑦⑮ 小学生との交流

アメリカならではの広い校庭にてキックボールを一緒にしたり、教室でクイズやゲームをしたりという交流の時間を多く用意してくれた。歴史の授業での発表前後にこのような交流があることで、生徒もリラックスして楽しいひと時を過ごすことができた。特に低学年の児童たちは日本からの生徒にすぐに打ち解けていたのが印象的であった。

②⑨⑪ 高校生の授業への参加

小学生との交流とは異なり、高校生は複数の授業に参加させてもらい、その中で意見交換をした。例えば中国語の授業では言語を学ぶ時の難しさを、ジャーナリズムの授業では課外活動での取り組みを共有した。同じ高校生でもクラスの規模や授業スタイルが異なることに生徒は興味深そうにしていた。

⑬ 音楽の授業に参加

SSES では、小学校の音楽の授業として打楽器でリズム感覚を獲得することを重要視しており、小学3年生と一緒に太鼓やマリンバを叩く授業に参加をさせていただいた。また、高校生たちのコーラスの授業は少人数のため、穏やかな雰囲気の中ピアノを囲んで一緒に歌うことができた。お互いの校歌を披露しあったのもどこか感慨深かった。言葉が通じなくても音楽で繋がることができると実感できる時間であった。

⑥ Mr. Whelan への質疑、意見交換

今回、派遣生徒が世界史授業で取り扱ったテーマだけでなく、日米関係に関することや Whelan 先生自身の日本とのつながり、このプロジェクトを続けてきた意義などについて、率直に伺うことができた。

⑫ Robinson's Preserve でカヤックに乗り、自然観察

あいにく川の水質が悪かったため、学校内の川でカヤック体験をすることができなかったが、その代わり近くの自然保護区でレンタルカヤックを借り、体験することができた。Mr. Whelan にマングローブ・水鳥などについて説明してもらったり、広々とした環境の中でカヤックを漕いだりすることができ、フロリダならではの自然に触れることができた。

⑯ Dr. Pullen/Mr. Whelan との研修振り返り

最後の振り返りとして、校長の Dr. Pullen、お世話になっていた Mr. Whelan などの前でこの研修を通して学んだこと、自分の中で変わったことについて日本人生徒が一人ひとり発表するという機会を設けてくださった。緊張感漂う中はっきりと受け答えをする生徒を見て、数日間でも確実に成長していると実感した。中には感極まって涙を流す生徒もいた。

キ 引率者所見

派遣生徒 10 名は Hiroshima Brochure Project の段階からやる気に溢れており、どちらのグループもチームワークがとても良かった。上述した通り、この研修に参加したことで確実にそれぞれの中で何かが変わったと強く感じた。フロリダを発つ前日に、Mr. Whelan より、何が一番印象的だったかという問いを投げかけられ、全員がためらうことなく、多様性や教育の重要性について英語で伝えようとしていた姿が印象的であった。最後に、時期が2月初旬と、新型コロナウイルスが世界で広がりつつある情勢の中この研修を大きな問題なく成功させることができたことを何よりも幸運に感じている。

ク 事後活動

- ・ 2月下旬 英語の授業にて現地で学んだことを発表
- ・ 2月下旬 本校に来校した国連特使の前で発表、意見交換
- ・ 3月初旬 学校の通信にて感想文紹介
- ・ 5月初旬(予定) 始業式にて全校生徒に研修報告(プレゼンテーション)
- ・ 9月中旬(予定) 学園祭にて研修報告(ポスター)



II Partnerships for the goals project

SDGs が策定された経緯を理解し、貧困、健康、ジェンダー、水問題、気候変動、イノベーションをテーマとして、その要因について、教科の枠を超えて学んだ。その上で、SDGs に取り組む企業や機関、団体と連携し、関連した社会貢献活動を自ら見つけて参加し、その成果を発表した。社会活動としての SDGs に触れることで、世界とのつながりを意識し、自分たちの行動が SDGs 達成に影響しているという自覚を育んだ。また、学びを他者と共有すべく、校内での主体的なワークショップを開催した。

(対象：高校 1・2 年全員・高校 3 年希望者 通年)

公民科の取り組み ～2050 年の世界を生きる～

英語科の取り組み ～2050 年の世界を生きる～

家庭科の取り組み

英語科の取り組み

1 公民科（現代社会）の取り組み：「2050 年の世界」を生きる

(1) プロジェクトとの関わり

中学までの学習内容を中学までの地理・歴史・公民の学習内容を、「これからの世界を考えるために必要な知識」と位置づけ活用するために、『2050 年の世界：英「エコノミスト」誌は予測する』を共通テキストとして用いた。人口動態の激変が産業及び社会構造にどのような影響を与えるのか、また新たな科学技術（テクノロジー）のめまぐるしい進歩により人間社会がどのように変わるのかを、書籍資料、新聞記事、ドキュメント番組を活用し時代の情報を集め理解し、議論を重ねながら授業展開をした。多様な価値が溢れる社会における正義の議論もサンデル教授のテキストを活用し議論を深めた。

特に、経団連が推進する「Society 5.0 for SDG s」を取り上げ、AI や IoT、ロボット、ビッグデータの活用など、革新技術を活用した社会の到来を予測する授業を行った。ゲノム解析など生命倫理とも結び付け、倫理的な課題や社会課題の解決についての議論を重ね、中間テストの小論文のテーマとして取り上げ、生徒自身が自分の言葉で考えを主張する機会を設けた。

(2) 学習指導計画 『2050 年の世界』

ア 国際秩序のゆらぎ

『2050 年の世界』の中で、国際政治や秩序についてどのような変化が起こるのか取り上げた。19 世紀のイギリス、20 世紀のアメリカ合衆国という覇権国家による国際秩序と、21 世紀に入りグローバル化とともに多極化する世界、テロとの戦いといった不安定要因、トランプ政権の外交戦略（北朝鮮の核とミサイル開発と米朝会談など）を取り上げた。G ゼロ時代の国際秩序が混沌とする世界情勢として、米中の情報通信分野の覇権争いを取り上げた。

イ 社会課題を考える

2050 年における少子高齢化と科学技術の進歩について考える機会を設けた。トピックとして「AI との未来...AI は天使か悪魔か」、「Society 5.0 for SDG s」を取り上げ、中間テストは AI をテーマに各自が問いと仮説を立てる小

の原因となっていることを話し合い、具体的な解決策をクラス内で提案するプレゼンを行い、アイデアを共有した。それを「理想の実」としてクラス毎にまとめた。

オ 大阪サミットとの連動

今年開催された大阪サミットの議題は、1学期の授業で取り組んだテーマと重なる部分が多かった。

特に廃棄プラスチックに関する議論は生徒にとっても共感し理解できる合意であった。授業内だけで完結するのではなく、世界の動きと連動した学びを得ることができたことを確認したと言える。

カ 1学期中間テストより

◎「人間とAIの未来」に関する小論文 21期1年E組

タイトル: AIが人間の知能を上回った時、人間がすべき役割

近年、人工知能(AI)はものすごい勢いで成長している事を知った。シンギュラリティという人間の能力とAIの能力が同じになるのは今から約25年後の2045年に迫ってきている。私達の世代はAIとの関わりなしで生きていくことは困難であろう。

私は今回人間とAIの将来的な関わりについて調べた時、特に興味を持ったのが「AIが人間を超えた時の人間の役割」についてだ。2016年、米グーグル傘下の5企業が作った「アルファ碁」が囲碁のトップ棋士に勝ち、社会に衝撃を与えたニュースがあった。そのニュースがきっかけとなり、国際社会の一部で注目されていたAIの「ディープラーニング」が脚光を浴びた。私もその時にそのAIのすごさを知り、ディープラーニングに必要なのは大量のデータや画像のみで、それがAIがバグ・ニヒルで認識し最善の手を練る。つまり人間はディープラーニングに必要ななくなったのだ。10私はそれを聞いて、「もうAIを開発する人しか社会で価値ある地位に立つことができない職業はないのではないか」とさえ考えた。しかしそれは違う。

私は、現代の日本を含めた世界でAIが人間の脅威になることに怯えている人が多々と思う。そして、怯えている人はだいたいはAIのことをよく調べようとせずSF感覚で語っている人だ。だいたい、人間はAIやロボットのことを「ある特定の分野のみに一生懸命に打ち勝つ芸術作品」のように見ている気がする。つまり、AIに怯えている人はこれから嫌でも関わりなくてはならないAIを負のイメージと捉えて目をそらしているのである。

私は、怯えているこのような事を、まだ人間がAIに勝っている「想像力・発想力」や「クリエイティビティ」「状況を判断して空気を読む力」を最大限活用してAIとの共存社会に取り込むべきだと考えている。AIは「天使」にも「悪魔」にもなりうる。そんなAIを「芸術作品」ではなく「(人)と対峙、接することが大切だ。人とAIで一緒にミニマムなAIを状況がよくなるように人間社会に置くことで、AIのディープラーニングが更に加速する事になるだろう。

もはやAIの進化は止められない。職業も今と大きく変わっていくだろう。人が誕生してから700万年間、人は文明を作り、世界を11ドにわけてきた。これからその11ドがなくなることは決まっていな。職業もAIと共存することで新しい仕事が増え、共に発達していくだろう。その職を見つけ、ユースしてどう発達させるか人間「クリエイティブ」さの象徴ともいえるのだ。

2 英語科の取り組み

(1) プロジェクトとの関わり

国際社会における諸課題は、歴史的背景や文化的背景、立地条件、発展の経緯など複雑な要因がからみあって発生している。高校での学びにより、幅広い知識の習得していることを確認し、教科を横断した知識をつなぐことで学びを深めた。高校1年では、他教科の授業で学習したトピックに関する新聞・雑誌記事（英文）を授業教材として取り上げ、読解力を養うとともに内容に関する更なる調査を行い、それをもとにプレゼンテーションやディベート、エッセイとして完成させた。高校2年では、学びとともに、社会が抱えている課題は、自分と関わりのある問題であることを認識するために、社会貢献活動を自ら計画して実施した。そこで得た学びを全体会で報告するとともに、英語によるエッセイを作成した。

(2) 学習指導計画（高校1年生）

①問題の概要を習得し、②問題に関連する語彙を習得した上で、③問題に関して、自分事として主体的に考え、発信するために、次のトピックについて、学習した。

ア AIと人間社会～自動運転車

A. 本章特有の、学習の狙い

(ア) ロボット・AIの基本概念を踏まえる。

(イ) AIが人間社会に適用されていく際には、複雑な法的・倫理的問題が生じ得ることを認識する。

(ウ) 一方で、英語の授業では(イ)のような「文系の視点」に偏りがちであるが、意識的に「理系の視点」（本章では工学的な問題）も導入し、これらの問題の複雑さを理解する。また、AI以外の先進技術に関する問題も、同様の構造を有し得ることへの示唆を得る。

B. 内容

①Introduction: definitions of / tidbits on ... AI / robots / autonomous cars

<素材> Technopedia（サイト：技術版 Wikipedia に類するもの） / Wikipedia

<内容> 「ロボット工学の3原則」、人工知能、自動運転車の定義的説明

②Moral Machine

<素材> Scalable Cooperation / MIT Media Lab / MIT

<内容> 自動運転車の導入に付随する倫理的問題、すなわち「事故が不可避な状況で、乗客・歩行者どちらを救うべきか」という問題（倫理学における古典的な「トロローリー問題」的命題）を検証するために制作されたサイト内にある事故シナリオについてどのような「倫理的基準」が存在するかを含めて検討・議論（例：助かる人数・歩行者の法律順守度（赤信号か）・年齢・性別）

③【②の続き】 Share Your Ideas: What algorithm would you embed (if technically possible)?

<内容> 仮に工学的に可能となった場合、「どちらを救うべきか、その倫理的基準」について、より詳細に議論

④Driverless Cars Will Face Moral Dilemmas: Autonomous vehicles may put people in life-or-death situations. Will the outcomes be decided by ethics or data?

<素材> Scientific American (サイト:米国の一般市民向け科学雑誌)

<内容> ②③Moral Machine で検討されている問題について、そもそもそのような「倫理学」的枠組みで考えられないという、人工知能の「工学」的観点からの、メタレベルでの批判(=人工知能はそのように「思考」せずに、数値化されたデータのみから結論を出す)

⑤Epilogue: A Scene from i, Robot (1:04:10-1:07:00)

締めくくりとして、映画「アイ・ロボット」の1シーンを上映し、本問題の複雑さの再認識。

※主人公の探偵が、かつて交通事故で自分がロボットにより命を救われた時の回想:

前項で議論したような「工学的計算」により、生存可能性が45%である自分が選ばれ、11%であった少女が選ばれなかった。しかし“人間”であれば、自分がロボットに叫んだように、間違いなく少女を選んでいただろう、という独白。

C. 所感・生徒の反応等

(ア) 話題として非常に興味深いものだったようで、特に③の議論は白熱したものとなった。また、主観的観察記述になるが、⑤の授業では静謐さが教室に漂い、この問題を真摯に捉えた様子が見えた。

(イ) 教材は語彙が難しかったという声も一定数存在した。特に、高1・1学期には英語・内容共に難易度が高すぎたかもしれない。独自教材製作に際して「なるべく生の素材を持って来る」場合に、内容の深さを追及するほど、英語レベルが上がってしまうという困難が不可避に存在する。こうした教材は「挑戦的な課題」と位置付けつつ、きちんと語彙レベルが合う素材もバランス良く用意すべきである(今回であれば①-③がそれに当たる)。

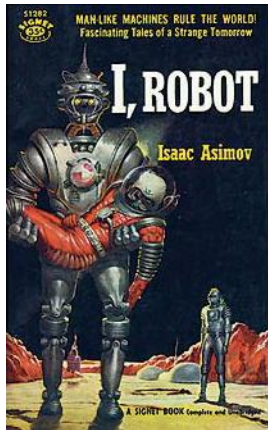
参考：教材抜粋

Introduction: definitions of / tidbits on ... AI / robots / autonomous cars

(1) Three Laws of Robotics

Wikipedia

https://en.wikipedia.org/wiki/Three_Laws_of_Robotics (accessed on Jan 8, 2017)



This cover of *I, Robot* illustrates the story "Runaround", the first to list all Three Laws of Robotics.

In the year 2035, technology and robots are a trusted part of everyday life. But that trust is broken when a scientist is found dead and a skeptical detective believes that a robot is responsible.



The Three Laws of Robotics (often shortened to The Three Laws or known as Asimov's Laws) are a set of rules devised by the science fiction author Isaac Asimov. The rules were introduced in his 1942 short story "Runaround", although they had been foreshadowed in a few earlier stories. The Three Laws, quoted as being from the "Handbook of Robotics, 56th Edition, 2058 A.D.", are:

1. A robot may not injure a human being or, through inaction, allow a human being to come to harm.
2. A robot must obey the orders given it by human beings except where such orders would conflict with the First Law.
3. A robot must protect its own existence as long as such protection does not conflict with the First or Second Laws.

(2) Moral Machine

2 Discussion: Moral Machine - Human Perspectives on Machine Ethics

Scalable Cooperation / MIT Media Lab / MIT (Massachusetts Institute of Technology)

moralmachine.mit.edu (accessed on Jan 10, 2017)

TASK 0 (optional):

Watch the Moral Machine introduction on YouTube.



TASK 1: Examine a hypothetical scenario below of a self-driving car crash with fatalities.

From your point of view, what was(were) the factor(s) important to your judgments?

Share your ideas.

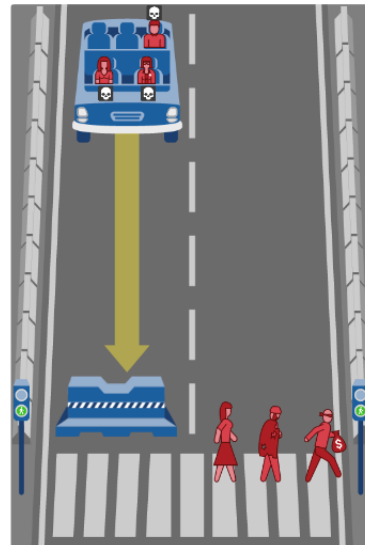
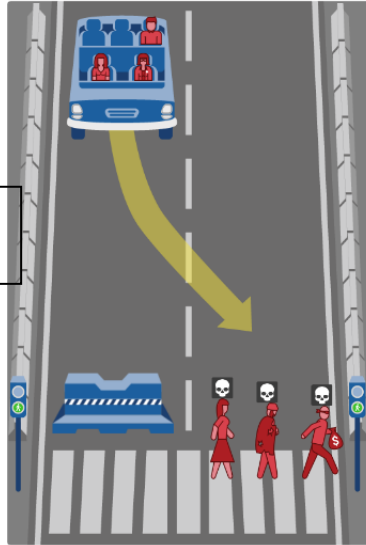
What should the self-driving car do?

In this case, the self-driving car with sudden brake failure will swerve and drive through a pedestrian crossing in the other lane. This will result in ...

Dead:

- 1 woman
- 1 homeless person
- 1 criminal

Note that the affected pedestrians are abiding by the law by crossing on the green signal.



12 / 13

In this case, the self-driving car with sudden brake failure will continue ahead and crash into a concrete barrier. This will result in ...

Dead:

- 1 female doctor
- 1 woman
- 1 man

(3) Share Your Ideas: What algorithm would you embed (if technically possible)?

3 (Cont'd from 2) What algorithm would you embed, if technically possible?

TASK: If you were to develop the algorithm in case of emergency situations for autonomous cars:

1-1. How important is each factor? Rank them in the following scale.

★★★ vital ★★☆☆ important ★☆☆ somewhat important ☆☆☆

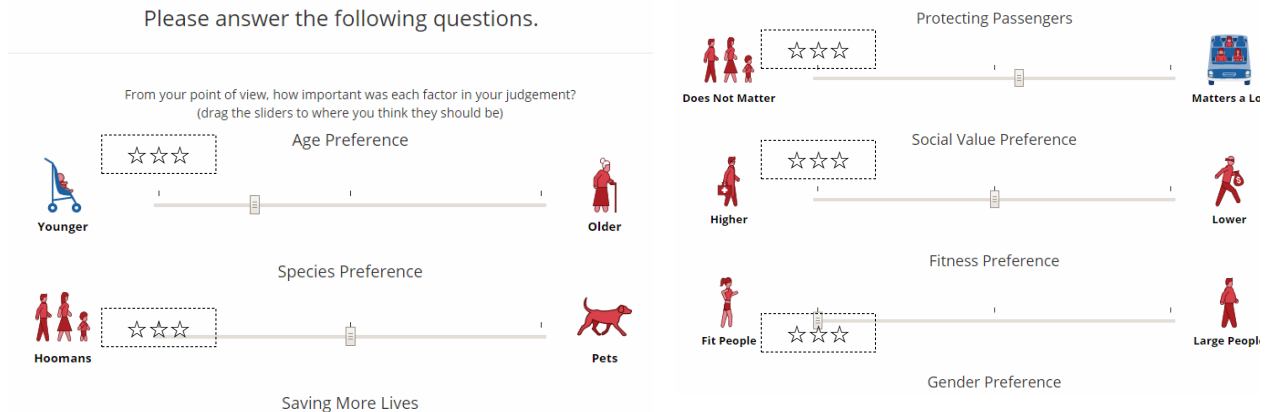
unimportant

Add other factors, if any, that you think are important.

1-2. "Drag the sliders" to where you think they should be.

2. Give reasons for 1. (e.g. What is the principle in ranking them?)

Please answer the following questions.



イ グローバル化の功罪

A. 学習の狙い

(ア) グローバル化の定義、「政治・経済・文化」の3側面を有することを習得する。

(イ) グローバル化を、「功」「罪」両面から検証する。

(ウ) グローバル化の台頭によって発生乃至は促進された問題について、英作

文し、議論する。

- (エ) (ウ)を本章直後「Conflicts」への導線とする：21世紀は Wars ではなく Conflicts の時代であるが、Conflicts はグローバル化の進展により加速されているという現状認識を得る。

B. 内容

※教材：Take a Stance: Discussing Today's Controversial Issues 2 (Unit 8)

- (ア) 導入：「グローバル化が自分達の日常生活にどう関わっているか」ミニライティング→スピーキング
- (イ) 「グローバル化の定義」主にリスニング・リーディング・語彙習得／知識習得
- (ウ) 「グローバル化の恩恵と弊害」 //
- (エ) 「グローバル化に関する、4か国学生による、賛成・反対意見」リスニング
- (オ) 「グローバル化の台頭によって発生乃至は加速された問題」ライティング（個人作業）
- (カ) (オ)を共有「自分たちにとっては特にどの問題が重要か、その解決に向かうためにはどうすべきか」スピーキング（ディスカッション）※B(オ)(カ)が、A(エ)の狙いを含む「発信型活動」である。

C. 担当所感・生徒の反応等 + 授業編成についての観察（アンケート含む）

- ・ ともすれば内容に焦点を置く場合、語彙レベルの制約上、リーディングに焦点が当たってしまいがちであり、特にリスニングには適する素材が見つからないことが多いが（本校SGHプロジェクトに関して、東京外国語大学の根岸教授から、ベネッセとの共同研究に於いて、ご教示頂いた部分でもある）、独自教材製作に拘泥せずに言語コントロールされた教材を使用して語彙レベルの阻害要因を減らし、また、「ある話題について何となく・局部的に読んで、何となく話す」ではなく **B** に示したように授業構成パーツにおいて活動目的を明確化することで、生徒が各活動に集中して取り組める形が見えてきた。
- ・ 「グローバル化」について、明確な分析視点を得ることが出来た模様。特に、授業中の反応からの記述になるが、A(ア)の「3側面」という一般的定義は、生徒にとっては発見だったようだ。
- ・ (エ)(オ)に関して様々な観点が提示された。抜粋する（元は英作文であるが、日本語に訳してある）。
 - ・ 宗教間闘争 ・ 二極化の進展 ・ 和食を食べる／日本文化に触れる機会の減少 ・ 人種差別 ・ 移民受入 ・ 国内産業空洞化 ・ 貿易摩擦 ・ 価格競争 ・ 著作権問題 ・ 英語の台頭と文化の喪失
- ・ 生徒アンケートの声
 - 「他人の意見が知れるのは英語の授業としてじゃなくても面白かった」
 - 「社会のことを考える機会としても英語の勉強としても面白い時間でした」

「授業を受ける前の意見は薄っぺらだったのに、授業後では少しは自分の意見が言えるようになっていたのが嬉しかった」。

- ・ 本章を1月に行い、2月に「Conflicts」をテーマとして取り上げた接続は良好であった。特に指示はしなかったが、本章の作文用紙を、「Conflicts」で持参していた生徒が散見された。

ウ Wars and Conflicts

A. 本章特有の学習の狙い

グローバル化の進展等の理由により、世界の安全保障の課題は、(主権) 国家間の覇権競争・イデオロギー闘争(民主-資本主義陣営 vs 社会-共産主義陣営)といった「国家・陣営間の戦争」から、国家・国境線という枠組に関わらない・国家内外を問わない「異なる文明(・文化)や民族間の衝突・摩擦」に移行しているのが実態である。

以上の問題意識より、Wars→(Globalization→) Conflicts というテーマを扱うに際して、遠い歴史や国境線の彼方の話ではなく、自分の生きるこの時代に実際に存在し、自分に関わる課題として conflict を捉えてもらうために、次の様に課題の枠組みを設定した。

課題：(冷戦終焉後の/グローバル化の進展した) 現在の世界に存在している、一つまたは複数の conflict(s)について、その対処に必要なことを主体的に提言する。

この conflict(s)は、現存しているものであれば、国内外/事態の規模を問わない。

グループメンバーが一番主体的に調べて発表したい課題であることを最優先する。

B. 内容

◇概要

- (ア) 授業4時間を使い、5分間の発表の準備を行う。
- (イ) うち第2～4回目の授業各回で、1班10～20分のアドバイスを、「8-4. Hiroshima Brochure Project」でお世話になった東京外国語大学メンター(大学生・院生)から頂く。
- (ウ) 「8-4. Hiroshima Brochure Project」と異なり、発表形式は自由である。発表のジャッジもメンターが担当し、発表後は2分のQ&Aがある。

◇生徒発表内容

- (ア) 殆どどのグループがパワーポイント使用の発表だったが、中には「寸劇仕立て」の発表もあった。
- (イ) テーマ例は次の通り、国内外の多岐に渡る。
 - ◇ 日本国内の外国人労働者への誤解・摩擦 ・ 沖縄米軍を巡る日本政府と沖縄県民の摩擦
 - ◇ 雇用者と被雇用者の摩擦：日本の労働環境(長時間労働・ハラスメント)

- ◇ 日韓関係 ・ G S O M I A ・ 北朝鮮の武力の近隣諸国への脅威
- ◇ コンゴにおける、国内紛争の子供への影響 ・ 世界各所における、紛争の子供への影響
- ◇ コロナ肺炎感染流行による、欧州におけるアジア人への差別 ・ ブレグジット ・ ジャスミン革命
- ◇ 捕鯨問題 ・ 貿易摩擦

C. 所感・生徒の反応等

- (7) 2回目のプロジェクトであったが飽きる様子もなく、真剣かつ知的探究心を作動させながら取り組んでいる姿が印象的であった。特に、何を以って conflicts というのか、どこに conflicts が存在しているかといった、抽象度の高い議論や現代社会への知識・洞察も必要となる本テーマに、苦勞しながら様々な議論を通じて、認識を深めていった様子が観察された。

個人的に最も印象に残っているのは、「席替え」を扱おうとしたグループからの質問への対応である。自分の日常においてはリアリティがある内容だがこれがテーマに成り得るかと遠慮がちに聞いてきたので、『『社会の最小構成単位である個人が、社会集団の一つである学級に、自分の意志とは関係なく偶発的に帰属することになった時に個人・集団間に存在し得る conflicts を解決して、最大多数の最大幸福をどのように追及すべきか』という視点に置換すれば十分テーマとして成立する』という趣旨の内容を答えたところ、学校や学級について、そのように「個人」「社会集団」という認識を持ったことが無かった様で、蒙を啓かれた反応をしていた。

その他、上に例示したようなテーマや、発表に至らなかったが「人間と動物の共生」など、自分達の極めて身近な所の frictions というレベルから地球レベルまで、社会／世界の様々な所に conflicts が遍在しているという認識を深めることができたようである。

高2では、平和学習から離れて、貧困・エネルギー・環境等、地球規模(global)の課題も扱うが、今回のお互いの様々な発表を見聞きすることを通じて、「conflicts がありつつも、地球(globe)における共生」という意識が醸成されて、高2への学習への導線にもなったのではと観察される。

- (1) 生徒からは次のような声を得ることができた。

「差別に関する関心はかなり高い。」

「私みたいに韓国アイドルが好きな人以外でも、結構みんな日韓関係に興味あるんだなって思ってびっくりしました。」

「捕鯨にやたら詳しくなれました。鯨肉はヘルシーでダイエットに役立つ美味しい食材です。」

「Conflicts は身近な所に沢山あると分かった。」

「完全な二項対立は少なく、様々な言い分や思想があると知ったこと。」
「世の中には、まだまだ完全な解決が難しい問題が沢山残っているということ。人間は面倒臭い生き物だということ。」

「内容レベルの深さは、「8-4. 広島プロジェクト」を凌駕する。これまでとほぼ同様に、割かれる時間は4時間+2時間発表と設定したが、生徒からも「ただ、内容の濃さの割に、割かれた時間が短いなと感じたのみです」「Conflict も HBP と同じくらい時間が取れたら良かったです」といった声を得た。

上に示した、「conflicts を自分事として捉える」「纏わる状況の複雑さを認識する」という目標設定は十分達成できているので（定期テストで、本プロジェクトで学んだことについて作文してもらった内容より）、その目的のためにはこれ位の時間配当で十分ではある。一方、より完成度を求めるのであれば、内容レベルは高い話題なので本来的には広島プロジェクト以上に時間がかかる。また、8-4_Cで示したように、これらプロジェクト学習だけを行うのではなく、様々な話題や技術も含めて1年間でバランスよく時間を割く必要もある。まだ筆者のみの考えであるが、1年に2つ大きなプロジェクトとはせず、1つ高2に送るという、高2までのカリキュラム全体の時間的調整で可能になるかもしれないので、全体設計を見直していくことも可能かもしれない。

- (ウ) 「対処に必要なことを主体的に提言」という部分も、その扱う内容レベルの高さから、多くの生徒にとって難易度の高いものであったようである。広島プロジェクトに比べて、机間巡視の際、明らかに多くの内容的質問が来た。この点については、社会科教員に協力を仰ぐ、場合によっては、conflicts に関して現代社会の授業で扱うといった方向性が考えられるだろう。

幸いにして、本校のWWLの広島プロジェクトの時以上に、「東京外国語大学メンターの方々」の存在が、ここで真価を発揮した。第一に、彼らが大学（院）でこうした国家間紛争・国際問題を研究しているので、専門的知識に裏付けられた様々な視点・枠組等の助言を頂けた点、第二に、様々な国籍の方々に構成されているため、自国の事情を話していただき、かつ、固定ではなく複数のメンターとセッションを設けたので、より多くの国の事情を知り得ることができた点が、今回の Conflicts というテーマに良く合致していた。

広島プロジェクトも含め、メンターの皆様のご尽力なしには、これら2つのプログラムに深みを与えることはできない。この場を借りて、東京外国語大学戦略支援室の皆様、メンターの皆様をはじめとして、関係される皆様に厚く御礼申し上げます。



(3) 学習指導計画（高校2年生）

ア Social Justice

(7) Human Rights

内容とねらい：グローバル化に伴う世界の状況を学び、世界が直面する様々な問題を人権という切り口から学ぶ。多くの問題にかかわる経済格差、貧困について読解と Activity を通して理解を深め、人権について単なる知識で終わらせず、自分たちに関わる問題であることに気づかせる。

① Economic Inequality: the Growing Gap

現代社会の大きな問題の一つである「格差」の問題をテキストベースで学んだ。途上国の子どもたちに教育が行き届かないことが格差の連鎖を断ち切れないこと、同時に、格差の問題は先進国にも存在していること、格差の解消のために国は何が出来るかについて読み取り、考えた。

② Coffee Chain Game

コーヒーについての3種類のアクティブラーニングを通して、フェアトレードについて学ぶ授業である。まず、コーヒーが生産されてから消費者に飲み物として届くまでの流通経路（サプライチェーン）を書いた紙を、正しい順番がわからないようにしてからグループに与えた。生徒は、英語で話し合い、正しい順番を考える中で、コーヒーが生産されるまでにたくさんの過程があることを理解した。次に、グループのメンバーを農家・輸入業者・加工業者・小売りなどの各セクターの役に割り当て、500円に想定されたインスタントコーヒーのビン(500g)1つにおいて、それぞれ1ビンあたりのどのくらいの利益が欲しいかを考えた。生徒は、自分の役の立場で希望する割り当て金額を決め、グループ内で交渉する。話し合いを経て、自分たちの取り分ができるだけ多く、しかし実際のトータルの価格は500円になるようにまとめていく。生徒は、最終的に決定した価格を黒板の表に書き、教員が実際の価格を発表。

生徒はこの一連の活動から、不当搾取が行われる経緯や交渉における力関係について体験するとともに、交渉力や発想力などを鍛えた。単なる他国の状況として捉えず、自分たちの生活に密接しているという点においては、高校1年時にコーヒー生産の不当搾取について

軽い読み物を扱っていたことが功を奏し、市場に出回っている商品と自分たちの生活の関係性、その中で自分たちはどう行動し、どう伝えていくと良いのか、などを活発に議論することができた。

また、さいごに **Writing Activity** として、コーヒーにまつわる問題点を1つ取り上げ、考えられる解決策についてまとめた。(資料1)

(4) **Child Labor and Roles of Developed Countries**

内容とねらい：前半に引き続き、家庭科の授業と連携して、人権の中でも子どもの人権に焦点を当てる。経済格差、教育格差、貧困など様々な要因が絡み合っている実情を知る。その後少し視点を変え、先進国としてのこれからの在り方をベースに、主に観光業における経済や環境に対しての影響について理解を深める。1学期のまとめとして、世界にある様々な問題が自分たちの生活と密接に関わっていることを気づかせる。

① **Child Labor**

i. **Time used on an average weekday**

4人一組でグループを組み、発展途上国の子ども達の生活について知り、その原因を考える授業。まず生徒は、自分が11才だった時と現在において、一日の時間の使い方をワークシートのパイチャートに書き込む。その後、グループで4種類の児童労働のケースストーリー（それぞれ異なる発展途上国に住む児童の生活を紹介した英文）を分担して読み、それぞれの一日の生活をワークシートの別のパイチャートに完成させる。その後、グループ内でお互いにワークシートを見せながら、各人が担当したケースストーリーについて1人3-4分程度で英語により説明を行う。他の生徒は、聞きながらメモを取り、お互いの情報をもとに自分が11才だった時のパイチャートと4人の児童のそれとを比べ、このような違いが生じる原因や貧困の連鎖について議論した。

ii. **Child Labor: Dictation activity**

Congo のレアメタルの採掘場で働く子どもたち取材した BBC ニュースを視聴した。劣悪な環境で働く子供たちの存在を知り、児童労働の問題の背景について考えた。また、実際のニュース番組の音声を聞き取り、ディクテーション活動を行った。

② **Dilemmas for a Responsible Tourism**

責任ある観光業とは何か、という部分を、観光業の抱える経済の発展と環境への影響とのジレンマに焦点を当ててテキストベースで学んだ。観光業で経済や国を発展させることの利点と、それに伴う環境や地球の未来に対しての影響、という2つの軸に関する事例を読み取り考えた。

(5) **Water Issues and World Energy Sources**

内容とねらい：世界の水問題について再考し、安全保障問題の解決策を考える。昨年7月末に本学園主催の高校生国際会議（Water is Life）を

開催したこともあり、後半のエネルギー問題へとつなげるために、水資源問題を再度取り上げる。高校 2 年生は理科や社会で選択科目が増え、各生徒は専門性が深まる学習をする。エネルギーについては化学、物理、地学、地理、世界史などでそれぞれ違った角度で学習する。その様々な知識を総合することこそが地球社会が抱える問題を解決する糸口となることを、交渉などのアクティビティを通して気づかせる。

① Water Issues

i. Where is water?

導入として、TED-Ed を視聴し、我々が現在抱えている水資源問題についての基礎知識と語彙を確認した。

ii. Zawa-Zawa Land is a Lovely Country!

ロールプレイを通して解決策を考えるアクティビティ。水災害、上下水道の未整備、地下水の汚染、国際河川を巡る紛争など、数々の水問題を抱える架空国家ザワザワランドの高官になって、限られた国の予算を使って、どの問題を優先的に解決すべきかグループごとに英語で話し合った。この国は実存しないが、UN のデータ等をもとに、アクティビティ内の数値が決定されているため、この国自体が世界の縮図となっている。話し合いの結果をクラスで共有。「多くの人々が被害にあっているから (=重要性)」、「Limited な予算の中で実行しやすそうだから (=実行性)」、「すぐに対処しなければいけないから (=緊急性)」といった理由が出た。

② Energy

i. Energy for a Stable Climate

現存するエネルギー問題についてテキストベースで学び、nuclear energy や FBR の利点、欠点、世界各国の捉えかたについても理解を深めた。さらに、日本がパリ協定でどのような約束をし、それが現状どのような状況にあるかも読み取った。

ii. World Energy Issues ~Present and Future~

International Energy Agency が発行している世界のエネルギー事情に関する資料（地域ごとのエネルギー消費量、エネルギー源ごとの消費割合、国ごとのエネルギー生産割合、国ごとの電気料金）を穴埋めクイズにしたものを配布し、各国で使用されているエネルギーの特徴をつかんだ。次に、主要なエネルギー源が異なる中国、アメリカ、ロシア、カナダ、ドイツ、ブラジル、フランス、イギリスの中から、グループごとに担当国を選び、それぞれの国の経済状況や地理などをリサーチした。最後に、2050 年の世界における理想的なエネルギー割合と各国で取り組むべき課題を話し合い、①理想を実現するために自国は使用燃料の割合をどう変えるか。またその方法は？②他の国にリクエストしたいことは何

か?の2点をクラス全体に対して英語で発表した。結果、お互いのリサーチはもちろん、自分とは選択科目が異なる生徒からも情報を得ることができ、思考の幅が広がった。この活動を通し、生徒たちは異なる分野の専門家が協力すると、より優れた発想が生まれることを学んだ。



iii. Writing Activity on Energy Problem

自分が環境省のトップになった設定で、プレゼンテーションで使った2050年の世界における理想的なエネルギー割合を目標とし、日本がどう貢献していくことができるか（または目標に対してどのような行動をとる責任があるか）、他国にリクエストしたいことを英文でまとめた。（資料2）

(エ) Islam

内容とねらい：世界の4人に一人が信者であると同時に、昨今の世界情勢で話題に上がることの多いイスラム教に対して、時事問題と絡めて多角的に理解を深め、メディアの報道に流されて偏見を持つようなことがないようにする。

① Introduction to Islam / Brainstorming & Quiz

イスラム教についてどのようなイメージを持っているかグループで話し合い、そのイメージがどこから出たものかについて考えた。それをまとめたものやイスラム教についての疑問点を、この授業の一部として行う講演の講師である東京ジャーミイ・トルコ文化センターの下山茂さんに送った。次にクイズやテキストからイスラム教に関する基本的な理解をした。

② Role of Muslim Women/Gender Issues in Islam

イスラム社会における女性の立場について学んだ。イントロダクションとして、各生徒が持っているイメージを聞いた。head scarf、segregation in a mosque、polygamy など女性蔑視の習慣があると感じていた生徒が多くいたが、女性を男性から守るという考えや、お祈りに集中するという姿勢などからきたことを確認した。

③ What Happened on 9/11? / 911 当日の NY Times

911発生時にはまだ生まれていない生徒たちに、この事件の概要を説明した英文記事で基本知識を入れ、さらに当日のNew York Timesの記事ではどのような言葉を使ってこの惨事を報じているかに着目、当時のTimeやNewsweekの写真も見せた。

④ 外部講師を招いての Islam Lecture

前半は、東京ジャーミイ・トルコ文化センター広報・出版担当の下山茂さんによるレクチャーで、事前に送った生徒達のイスラム教に対するイメージと現実との違いについて説明し、疑問点についても回答して下さった。後半は、3人の信者の方にお祈りのデモンストレーションをしていただき、それぞれ小グループに分かれセッション、質疑応答を行った。今年はNY出身のアメリカ人の方、パキスタン出身のジャーナリスト、インドネシア出身の方もいらして多様な観点からお話を伺えた。事後、感想を書いた。(資料3)



⑤ Record number of anti-Muslim attacks reported in UK last year

Guardian の記事を読み、反ムスリムの攻撃がいかに頻繁に、かつ過激に行われているか、特に女性信者に対する攻撃の多さなどについて学んだ。また、記事の最後にある、「これらを止める最善の方法は教育である」という記述に触れ、自分たちが今このテーマについて学ぶ意義についても再確認した。

(オ) Fake News

内容とねらい：情報操作、Fake News の拡散により、人間ないし国家の安全が脅かされる問題は、現在既に世界規模で対処していかななくてはならない重要なトピックとなっている。この問題について現状を知り、そのような社会に生きる我々が持つべき心構えを考える。

① TED-Ed How false news can spread

“A lie can travel halfway around the world while the truth is putting on its shoes.”という Mark Twain の発言とされる言葉を導入に、false news が広まる仕組み、過去と現代のメディアの取材方法の違いなどについて知った。動画の視聴と Dictation 活動により、語彙と基礎知識をインプットした。

② Believe It or Not: the Post-Truth Era

Fake news が拡散する要因、米大統領選や EU 離脱に関する国民投票などを例とした Fake News が民主主義に与える脅威、特に SNS の影響力が強い現代における問題点についてテキストベースで学んだ。「情報」というものの真偽はどのように判断すればよいのか、身近にあり信じている情報は本当に正しいのか、という点を再考する機会となった。

③ Discussion Activity

“Do you usually check the details of the news especially when you

encounter something really appealing? Why/ why not?”という質問と、“Do you agree that the influence of posts appearing on social networks on our thoughts is huge? Why do they have such a strong effect? Why not?”という質問に対し黒板で意見を交換し、視点を広げる機会となった。情報の奥にある詳細に関して、自分たちがどの程度アンテナを立てているか、SNSの持つ力が自分たちの思考に関係しているかどうかなど、人によっては思考の深さが分かれる点ではあったが、デジタルな情報というものが生まれてからずっと身近にある生徒たちにとっては、このような議題について考察する機会が必要である、との印象を受けた。

(カ) Biodiversity

内容とねらい：生物との連携授業で、地球社会における生物多様性の重要性と、環境に大いなる影響を及ぼす我々人類の責任について学ぶ。

① What is Biodiversity? Biodiversity IQ Quiz

4 人一組のチームを作り、Biodiversity に関する英語のクイズに答えた。クイズは、Knowledge(10分)、Listening(10分)、Reading(20分)の3セクション構成。この活動を通し、生物の授業の復習を行なうと同時に、生物多様性の基礎知識や、人類が引き起こしている地球史上最大の生物の絶滅である「第六の絶滅」について事前知識を得た。

② The Sixth Extinction

人類が引き起こしている「第六の絶滅」について問題提起し、2014年にピューリッツァー賞を受賞した Elizabeth Kolbert 著 *The Sixth Extinction: An Unnatural History* を教材に第六の絶滅について理解を深めた。特にエピローグにおける筆者の意見に焦点を置き、第六の絶滅によって人類の未来はどのようなようになるかを考えた。新型コロナウイルス感染症の影響で一斉休校となってしまう授業の時間が減ってしまったが、最初に文章の main idea に焦点を置き、文章全体やパラグラフ全体の主旨を読み取る部分までは授業で扱うことができたので、このように専門性の高い洋書の文章でも、中にある知識を他教科のものと連携させることができれば、読み取るのはさほど難しくないことが伝わっていれば何よりである。

(資料1) Writing about coffee issues

Coffee Chain Game

What is the solution to the problem with coffee?

Title: Make a tourist coffee farm

Coffee farmers usually be forced into a difficult situation. They can't earn enough only by coffee beans. When you buy a cup of coffee for 500 yen, farmers receive 3 yen. Surely, the commodity prices of farmers' country is lower than that of Japan, but this is too low to maintain the minimum standard of living. If it were not for coffee farmers, roasters and shippers, exporters and coffee sellers couldn't earn. I think we should make coffee farmers get more income.

I have an idea of this solution. It is to have a side of tourist farm for coffee farmers. And then, farmers make an explanation of their low income and the reasons to tourists. For this way, farmers can earn charge of the tour and make people know the current farmer's situation.

(資料2) Writing on energy problem

Writing Activity on Energy Problem

You are the head of Ministry of the Environment(環境省). You are planning to achieve the 2050 goal of world energy mix. Write how you could contribute or what you would be responsible for the goal. Also, write what you would request other countries to do.

I think it is very important that the world use more renewable energy, so I try to make up electricity generation system by renewable energy. Also, Japan has many highly level technical engineers so I cost more money to make cleaner and more useful energy or to use ordinary energy more effectively.

I would request the countries which produce fossil fuel to raise fossil fuel's prices. If the prices become higher, many countries want to reduce the amount of using fossil fuel as much as possible, and try to use renewable energy. If the amount of using fossil fuel decreases, the profit of producing fossil fuel will be kept because of raising prices so they can keep the finance condition.

In conclusion, it's important that countries have awareness of crisis sincerely against this situation.

Writing Activity on Energy Problem

You are the head of Ministry of the Environment(環境省). You are planning to achieve the 2050 goal of world energy mix. Write how you could contribute or what you would be responsible for the goal. Also, write what you would request other countries to do.

Now, Japan use renewable energy only 8%. We have to get higher rate of using renewable energy. Japan is suited to use geothermal power generation because of land form and youth of continent. In addition, Germany and Japan are the highest proportion of setting solar panel. Therefore, we change the energy from oil and natural gas to renewable. However, it is difficult to achieve the 2050 goal of world energy mix. We would request other countries to do. To France, we ask to decrease using Nuclear power. France use Nuclear 70~80% of total energy mix in France. It's too much to attain the goal. Next, we ask Brazil and Canada to use more hydroelectric power. There is the Amazon in Brazil, and there is many lake of glacier. Accordingly, these two countries can make power from hydroelectric power through a year.

There is big problem, global warming, and we have to make efforts with all countries of the world.

(資料3) イスラム講演会感想

S2 EA Term 2-2

Religion: Lecture and Workshop on Islam

November 20th, 2019

How did you feel or what did you think about Islam after the lecture/discussion? Did you find something new about Islam or Muslim people? In English, write down what you thought about or how you felt through the lecture/workshop today.

Before the lecture, I had several prejudice about Islam. First, I thought Islam was strict religion. For example, muslims have to pray five times a day and they have to perform ablution before prayer. Also, they have to fast during the month of Ramadan, which I think is too hard to do. And muslim women have to wear hijab and they can't get marry with free. These were the reason why I didn't want to be a muslim. Second, I thought Islam was dangerous religion because I know 9.11 and other terrorism which were done by muslim.

After the lecture, I don't have any prejudice about Islam. Many rule of Islam is needed to get good life and not too strict because If you can't, you don't have to follow the rules. And about terrorism, TV News is not always true and anyone could be terrorist. Most muslim also hate terrorism.

Even I want be a muslim, I decided to think about Islam with no prejudice. Islam is neither so strict religion nor dangerous religion because Islam is one of the biggest religion in the world and there are many muslims in many countries.

Religion: Lecture and Workshop on Islam

November 20th, 2019

How did you feel or what did you think about Islam after the lecture/discussion? Did you find something new about Islam or Muslim people? In English, write down what you thought about or how you felt through the lecture/workshop today.

I took a lesson about the religion of Islam yesterday. They say Islam is urban and strict religion, but not terrorism. We are apt to impress it is dangerous religion because some extremists are still in Arab and we're aware of that. However, Islam isn't brutal. It is very holy and kind religion. I think so, too.

After Islam lecture, we have Z^hA^h-U's lesson for an hour. My most impressed thing is the different meaning of "Shu-Kyo" and "religion". I don't know what "shu" means. He said "shu" means fundamental knowledge that is roots of our history and ancestors, and "kyo" means teaching them. On the other hands, "religion" means the belief in the existence of gods, and the actives that are connected with the worship and system. Also it means it connects again. I think religion is a promise with gods forever, we still remains ^{the} ~~pre~~ of gods. Additionally, it will continue from now on.

Z^hA^h-U is a journalist of worldwide war. He went to a lot of places where the civil wars still break out. His friend, Mika Yamamoto, who was a journalist and work with him, was killed in the civil war in Syria. When I heard this fact from Z^hA^h-U,

I was shocked. In my opinion, the world will become peace. However, it will be tough to end the war. There're still conflicts somewhere in the world. There're no indication of ending the wars. Those are not only real wars but psychological conflicts in the world. Maintaining peace is very difficult. Therefore, we should try to contribute the peaceful society by everyone. Fortunately, Japan is a safe country. We should share the different notion in each country or region and respect else notion. These lessons were the best opportunity to think the difference of religion and the way the world to be peace. Thanks for all!

イ Service Learning

内容とねらい：上記(1)～(6)の学習と並行し、1年間かけて、授業で学んだ **Global Issues**の解決につながる活動を各人で計画、実行する。地球規模の大きな問題の解決には個々で行っている活動や一人ひとりの発想を総合させることが重要となるので、そうした活動を通して得た考えを他者に発信することでこのプロジェクトは完了する。この経験を通して問題意識を高め、将来、各分野でリーダー的な立場になった時に解決したいという気持ちを育てる。校内・校外を問わず活動し、英文レポート(資料4)、学園祭での発表(資料5)という形で活動内容を他の生徒と共有した。

(資料4) 英文レポート

I went to Cambodia for a volunteer for about one week during the summer vacation. However, after going back to home, I felt it was not a volunteer. That's because I got much more power from local people than I gave it to them.

Firstly, I'm going to introduce what I did concretely. I participated in a

volunteer and study tour held by the International cooperation NGO "volunteer platform". I did not only volunteer but also visiting many historical famous places. For example, I visited a orphanage and made curry for them. All of the places were really interesting, but especially the killing field was unforgettable.

40 years ago, a genocide that killed as many as 2.5 million people and wiped out a third of the population took place in Cambodia. In the killing field, there was a memorial monument that filled with real remains. With my eyes closed, I pray their souls rest in peace, suddenly cheerful laughter was audible. When I opened my eyes, two barefooted children about 10 years old were looking at me in wonder. After a few seconds, they started to chase each other happily around the monument. I couldn't believe the scene before me because I thought it was a place for memorial, not for playing.



I came up with some questions. Why don't they have to go to school even though it was Tuesday? Don't they know the history? I carefully considered many things all night through. Finally, I found a connection between these questions. It was "education". It was because they weren't going to school that they couldn't learn the history and also they couldn't read instructions written in Khmer and English in the killing field.

The good news was that I had an opportunity to teach children English in a school in rural district at the end of my tour in Cambodia. 18 years ago, the people in the village couldn't write and read Khmer and could only speak. That's because in spite of the urban district's remarkable development, there were no road, and thus no access to school. Most of the families in the village are migrant workers. They go to Thai and do hard manual labor which requires no language skills. But, if they learn Khmer and English, they can work as tour guides or hotel workers in urban district. It means they can break out of negative chain. For these reasons, a inhabitant of the village and volunteer platform cooperated with one another and established the school.



In the tour, I taught the first grade of the elementary school. This was the first time for me to teach something for children, so I was very nervous. However, all my worries were gone in just the first minute. When I stood before the students, they looked at me with

shining eyes. And when I asked "Is there anyone who wants to answer this question?", all of the students raised their hands. I was surprised by the

children's positiveness and at the same time, I was shamed of my usual behavior in class that I often fall asleep. I realized that this is a serious mistake.

I believe the people who must know the importance of education is not only developing countries but also developed countries. I want to be a leader of the latter.

Before going to Cambodia, I set myself the goal of making as many smiles as possible. Then, I tried to achieve it by smiling all the time, but the local children were really powerful and no one seemed unhappy. What I did was just enjoying the moment with them. However, now I think nothing is more precious than this experience. They made me think again about "what is happiness?"

This experience meant for me not only a volunteer but also independence. So, I didn't want to rely on my parents. I did from applications to, of course, going to Cambodia by myself. It was not so much frightening as exciting.

During my stay in rural village, I stayed with a host family. I can't say the house was splendid. For example, there was no bathroom, so I used very cold water that is stored. And also I couldn't use the Internet enough. However, my host family was so kind that they always cared about me even though we couldn't understand each other's language. I will never forget the taste of the food my host mother cooked for me.

"Not everyone in the world can speak English, but we all can smile."

Last summer vacation, I took part in as a volunteer the "Eco 1 Challenge Cup 2019 Tokyo -Handmade Electric Vehicle Contest by Junior and Senior High School Students-" hosted by Tokyo City University. The tournament was held with the aim of experiencing the joy of manufacturing, recognizing environmental and energy issues, and training creative human resources. Compete for running time on a course, including right-angle curves and S-shaped curves. All the more, compete for how to use the battery's electric energy efficiently, the basic performance of cars, such as running, turning, and stopping, and so on.

My tasks were the arrangement of the venue, checking the operation of the time counter, and measuring the lap time. It was a minor tournament, so there was no detailed manual.



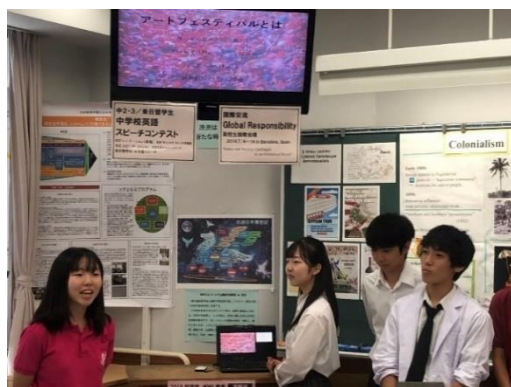
Therefore, we had to decide something like deciding where to place posters, and thinking about the orientation and fixing method of the TV monitor on the spot. I was asked for the ability to respond flexibly without having to shrink even among adults and had to need to say the actively express my opinions. In my everyday life, there are few opportunities to



work with adults, so it was very fun to create a venue by the same standpoint as adults. Rather than just waiting for tasks to come, by looking around, finding tasks and participating from myself, I think I was able to contribute to the tournament as a volunteer.

Now, global warming is progressing in the world, and the spread of electric vehicles is spreading. I expect that more and more people will be interested in electric vehicles and other technologies that will play a role in the future, thanks to familiar experiences like this contest. I also want to make use of what I have learned through the participation of this volunteer. I would also like to actively participate in other volunteers that contribute to society and aim for a better society as a member of society.

(資料5) 学園祭での発表の様子



東北復興支援のアートフェスティバルのボランティアに参加した生徒たちの発表



カンボジアで開発ボランティアに参加した生徒の発表



女子中高生放課後制服レンタルサービスの会社を立ち上げた生徒たちの活動報告



フェアトレードの委託販売のボランティアをした生徒たちの発表

3 家庭科の取り組み

(1) プロジェクトとの関わり

家庭科の教科目標である「共に生き、共に支える社会の実現」について、保育領域「子どもの権利と福祉」の授業を通じて、児童の人権侵害の実情について、考えることで、SDGs とのつながりを理解し、ともに支えることへの意識を育む。

(2) 学習指導計画

乳幼児期の養育環境が心身の発達や人格形成に大きく影響を与えることを学習した上で、英語科と連携して子ども達が受けている様々な人権侵害の実情を知る。『児童の権利に関する条約』と共に「無戸籍児」「子ども貧困」「子ども兵」「児童労働」「児童婚」や「世界の子ども達の現状」(ユニセフ発行)などの資料を配布し、そこから各々が興味を持ったものについて調べ、それをもとにグループでディスカッションを行う。多様な価値観や宗教・風習があることも確認した後、グループ毎に周囲に発信したいことを1つ選びクラスで発表する。最後にまとめとして、一人ひとりが感想を提出する。

ア 学習のねらい：現在、世界（日本も含めて）で人権侵害を受けている子どもたちの様々な問題は、その国の宗教や習慣とも深く関わっているので、単純に善悪を決めるのではなく、その国や民族の価値観を認めた上で、何が問題でそのことから何を考え、何を発信（行動）しようと思うかをグループワークで深め、更に個々に考えさせたい。

- イ 流れ：
- ① 子ども達が健全に育つための環境を学ぶ。（4時間）
 - ② 子ども達が持っている権利を知る。子ども達を取り巻く環境の問題点を探り、そこから何を考え、何を発信できるかを考える。（5時間）

—②の流れと内容—

1時間目：クラス 「まずは知ろう！」

子ども達が健全に育つための環境を確認。全員に共通の資料を配布し、人権侵害だと思われることの中で特に興味を持ったことを次時まで課題として調べる。

2時間目：グループ 「興味のあることについて、知識を深めよう」

グループに分かれて調べたことを発表しあう。

3 時間目：グループ 「みんなで話し合ってみよう」

グループの中でテーマを決めて話し合う。

4 時間目：グループ

- ・クラス全体に発表する内容を5分程度にまとめる。
- ・発表準備

5 時間目：クラス 「クラスに発表して共有しよう」

- ・各班の発表。(質疑応答)
- ・感想をまとめる。

(3) 生徒の学び

《5 時間目のプリントより》

- ・ 私は今回出た様々な問題に対し、アフリカとか、そこら辺で起こっていることだから私たちには関係ないと勝手に思っていました。しかし、発表を聞いて、このような状況はアジアなどの日本の近くや、まさに日本国内でも起こっている深刻なものだと感じました。英語の授業などでも解決策や私たちに来ることなどの意見を求められますが、正直本当に大人達でも、ましてや私たちにはなおさら解決できるような問題ではないと思います。しかし、今回のように、まずはそのことについて調べ、事例や原因や知り、興味を持つことは、きっと何も知らないよりとても良いことだと思うし、むしろ恵まれている私たちだからこそ知る価値があるのだと思いました。今回の授業内容とそこから得たものを忘れないでいこうと思いました。
- ・ 今、自分がこうして授業を受け、安全で安定した生活を送っている裏で貧困や無戸籍、児童婚などの問題で苦しんでいる人々が日本を含む世界各地に存在していることを知り衝撃をうけた。アフリカのような貧困とはほど遠いと思っていた日本でも、今回、僕が調べた無戸籍者のような人がいることに特に驚いた。こうした問題を僕たちが「知った」ということが解決への第一歩だと思うので、第二步に繋がるような行動を何か起こせるように今後意識していきたい。
- ・ 今回のグループでの発表にあたり、世界における人権が脅かされた子ども達について調べてみると、私たちが当たり前だと思っていた生活がいかに当たり前でないかを痛感させられました。10 人に 1 人の子ども達が大人から強制され児童労働をしている現状や教育を受けられず、それと同時に心身ともに傷を負い死に至ってしまうこともあるという事実を他人事にははいけないなと思いました。日本では義務教育を受けて、更に進学し就職するという生き方が一般的だと考えられています。しかし世界では同じ世代の子ども達が労働を強いられ、児童婚や少年兵などにより苦しんでいることを学び、私にも何かできることがあるのではないかと考えるようになりました。世界で行われている人権が脅かされた子ども達を少しでも救うことが出来るような取り組みに、これから積極的に参加していきたいと思います。
- ・ 中2のゴールデンウィークに日本の子どもの6人に1人が貧困状態にあるという事実を知り大きな衝撃を受けてから、子ども食堂でボランティアをしています。

す。日本の貧困が解決されないにも関わらずUNICEFの寄付先がいつも途上国であることに疑問を感じていたけれど、今回、外国の複雑な事情の絡まった格差を知り少し納得できた気がします。教育を取り巻く負の連鎖は日本を含め全世界に共通して起こりえますが、紛争地域での少年兵の経験や無戸籍により、お金以前に人権すら与えられていない自分と同じくらいの年齢の子どもが、これほどいるのかと驚きました。そして、思い出したのがベトナム研修でTOTOに行った際、TOTOは学校作りの支援を行っていると言ったことでした。その時は、すごいなとしか思いませんでしたが、今回この事実を知って、その支援に自分も携わりたいと思うようになりました。そして、世界の現実を知れる教育を受けられる環境にいる自分の立場を痛感しました。

III Research and Analysis Project

2～3年にわたる長期な研究に取り組み、フィールドワーク、アンケート、実験を行い、論文を作成した。作成過程において、卒業生の支援をうける機会を設け、スキルを身につけることができた。優秀論文発表会を実施し、下級生や連携校の生徒とともに、自分たちの学びを共有した。

(対象：高校1年全員・高校2年生全員・高校3年生希望者)

連携教科：理科・数学・情報・国語・総合的な探究の時間

連携校：清教学園高等学校・渋谷教育学園幕張高等学校

連携大学：電気通信大学・東京外国語大学・企業

Write for the Future

グローバル・イシューや地球社会への課題に関して学ぶとともに、これまでに培った知識や経験をもとにテーマを設定し論文を作成する。また、校内・校外での発表する機会を設け、学校全体として取り組む意識を高める。本校では、総合的な学習の時間などを使い、全生徒が高校1年からおよそ2年半をかけて論文の作成に取り組んでいる。生徒が各自でテーマを設定し、調査・研究を行い、学術論文にまとめる。(対象:高校3学年 4月-10月)

今年度は、優秀論文発表会に連携校である清教学園高等学校の生徒が参加し、相互での交流を行った。

他校からの参加生徒から、互いに影響を受け合う姿が見られた。



《先輩から学ぶ》



《論文発表会の様子》

【目的・意義】

本校の教育目標の一つである「自調自考」、つまり自ら調べ自ら考える活動の集大成として、また探究学習活動を通じて、問題意識を持つ姿勢の醸成、問題発見・解決能力の飛躍につなげる。

この活動を行うことで、自分の興味・関心のある領域について深く学ぶことになり、その過程で、関連する他の領域についても相当量の学びを得る。それが、生徒一人ひとりの将来の進路を選択する際のきっかけや判断材料になることが期待される。

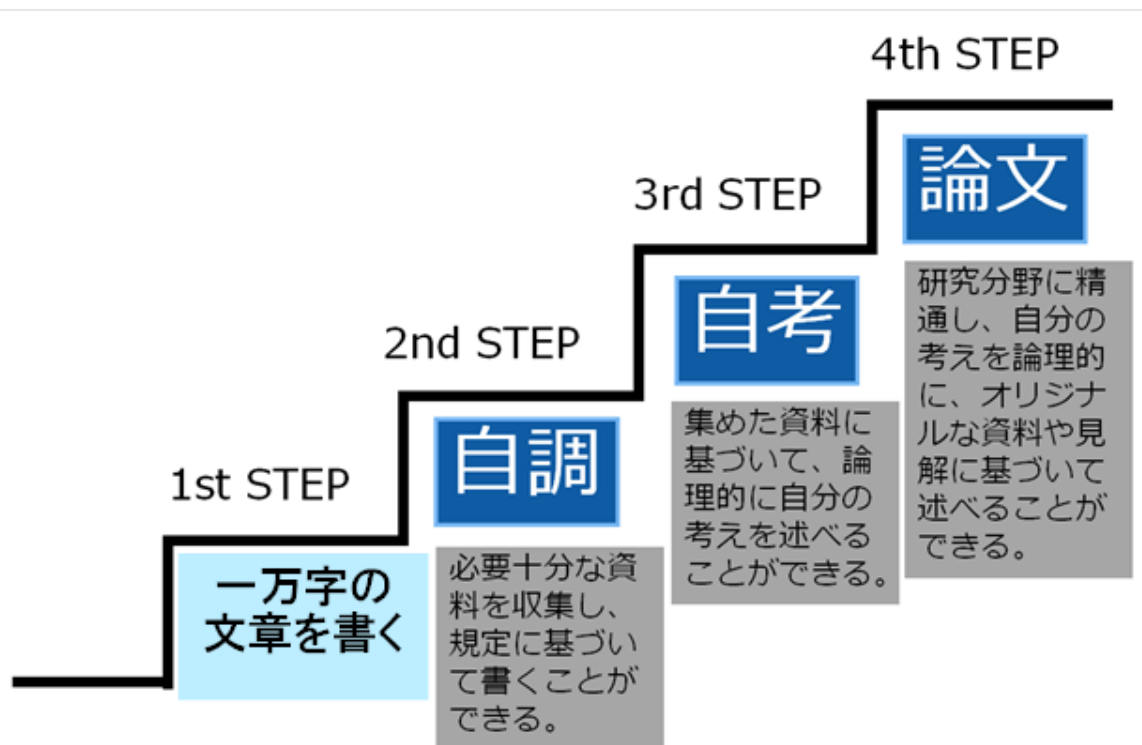
【活動の狙い】

- ・情報リテラシーの向上
- ・論理的思考力・表現力の向上
- ・学問的手法の習得
- ・達成感を得る

【執筆カレンダー】

高1	
5月	全体説明会/テーマを掘り下げするためのグループワーク
6月	卒業生研究者講演会「研究について」
7～8月	仮テーマ決め
9～10月	アドバイザー面談
11月	所属ゼミ決定/ゼミ中間発表(第1回)
12月	先行研究の分析
1月	ゼミ中間発表(第2回)
2月	高2優秀論文発表会に参加
3月	論文構成のデザイン/ライティングセンター(卒業生による論文執筆指導)開設(第1回)
高2	
4月	ライティングセンター開設(第2回)
6月	ゼミ中間発表(第3回)/ライティングセンター開設(第3回)
7月	論文提出(第一稿)
10月	ライティングセンター開設(第4回)
11月	論文提出(完成稿)/ゼミ最終発表
2月	優秀作品発表会/論文要旨完成
高3	
1学期	学園祭論文展示準備
9月	学園祭にて論文展示

【自調自考論文の取り組み】



Write for the Future で生徒が取り上げた事例（資料）

平和・紛争に関するもの

「現代社会における平和学習として適切な授業はどのようなものか」

「レバノンの難民問題を解消するには」



社会課題に関するもの


「高校生にもできるホームレス支援とは」

「移動式託児所～子連れでも楽しめる渋谷にするには～」

「日本の児童虐待を減らすためには」

Who's Who 【面談アドバイザーを探すために生徒に提示する資料（抜粋）】

国語	<p>高橋 正忠</p> 	<p>② 本研究現代学 門</p>	<p>⑤ 学關的論関指導</p> <p>卒業論文では、安部公房『砂の女』について2001年当時にこの作品が持つ意味について考察しました。</p>	<p>④ 代の趣は興味ろ関心映画・音楽（邦洋問わず）、舞台、TVドラマ</p> <p>まで興味の赴くままに触れるようにしています。</p> <p>野球は30年近く携わっています。選手としてからも監督・指導者としてからも多少話ができると思います。広げて、各種スポーツについても興味関心があります。中高段階における論文指導について研究を進めています。</p> <p>育児・働く女性の育児環境などは日常的な興味・関心事としてあります。</p>	<p>③ 東は研究震災はるの後の文化（表現）にどのような影響を与えたか？</p> <p>※大きな事件・事故に限らず、表現文化にどのように社会的な出来事や作家性が投影されるのかについて考えています。</p>	<p>⑥ 調自考論文は、はまればはまるほど確</p> <p>実に楽しくなります。考えるよりも行動した方が方向性は見つけやすいと思います。立ち止まって考え込むのではなく、動きながら考えていきましょう。学校中の先生方が君の相談にのってくれますよ。熱くなれ！</p>
英語	<p>北原 隆志</p> 	<p>教育心理学/英語科教育法/異文化間コミュニケーション</p>	<p>ESD/青年心理学/EQ/アサーション/英語ディベート/右脳教育/映画/手塚治虫を中心とする日本マンガ論</p> <p>大学では教育学科直属の研究サークルのチーフをしていました。卒業論文はコミュニケーションツ</p>	<p>中学時代から本格的に登山をやっています。日本の山々はもちろんアフリカのキリマンジャロ、スイスのマッターホルンも登頂しました。また野生動物を見に行くのが好きなのでアフリカのサバンナやボルネオ島などにも行きました。学生時代は映画、テレビ、マンガなどのサブカルチャーを研究し評論家を目指していたこともあるの</p>	<p>◆いかにしてESDの発想を世界中に普及し、全人類が永続的に安全に暮らせる平和な世界を実現できるか。</p> <p>◆日本の文化的財産である手塚治虫の漫画を若者世代にも読んでもらうためにはどうしたらよいか。</p> <p>◆日本の中学、高校の英語</p>	<p>論文で大切なものは三つ。一つは、どこかで読んだことがあるようなありきたりのものでなく独自の発想での仮説立て。もう一つは、その理由を後ろ盾する強い証拠があること。最後は、提出期限を厳</p>

			ールとしての英語教育法がテーマでした。現在は、ESD関係の講演会やワークショップに多く出席しています。	でその分野にも明るいです。特に昭和は強いです。	の授業でディベートの導入を一般化するにはどのような工夫が必要であるか。	守ることです。心配は要りません。先生方のアドバイスをしっかりと聞いて、これまでに培ってきた渋渋魂を発揮すれば先輩に負けない個性溢れた素晴らしい作品ができますよ。
数学	野村 努 	都市工学 (津波避難施設への住民割り当ての最適化)	線形計画モデル 最適化問題 (商品価格の最適化/施設配置の最適化など) 計量心理学 (ヒトがモノゴトをどう捉えるかを数学的に解析)	硬式テニス 日本史 心理学 脳科学 圧倒的にジブリ 爆発するくらいハリー・ポッター 他の追随を許さぬディズニー	◆ネーミングがヒトに与える影響とは？(プリントなど) ◆どうやったら渋渋の緑キャラを勝ち取ることができるか？ ◆緑色は目に良いと言われているのに、どうして僕はメガネをかけているのか？	論文の第一読者は、執筆者である君です。自分自身が読んで楽しくなるような論文を、そして将来読み返したくなる論文を書きましょう。

Write for the Future (自調自考論文) 要旨集より

言葉の印象とはどのように決まるのか

中園 光

キーワード：日本語、言葉、オノマトペ、音象徴

第1章 はじめに

私たちが普段何気なく使っている固有名詞にはそれ自体に意味がないものが多々ある。だが、無意味な造語と言っても、私たちはそこから何かしらの印象を得ることが多い。たとえば、ピカチュウという名前からはどこか可愛らしさを感じ、ゴジラという名前からは恐ろしさや凶暴さを感じる。このような特定の音や音連続が何らかの事象を象徴的に表す傾向は音象徴と名付けられている。どのように音象徴は作られるのかと疑問に思い、その形成方法について調べることにした。

第2章 音象徴に関する先行研究

調音音声学的観点や音響音声学的観点からの説明など、音象徴を口腔の動きや周波数によって定義する音声学的な説明が現在の主流の説である。これらは言語を超えた普遍的なものである。音象徴は異なる言語間の人たちも共通して持つ、人間が生まれながらにして持っている能力なのではないか、という目線からの研究である。だが、音象徴性を如実に表すとされている日本語のオノマトペを外国人が習得するのが難しいなど、まだ矛盾点や未解明な部分が多々あることが分かった。そこで、坂本(2019)が指摘したように、音声学的な観点以外にも音象徴が左右される成分があるのではないかと考えた。また、そうして立てた仮説が日本語の言葉の音象徴は「既存の似ている単語から推測・連想されて形成される」「言葉を形成する文字の形によって左右される」という2つ

の仮説である。

第3章 方法と対象

無意味綴りである「ねさは」と「ネサハ」を作成し、それぞれについて言葉が与える印象と、なぜそのように感じたかという理由を回答してもらったアンケート調査を渋谷教育学園渋谷中学高等学校の生徒209名を対象に行った。

第4章 リサーチ・論証

アンケート調査の結果、「ねさは」は「暗い」「やわらかい」「弱い」「おだやかな」という回答が目立った。また、「ねさは」を片仮名表記の「ネサハ」にしたところ、過半数の生徒が印象に変化があったと答え、「ネサハ」の印象は「ねさは」に比べて、「かたい」「冷たい」「強い」「はげしい」ものへ変化した。平仮名表記と片仮名表記で印象が変わったことから、音象徴は音声学的な成分以外にも、言葉を形成する文字の形によって左右されることがわかった。

全体的に「とても○○(○○の中には形容詞が入る)」という回答が少なく、逆に「どちらともいえない」ほどの形容詞対でも一定数見られることに気が付いた。これは印象を判断する時に絶対的な根拠がなく、根拠は自分の感性のみであるため、「どちらかといえば○○」もしくは「どちらともいえない」のような自信のない回答が出やすいのではないかと考えた。

また、なぜそのように感じたのかという質問をしたところ、「ねという文字からやわらかい印象を得た」「ねという文字から弱い印象を得

た」というという頭文字の「ね」に言及した回答や、「平仮名の『ね』がくねくねしているから」「片仮名は冷たい印象を得るから」という視覚的な情報からの回答、音声学的・視覚的にも似ている「ねくら」や「ねむい」、「ねぎま」という単語から連想した、という回答が多かった。「二年以上の海外滞在経験者」と「それ以外」の生徒の結果を比較しても結果が変わらなかったのは、本校の生徒は通常授業に日本語を使用しており、また日常的に日本語を使用している生徒が多いため、海外滞在経験者であっても現段階での日本語のインプット量、使用量が影響し、海外経験者ではない生徒と違いがなかったと考えられる。

第5章 結論

日本語の音象徴は音声学的な考え方に見られるような、母音や子音の固有の印象が組み合わさって形成される場合だけでなく、「既存の似ている単語から推測・連想されて形成される」「言葉を形成する文字の形によって左右される」こともあるという仮説を検証した。また、アンケート調査からは、三文字が同じ影響力を持って音象徴を作り上げているのではなく一文字目の影響力が強いことや、母音・子音などの音声学的な観点や文字数などの視覚的な観点から似ている単語を連想することが分かった。

今後、日本語ではなく他言語を母国語とする集団にもこのようなアンケート調査をすることで、今回とは異なる結果が出るかもしれない。

文献・資料

- 川原繁人 (2015) 『音とことばの不思議な世界』岩波書店
木通隆行 (2004) 『日本語の音相』小学館スクラウェア
窪園晴夫 (2017) 『オノマトペの謎 ピカチュウからモフモフまで』角川書店
黒川伊保子 (2004) 『怪獣の名はなぜガギグゲゴ

- なのか』新潮社
坂本真樹 (2019) 『五感を探るオノマトペ』共立出版
田守育啓 (2002) 『オノマトペ 擬音・擬態語をたのしむ』岩波書店
田守育啓 (2010) 『賢治オノマトペの謎を解く』大修館書店

言葉の印象とはどのように決まるのか

20期 中園 光

先行研究の分析

・私たちはその単語自体に意味がない言葉でもなんらかの印象を持つことがある。

(例)ピカチュウ→可愛らしさ
ゴジラ→恐ろしさ、凶暴性を感じる



Kellerの実験(1929)

二つの図形に「マルマ[maluma]」と「タケテ[takete]」という名前を当てはめてもらうという実験

→左の曲線的な図形に「マルマ[maluma]」という名前が当てはめられる傾向が判明



このように特定の音や音連続が何らかの事象を象徴的に表す傾向のことを**音象徴(おんしょうちょう)**と言う。

音象徴はどのように生まれるのか

- 現在の主流の説は調音音声学的観点や音響音声学的観点
- これらは言語を超えた普遍的なもの。音象徴は人間が生まれながらにして持っている能力であるという目線からの研究
- だが、矛盾点や未解明な部分がある。

(例)音象徴性を如実に表すとされるオノマトペを外国人が取得するのは困難である。



→**音声学的な観点以外にも音象徴が左右される成分があるのではないか。**

本論文では**その成分は何か**ということについて仮説を立てて検証した

仮説

- ①既存の似ている単語から推測・連想されて形成される
- ②言葉を形成する文字の形によって左右される

まとめ

音象徴は音声学的な要因以外にも「既存の似ている単語から推測・連想されて形成される」「言葉を形成する文字の形によって左右される」ことがわかった。

調査方法

・無意味綴りである「ねさは」と「ネサハ」を作成。

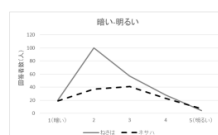
- ①その言葉の印象
- ②なぜそのように感じたか
- ③「ねさは」と「ネサハ」の印象の違いが見られるかについてアンケート調査

結果

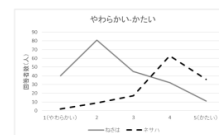
「ねさは」を「ネサハ」にすると**過半数の生徒が印象に変化があった**と回答。

「ねさは」と「ネサハ」の印象の比較

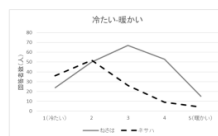
※「ねさは」と「ネサハ」の印象が変化しと回答した127名を対象に調査したものである。



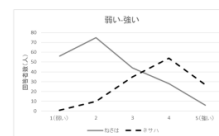
「ねさは」→暗い



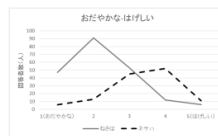
「ねさは」→やわらかい
「ネサハ」→かたい



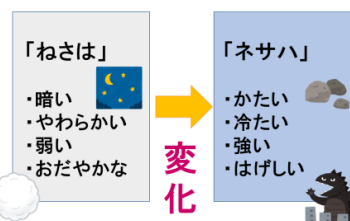
「ネサハ」→冷たい



「ねさは」→弱い
「ネサハ」→強い



「ねさは」→おだやかな
「ネサハ」→はげしい



さらに分かったこと

- ・「とても〇〇(〇〇の中には形容詞が入る)」という回答が少ない。「どちらともいえない」はどの形容詞対でも一定数見られる。
- 印象を判断する時の根拠が自分の感性のみであるため、**自信のない回答が出やすい。**
- ・「ねくら」や「ねむい」、「ねぎま」という単語から連想した人が多い。
- 一文字目が与える影響が大きい**
- ・「二年以上の海外滞在経験者」とそれ以外の生徒の結果を比較しても結果は変わらなかった。
- 海外滞在経験者であっても現段階での日本語のインプット量、使用量が他の生徒と変わらず、違いが出なかったのではないかと推察。

IV 海外プロジェクトへの参加

海外短期留学、国際会議への派遣等を通して、英語4技能が身についたことを実感させると共に、多様性を学ぶことで、地球市民としての自覚を促した。さらに、将来の目標として、海外の大学において研究を深めたいと希望する生徒に対しては、海外進学への支援に取り組んだ。国際会議で発表した研究内容は、12月に行われた全国フォーラムで文部科学大臣賞を受賞するなど、多くの実績をあげた。

しかしながら、新型コロナウイルス感染症拡大の影響で、3月に実施予定であった3つの海外研修が中止となるなど、大きな影響があった。

(対象：中学3年生希望者・高校生希望者)

連携校：渋谷教育学園幕張高等学校・Ruffles Insutitution・Loletto College)

対象国：オーストラリア・アメリカ・シンガポール・UK・スペイン・台湾)

1 Global Responsibility 国際会議 (渋谷教育学園幕張高校と連携)

昨年度、本学園がホストとなり開催した「世界高校生水会議 (Water is Life)」に参加したグローバル教育先進校のうち約10ヶ国の代表が、7月8日から8月12日、スペインのバルセロナに集結し、「安全保障」「難民問題」「気候変動」という国際問題について議論を交わした。

研究発表において、本校の2チームが Environmental and Natural Disasters 部門で優勝、Sustainability 部門で準優勝に輝いた。この研究については全国高校生フォーラムでも発表され、ポスターセッション部門で文部科学大臣賞を受賞した。

高井 都風 (2-A)

今日では、文理の垣根を超えた研究が数多くあるようです。講演の中で出てきたそれらの研究は大変興味深いものばかりでした。なぜなら、私は文理選択がこの先の人生を決定しかねないものだと思います、非常に悩んだからです。

日本の大学受験では文系・理系の区別に意識が向けられがちですが、その選択自体に大きな意味はないのかもしれませんが、むしろ自分が選択した分野を用いてどう貢献するかが大事であるのだと思わせてくれる有意義な講演になりました。

2 台湾国際高校生サミット

11月1日から一週間、台北にある臺北市立中正高中校が主催した第一回国際高校生会議に日本代表校として招待され、高校生5名が参加し、SDG11の目標をどのように実現すべきか台湾や他国の生徒たちと話し合った。

街や駅の緑化というテーマについて基調講演を聞き、実際にグリーンウォールを作ることで実践的な視点でこれについて考え、様々な視点からSDG11「まちづくり」について知識を得た。また女性やLGBTQ+や先住民の人権問題や、エネルギー問題が都市開発とどう結びついているのかについても考えさせられた。これらの知識をもとに、分科会ではその解決案を考え、発表した。

3 修学旅行プロジェクト

本校では例年、高校2年次10月に当該学年の全生徒が、中華人民共和国（北京・西安）か九州地方のいずれかを選択して6日間の修学旅行（研修旅行）を行う。修学旅行プロジェクトでは、修学旅行の前後に、総合的な学習の時間（および課外）において、事前・事後の学習活動を行い、旅行を真に意義深いものとする。（対象 高校2年生 希望者の決定時期 6月～9月）

【目的】

日本文化の源流をたどる本校の校外研修プログラムの集大成として中国を訪れる。古くから経済的・政治的、そして文化的にわが国と深い関係にある中国の近現代の歴史や、壮大な文化的施設に目を向けることによって、日本と大陸との過去から現在に至るつながりを理解し、さらに人的交流により今後の結びつきを強固なものにする。すべての班員が、それぞれの目的のリーダーであるという意識を持ち行動することの意義を認識する。

【事前活動】

5月-6月	中国・九州のどちらかを修学旅行先にするかを決定
9月-修学旅行まで	西安・北京における訪問先をいくつかの案の中から決定。HRの時間を使って、訪問地に関する事前学習を行った。また北京にて、北京大学、広渠門中学、首都師範大付属校のいずれかで現地生徒との交流を行うため、それぞれ質問事項を考えたり、英語で本校紹介をするために、プレゼンテーション資料作成や練習を行った。
修学旅行後	研修委員を中心に、HRなどを通じて振り返りを行った。

* 西安：陝西省歴史博物館・大雁塔・下和村・清真寺から1つを選択。

北京：頤和園・白雲觀・胡同・雍和宮＋孔子廟から2つを選択。

【交流報告】

A. 西安：下和村・小学校訪問（アクティビティを一緒に行う）



西安西門にて



孔子廟にて

B. 北京大学との交流

【北京大学について】

北京市海淀九に所在する、言わずと知れた中国随一の国立大学。1898年創立。国家重要大学の一つであり、中国の近代化に大きな影響を与えてきた。

理学部、情報科学、工学部、人文学部、社会科学部、医学部を有し、著名な卒業生は毛沢東、魯迅など多数である。今回は、北京大学の現役

大学生が、本校のためにボランティアとして交流に参加してくれた。



【交流内容】

- ① 北京大学到着後、北京大学の現役大学生と挨拶を交わし、本校生徒73名を10グループに編成して、広大な敷地内を散策しながら交流がスタートした。
- ② 北京大学のキャンパスは、北に円明園、西に頤和園をかまえ、この歴史遺産を利用してキャンパスが造られている。皇室庭園はとて雄大であり、江南山水を模した庭園などがある。
また、海外からの留学生も多く、実際会えはしなかったものの日本からの留学生も数多く、大学がより身近に感じられた。
- ③ グループに1名ずつボランティア学生についてもらい、キャンパスを見学した。
- ④ 見学を終えたグループが会議室に集合し、ボランティア学生が主体となり、学生を囲みながら英語と日本語で交流を行う。
- ⑤ 中国の文化や日本の文化の違いについて、北京大学で何を学んでいるのか、どのような大学生活なのか、将来の夢についてなど、SNSや身近な話題をも含めてそれぞれが関心のある事柄について話し合いが行われた。現役大学生が学んでいる日本語を披露されたりして和やかな雰囲気のある場を共有した。
- ⑥ 交流の時間はあっという間に過ぎ、グループごとに名残を惜しみつつ、北京大学を後にした。とても丁寧に案内をしていただき、中国での大学生活について理解を深められた。



C. 北京市広渠門中学との交流

【北京市広渠門中学について】

1954年に創立されたこの学校は、北京の東城区にあり、以前は北京女子中学校として知られていた。2014年1月現在、中学校36校、高校24校、合計2100人の学生がいる。「学生の健全な人格を築き、学生の発展のための良い基盤を築く」

「人の自立を尊重し、ヒューマニズム教育を奨励し、環境を重視し、道徳的な練習を重視する」という教育哲学を有する。

メインキャンパスは27,000平方メートルの面積を占めており、キャンパスには、150平方メートル以上の図書館、読書室、コンピュータラボ、デジタルプロジェクター、物理プロジェクター、電子スクリーン、テレビスタジオ、講義ホール、3D映画のスクリーニングルームがあり、また、全教室に、ラップトップとマルチメディア設備が備わっており、ブロードバンドは、キャンパスのほぼ全範囲をカバーしている。屋外は、遊び場、バスケットボールコート、ジム、カフェテリア、サッカー場、屋内スポーツ場、物理室、テニスコート、ロッククライミンググラウンドなどのスポーツ施設がある。

【交流内容】

- ① 学校到着後、会議室で校長先生と対面。記念品の交換を行う。その後担当の教員の指示に従って、校内を見学しながら授業教室へ。教室に入ると参加生徒約40名がとても温かく迎えてくれた。
- ② 10年生(日本の高校1年生に相当)の地理の授業に参加させていただいた。現地生徒のグループにまぎって授業を受けた。
- ③ 2時間目は本校生徒による英語でのプレゼンテーション。日本語と中国語の意味の違いについてのクイズなどで楽しみながら交流した。
- ④ その後、卓球やバドミントンなどで広渠門中学の生徒と対戦するなど楽しい時間が過ごせた。
- ⑤ お互いに持ち寄ったギフトを交換し、全員で記念撮影をした。



歓迎



プレゼンテーション



卓球での交流



全員で記念撮影

D. 首都師範大付属校との交流

【首都師範大学付属校について】

首都師範大学付属校は、1954年に創立された中国の大学の付属校で、1997年に設立された。小学校、中学校、高等学校の12年一環教育制の学校である。学生数は約2700人、教職員数は約200人である。先進的な設備を整え、進学にも重点を置く。また、国際交流を熱心にすすめており、欧米の学校との交流も多い。本校は、今年度初めてこの学校と交流を持った。

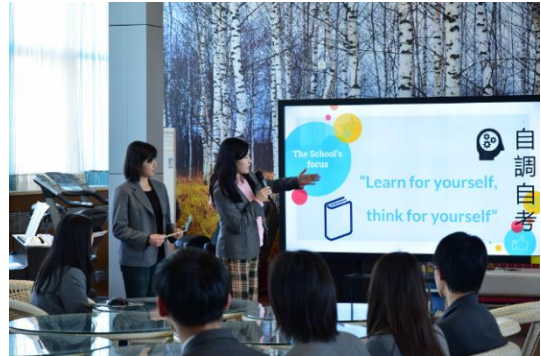


【交流内容】

- ① 学校に到着すると参加生徒・教員に温かく迎えられ、その後交流会場へと入場した。
- ② 先方の学校よりご挨拶とパワーポイントによる学校紹介があった。
- ③ 先方の生徒による歓迎の歌唱が披露された。
- ④ 本校生徒による日本文化の紹介を行った。パワーポイントを用いて本校生徒が英語と中国語で渋谷中高について、渋谷の街について、日本の学生の生活について等をプレゼンテーションし、学校単位での交流を深めた。最後に、両校で記念品の交換を行った。
- ⑤ グループに分かれて学校を見学、その後、校庭や体育館でスポーツを行ったり、お互いの学校生活について話し合いを行った。その際、お互いに持ち寄った贈り物交換、連絡先の交換なども行い、交流を深めた。
- ⑥ その後、グループごとに写真を撮影し、お互いに握手をしながら学校を後にした。



師範大付属生による歓迎の歌唱



本校生徒によるプレゼンテーション



4 相互交流の取り組み

学年に応じた様々なタイプの交流を準備し、海外への意識を高める。

【受け入れプログラム】

- ① プチ留学@British School in TOKYO 【BST】(対象：中学2年生)

British School in TOKYO は、東京にある英国人子弟の通学する学校である。近隣にあり、相互での交流を実施している。6月に本校生徒が1週間、BSTに通学し、3月は、BSTの生徒が本校に通学する。学校内では、バディ-となった生徒とともに学校生活を送る。

受け入れ人数 6名

- ② オーストラリア研修 【訪問：中学3年生 受け入れ：全学年希望者】

オーストラリア研修で訪問している、Star of the Sea College、Loreto College、St. Francis、Xavier's School、Nazareth College からの留学生を受け入れる。

日本滞在中は、生徒宅のホームステイし、ともに通学し、学校生活を送る。

受け入れ人数 34名

*楽しみにしていた訪問は、新型コロナウイルス感染症の影響により中止



《家庭科の授業の様子》

③ シンガポール研修【訪問：高校1年生 受け入れ：全学年希望者】

連携校 Raffles Institution の生徒を受け入れる。今年は、例年の交流に加えて、1 dayの受け入れプログラムも実施した。留学生は、ホームステイしながら、授業へ参加した。

受入れ人数 8名+21名

*シンガポール訪問は、新型コロナウイルス感染症のため、中止



④ ベトナム研修（対象：高校1年生） 幕張高等学校との協同プロジェクト

今年は、毎年訪問している Ly Thoug Kiet School に加え、Hanoi Amsterdam High School For the Gifted も加わり、更に充実したものとなりました。英語が流暢な生徒が多く、生徒たちのモチベーションも上がり、活発な交流となりました。またPENTAXブランドのカメラを製造する工場の見学も取り入れ、現地で働く方との交流会では、活発な質問が飛び交い、充実した時間を過ごしました。



《研修の様子》

⑤ その他

- ・ トンバ校(スウェーデン)からの留学生受け入れ
毎年1名の高校生を受け入れている。今年は来日が中止となった。
- ・ 新モンゴル日馬富士学園からの留学生受け入れ
高校1年生4名が来日し、1日の体験入学を行った。

V 特別授業・講演会の実施

土曜日や夏休みを利用した、多様な言語による構想内容に関する特別授業を年間のカリキュラムに位置づけ、実施した。今年度は、長期休暇期間内だけでなく、放課後も活用することができ、予定を超える回数を実施できた。これにより、連携校、連携大学、企業とのつながりが深まった。

(対象：全学年希望者)

講演会テーマ AI・環境・LGBT・異文化理解・宗教等

1 高校生 G20 サミット

5月12日、本校生徒を中心に実行委員会を発足し、G20大坂サミットの公式付属会議であるY20サミットと連携して、高校生G20サミットを開催した。全国から約二百名の高校生が本校に集結し、AIと教育、少子高齢化と労働不足、ジェンダー平等と働き方改革に関する問題について話し合った。

その解決策を実行委員が提言としてまとめ、同月26日、立教大学で開催されたY20サミットのオープニングセレモニーであるG20ユースダイアログにおいて発表し、その後Y20の提言に盛り込まれてG20の首脳陣に提出された。



2 Model G20 サミット

昨年度、本校生徒が Knowva Academy が主催する高校生国際会議 Model G20 北京サミットにおいて最優秀賞に輝いたことで高い評価を受け、Y20サミットと同時に開催された高校生会議に招待された。その会議においても多くの生徒が活躍したことにより、日本代表校として Knowva Academy Global Community のメンバー入りを依頼された。WWLコンソーシアムコンソーシアム構築にあたり、各国の高等学校との連携をより深める機会になると考え、受諾した。

3 SDGs Talk 大会

WWLコンソーシアムコンソーシアム構築の一環として本校は国内外の高校生を招いて行う「学びのオリンピック（仮称）」を計画しているが、今年度はその基礎づくりとして、8月28日、国内の少数の学校の生徒を招待し、基本的には本校の生徒を中心とした規模で開催した。また、本校の教育に関心を持つ小学生やその保護者を観客として招待した。

本校には「Actions, Not Words」という制度があり、生徒主導で学年を超えて社会貢献活動を行うことができる。SDGs Talk 大会は、その制度に基づき高校二年生の有志が企画、運営をした。SDGs に関して各人が考えていることを発表したいという生徒たちを募り、小学生を対象に英語または日本語によるプレゼンテーションを行った。渋谷ユネスコ協会から池田敬介さん、AFICS-J から箱山富美子さんをコメンテーター

として招き、テーマは駅の緑化、宇宙開発、カンボジアの貧困、LGBTQ など多岐に渡った。

以下は、箱山様から寄せられた感想である。

[全員の発表を通じて、発表の内容、パワポの作り方、態度、英語の質、全てが非常に高度で驚かされた。例えばテーマに掲げたのはそれぞれかなり抽象的な題目であるが、実際には絞り込んだ具体的なテーマを決め、良く調べてきて、焦点を合わせて、起承転結のある展開で、ビジュアルなスライドを駆使して説明してくれるので、非常に分かりやすかった。

発表の質の高さに関しては見学者も感じた見え、「どうやったらそんなにうまく発表できるのか?」という質問もなされていた。それに対する返答も見事なものであった。曰く、「自信を持つことが大事。そのためには良く調べ、論点を整理して、うまくまとめる。そうしたら、あとは自分を信頼して、堂々と発表するのみ。」こう答えた高2の生徒は、「もともと自分は引っ込み思案で消極的だったけれど、このような活動を通して変わった」とも話していた。

このような生徒が多く育ってくれたら、日本の将来も明るいのではないかと大きな希望を持つことのできた経験であり、参加していてとても楽しかった。AFICS-J もこのような機会を数多く持って、日本の子供たちに貢献していけたら良い、と思った次第である。]

4 LGBTQ セミナー

12月13日、上記の「Actions, Not Words」企画として、高校二年生有志が渋谷区ダイバーシティ推進課と連携し、本校の中高生を対象に LGBTQ セミナーを開催した。

日本で初めて同性パートナーシップ制度を導入した長谷部健渋谷区長と日本のスポーツ界で唯一カミングアウトしているプロサッカーの下山田志帆選手



によるプレゼンテーションと質疑応答を通して、参加者は LGBTQ についての基礎知識を得た。その後、小グループに分かれて対策案を考え、発表し合い、専門家からアドバイスを受けた。

5 SDGs Discussion

SDGs 解決に取り組んでいるゲストが視察などで来校した際、時間が許せば放課後に生徒たちとディスカッションを行う機会を設けている。

7月27日、本校卒業生でアフリカのジブチ共和国で外交官として活躍している大谷壮矢さんが、8月に横浜で開催された



TICAD (アフリカ開発会議) のため一時帰国した際、本校および事業連携校である渋谷教育学園幕張中学高等学校から希望者を募ってのセッションを実施した。様々な視点を示したり、体験談を交えながら、一緒に考えるというスタイルで話してくれたことにより、参加者はアフリカが抱える問題などを深く理解すると同時に、SDGs 達成を担う次世代地球市民としての自覚を強めた。

2月21日には、ユース担当国連事務総長特使のジャヤトマ・ウィクラマナヤケさんが来校した。高校1年生は Hiroshima Brochure Project を通した平和教育について、高校2年生は LGBTQ+セミナーなど Action Not Words の活動及び高校生 G20 サミットについての発表を行った。その後生徒は特使からの質問に答え、最後は見学生徒も全員参加しての特使とのディスカッションを行った。

VI 学びあいの場の開催

1 さくらサイエンスプログラム

さくらサイエンスプログラムの一環として、4か国（インド・ベトナム・バングラディッシュ スリランカ）からの高校生102名と本校高校1年生が交流しました。班にわかれて、新聞紙でタワーをつくるという作業ですが、身振り手振り、英語を交えて、協働作業に励みました。あきらめずに工夫しあうなど、短時間でも内容のある交流となりました。



対象：高校1年生全員

《交流会の様子》

2 オープンスクールデーの開催

学園の取り組みを公開する機会として、オープンスクールデーを開催した。連携校及び近隣の学校の生徒も参加し、SDGsについて考え、意見を交換する機会を設けた。

開催にあたっては、事業拠点校の生徒たちが、ボランティアとして、運営に携わった。

3039名が来場し、熱気あふれる一日となりました。参加した生徒たちからは、来場者のメッセージに力づけられたとの声も多くあがりました。日頃の活動への自信につながりました。

テーマ：SDGsについて考えよう

取り組み例：

- ・SDGs関連本によるビブリオバトル
- ・東京五輪でのペットボトルの消費量を半分にするアイデアソン
- ・気候変動に関する国際的取り組みを話し合う模擬国連活動
- ・世界の貧困対策における公的支援のあり方についての英語ディベート
- LGBTQへの啓発活動など社会課題についてのプレゼンテーション



《模擬国連活動の様子》

3 主権者教育の取り組み

中学3年生の授業の一環として、岐阜県の池田中学校と協働して、政策について考える機会を設けました。ZOOMを利用した遠隔会議も実施し、互いの学びを深める経験となりました。

目的： 将来の主権者として意識を高める
地方の首長選挙を事例に政策を吟味する力を養う
社会が多様な人々から構成されていることを理解する

特徴： 岐阜県池田町立池田中学校3年生263名とのコラボレーション授業
卒業生との協力授業
読売教育ネットワークの協力

本校の取り組み：

中学3年生 公民の時間を利用した、地方自治への理解を深める授業
全クラス2コマで実施する。(今回の授業は2コマ目に当たる)

11月11日の放課後 希望者による、池田中学とのネットを利用したテレビ会議

授業：

生徒たちは、X市(仮想)の首長選挙を想定し、候補者の政策を比較し、有権者投票行動について考える。選挙の仕組みや都市と地方の差など違いを学びながら、立場によって重要課題が変化することをワークショップを通じて理解を深める。



《テレビ会議の様子》

(授業資料 1)

X市の概要

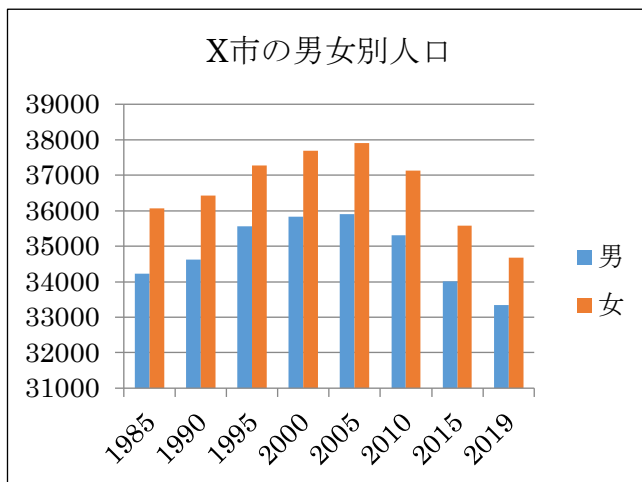
◆資料1 人口と世帯数

X市は、アルプスの山々に囲まれ、豊かな自然が残る。一年を通じて気候がよく、江戸時代より城下町として栄えてきた歴史をもつ。また、温泉にも恵まれており、観光を目的に訪れる人もいる。

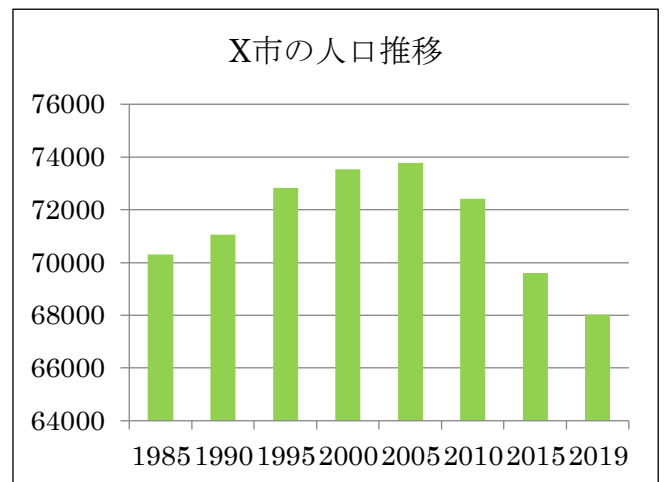
人口は約7万人弱で、若者の多くは都会へ進学する。そのため、年々、減少傾向にあり、高齢化が進む。かつては養蚕業が盛んであったが、現在はブドウ栽培とワインの生産が盛んで、精密機械の大工場もあった。しかし、今年3月に、X駅前にあった精密機械工場は移転し、市の財政は、来年度、赤字が予想されている。

人口	68000人 (男性49%女性51%)
有権者数	56000人 (男性49%女性51%)
世帯数	28000世帯
65歳以上人口	28%
15歳以上人口	12%

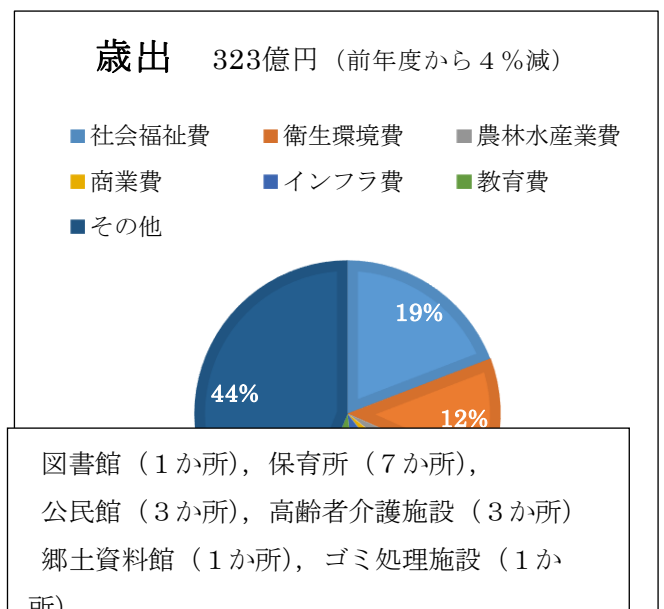
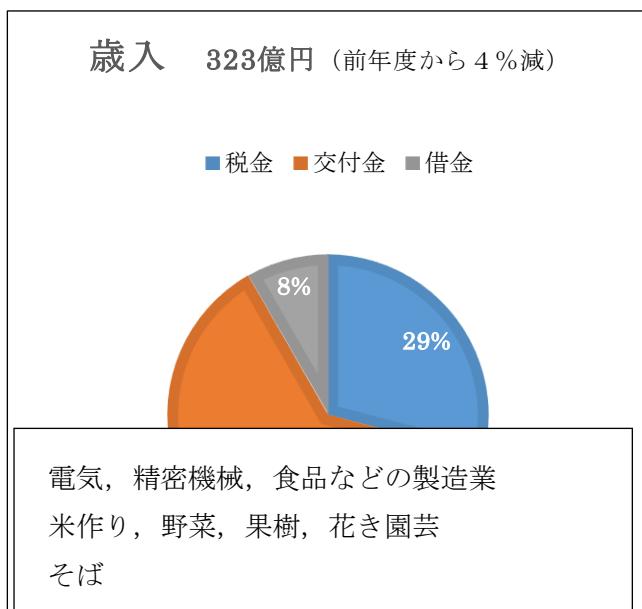
◆資料2 男女別人口

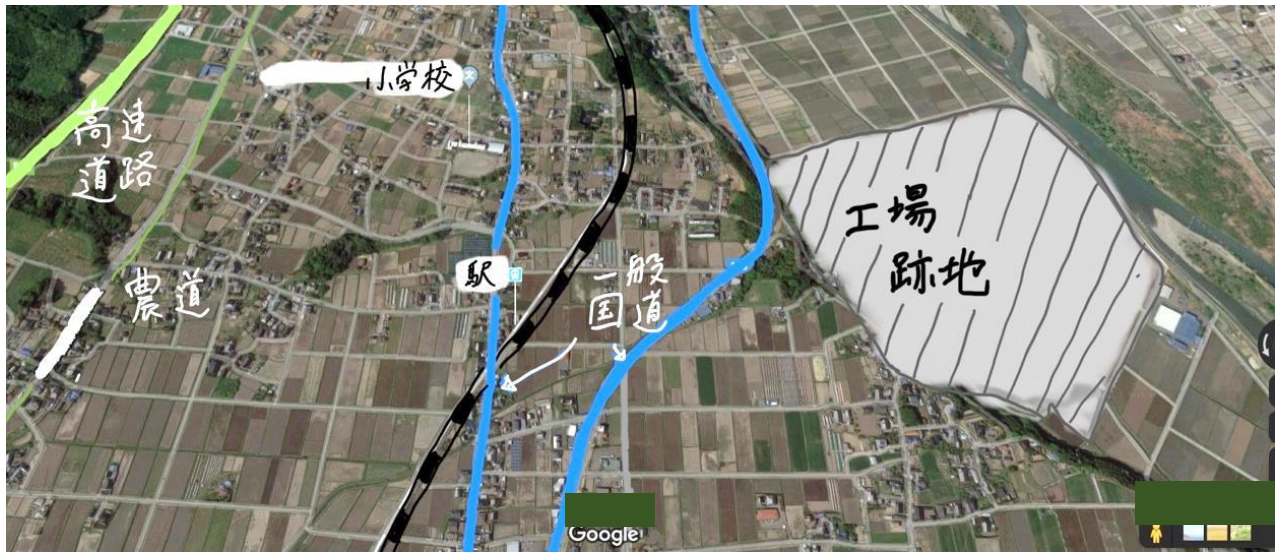


◆資料3 人口の推移



◆資料4 財政状況 (歳入と歳出)





◆資料8 市民の声



X市は少しずつ人口が減っているのですが、若い人が市内にたくさん定住してくれるような施設を造ってほしい。



X市には^{ごらくしせつ}娯楽施設が少ないので、家族連れで楽しめるような施設がほしい。



X市の^{かんきょう}環境を守るために、^{はいりよ}環境に配慮した^{しせつ}施設を造ってほしい。



X市は^{こうれい}高齢化が進んでいるので、高齢者にとっても住みやすいまちにしてほしい。



X市はだんだん財政が厳しくなっているため、なるべく財政に負担がかからない^{しせつ}施設を造ってほしい。



X市には子どもを預ける場所が少なく、仕事と育児の両立が難しいため、安心して子育てできる^{かんきょう}環境を整えてほしい。

VII 評価・分析

WWL アンケート分析

本校では、SGH 指定初年度より、アンケートを無記名で実施している。これは、生徒の「英語運用能力」、「知的好奇心（英語に接する習慣）」および「グローバルリーダーへのモチベーション」という3つの部門に対して、計27個の質問項目に答えるものである。単年度の評価だけでなく、学年3年間の変化も読み取り、次年度のプロジェクトに反映させている。

WWL 事業を行うにあたって、項目の一部変更も行ったが、グローバル人材の育成の観点から、あえて大幅な変更を行わず、生徒の変化指標の積み重ねを重視した。今後は、連携校でも同様のアンケートを広げ、知見の共有に努めたい。

(1) 高校3年生(WWL 一期生・SGH 第四期生)

3年間における意識変化 (巻末図参照)

本アンケートの対象である19期生は、高校1, 2年次をSGH 第四期生として、3年次をWWL 1期生として取り組んだ学年である。アンケートにおいて「よくあてはまる・そう思う」または「とてもよく当てはまる・そう思う」と答えた生徒の割合を、2017年4月(高校1年開始)、2018年3月(高校1年修了)、2019年3月(高校2年修了)、2019年12月(高校3年修了)時点で比較したものである。ほぼすべての項目で大幅に向上した。

▶質問項目(1)~(10):英語の一般的な運用能力を問う質問

順調に伸びた。(2)洋書や英語で書かれた雑誌を読むことができる、(3)英語の新聞を読むことができる、(7)地球社会が抱えている問題に関して200語以上の英語のエッセイを書くことができる、(8)地球社会が抱えている問題に関してとっさに英語で何らかの説明ができる、(9)地球社会が抱えている問題に関して自分の考えを英語で発信できる、の項目では、それぞれプラス30%以上という著しい伸びを見せた。特に変化が大きかったのが、(10)地球社会が抱えている問題に関して英語でディベート、ディスカッションができる、で高1開始時から44%の上昇である。また、(2)、(7)、(10)の項目は学年進行に比例した上昇を見せており、19期生が英語で書かれた記事を読み、理解できる力(インプット)を書いたり話したりする力の発展(アウトプット)につなげることができていることがわかる。

▶質問事項(11)~(19):英語に接する習慣と知的好奇心を問う質問

こちらも順調に伸びた。ほぼ全ての項目で30%以上の上昇が見られるが、特に(17)国際紛争に関する英語を読んだり、聞いたりしている、(18)国際貢献に関する英語を読んだり、聞いたりしている、ではそれぞれ37%、38%の上昇である。また、(19)その他、時事的な話題に関する英語を読んだり、聞いたりしている、の項目では高3時の数値が60%を超えており、多くの入試演習に取り組むと共に、そこで扱われたトピックについて自主的にイ

ンターネット上で関連記事を探して読むなどいわゆる受験勉強だけにとどまらない学びができた生徒が多く存在したことがあると考える。

▶質問事項(20)~(27):グローバルリーダーへのモチベーションを問う質問

これらの質問に関しては高校1、2年次に30~50%の範囲の数値であったが、多くの項目で60%以上に向上した。(22)自分が得意とする分野で自分の考えを英語で発信していきたい、(24)日本がグローバル社会の中で存在価値のある国になるように自分ができることをしたい、(25)地球社会が抱える問題の解決に貢献したい、(26)グローバルリーダーとして活躍し、地球社会に貢献したい、(27)海外の会社に対しプレゼンテーションを行ったり、あるいは国際会議で発言したい、の項目は高校1、2年終了時に一度数値が下がったものの、3年次終了時点で再び上昇した。大学受験に向けての取り組みの中で、自分の力をどのようにとらえるべきか過剰に自信をなくしてしまう時期を経て、最終的には在学中に高めた意識と身につけた力を将来社会において自ら発揮したいと考える生徒を多く養成できたと言える。SGH、WWLの両プログラムが一つのキャリア教育の一環として機能したと言ってよいのではないだろうか。

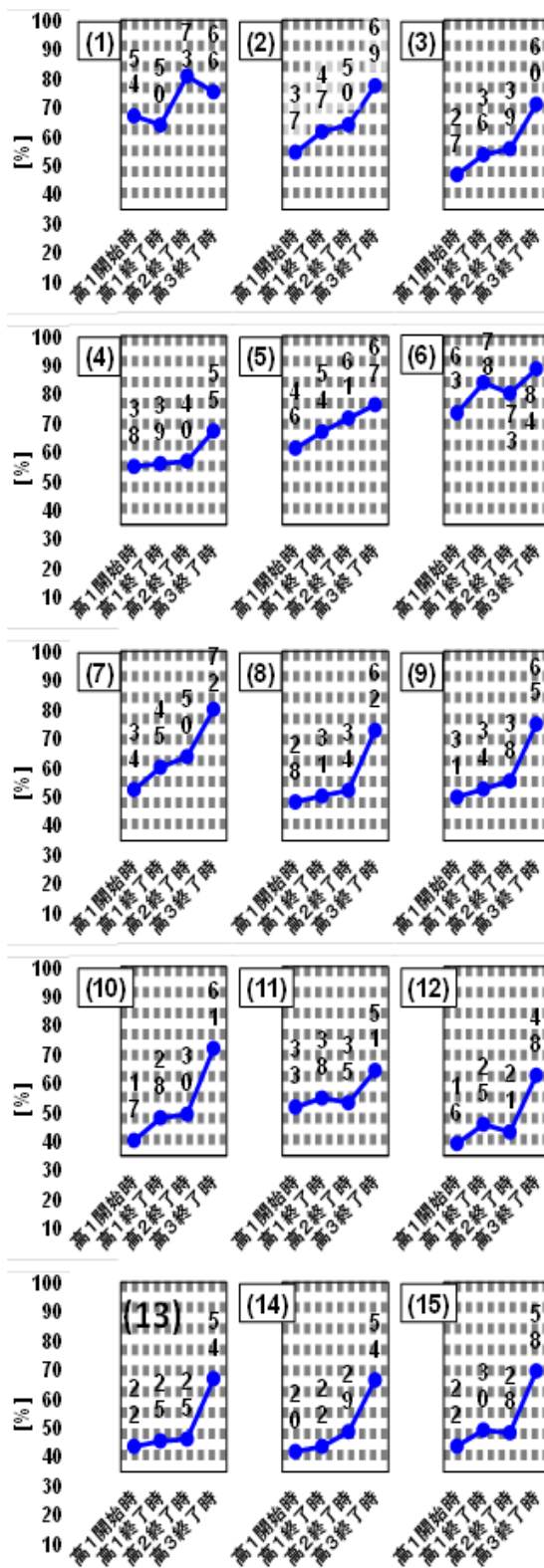
生徒が国際社会において物怖じせず挑んでいく大切さを学んでいることに、この取り組みの意義を感じた。

図 SGH 第四期生(19期)の3年間における意識変化

高1開始時:(2017.4) 高1修了時:(2018.3) 高2修了時:(2019.3) 高3修了時:
(2019.12)

-質問項目-

- (1) 外国の人と英語で話をする事ができる
- (2) 洋書や英語で書かれた雑誌を読むことができる
- (3) 英語の新聞を読むことができる
- (4) 英語のテレビ番組や映画を日本語の字幕なしで理解できる
- (5) インターネットの英語サイトを利用することができる
- (6) 日常的な話題について100語以上の英語のエッセイを書くことができる
- (7) 地球社会が抱えている問題に関して200語以上の英語のエッセイを書くことができる
- (8) 地球社会が抱えている問題に関してとっさに英語で何らかの説明をすることができる
- (9) 地球社会が抱えている問題に関して自分の考えを英語で発言することができる
- (10) 地球社会が抱えている問題に関して英語でディベート、あるいはディスカッションすることができる
- (11) 新聞やインターネットの英語で書かれた記事を読む
- (12) 科学技術、研究開発に関する英語を読む、あるいは聞く。
- (13) 政治・経済・様々な社会問題に関する英語を読んだり、聞いたりしている。
- (14) 環境問題に関する英語を読んだり、聞いたりしている。
- (15) 異文化、歴史、文化遺産に関する英語を読んだり、聞いたりしている。



(16) 紛争、地雷の除去など平和に関する英語を読んだり、聞いたりしている。

(17) 国際紛争に関する英語を読んだり、聞いたりしている。

(18) 国際貢献に関する英語を読んだり、聞いたりしている。

(19) その他、時事的な話題に関する英語を読んだり、聞いたりしている。

(20) 海外の大学、または大学院で学んでみたい。

(21) 自分が得意とする分野、興味を持っている分野を極めたい。

(22) 自分が得意とする分野で自分の考えを英語で発信していきたい。

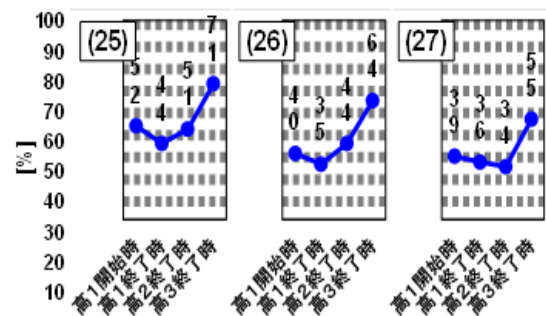
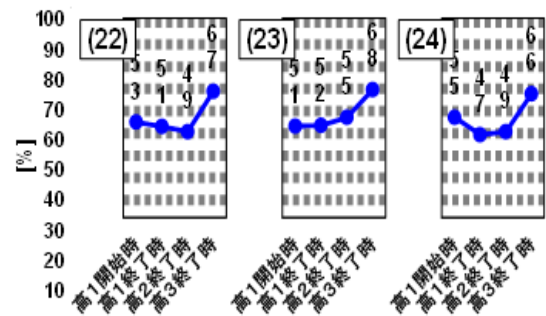
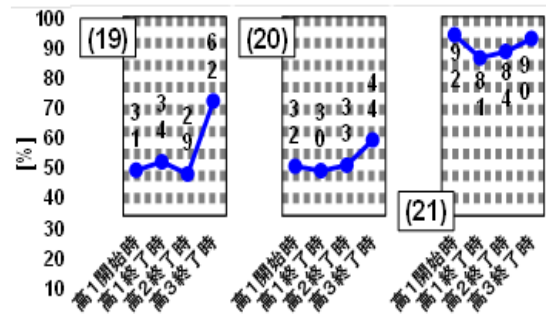
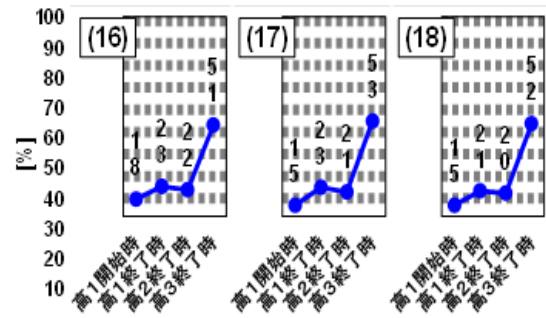
(23) 自分が得意とする分野で、リーダーとして活躍したい。

(24) 日本がグローバル社会の中で存在価値のある国になるように自分ができることをしたい。

(25) 地球社会が抱える問題の解決に貢献したい。

(26) グローバル・リーダーとして活躍し、地球社会に貢献したい。

(27) 海外の会社に対しプレゼンテーションを行ったり、あるいは国際会議で発言したい。



(2) 高校2年生 (WWL 第二期生・SGH第五期生)

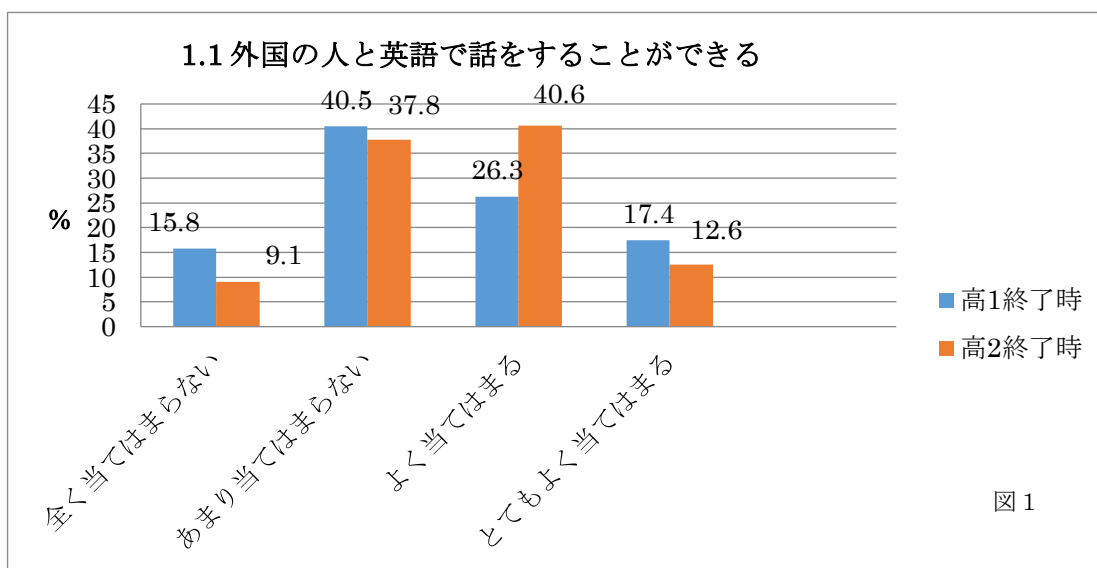
WWL 二期生である高校2年生 (20 期生) 202 名 (匿名) から得られた回答を、昨年度末に同様のサンプルに対して同様に行ったアンケートの結果と比較、検証したい。

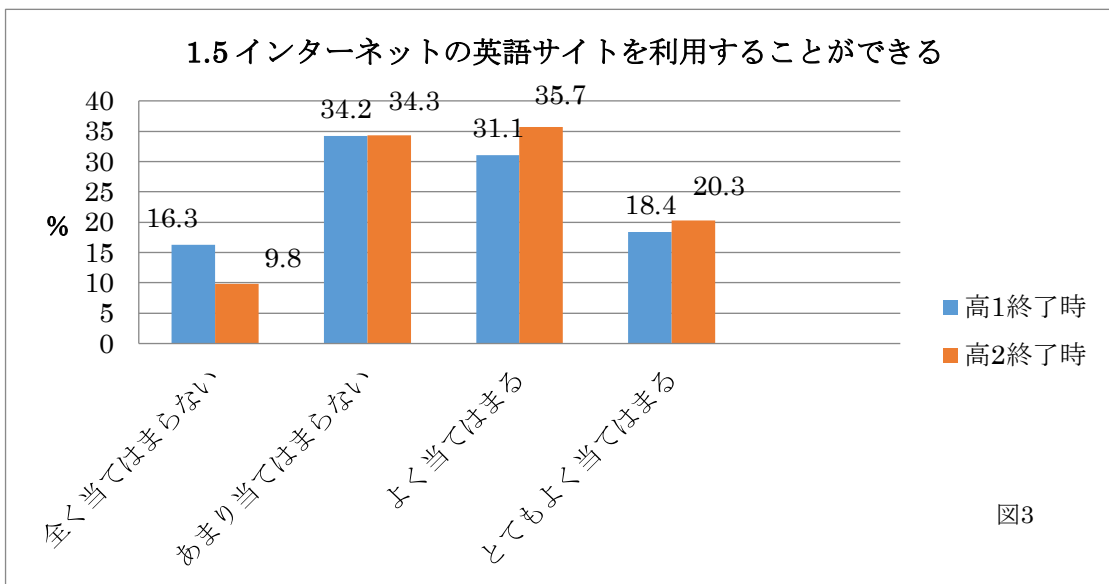
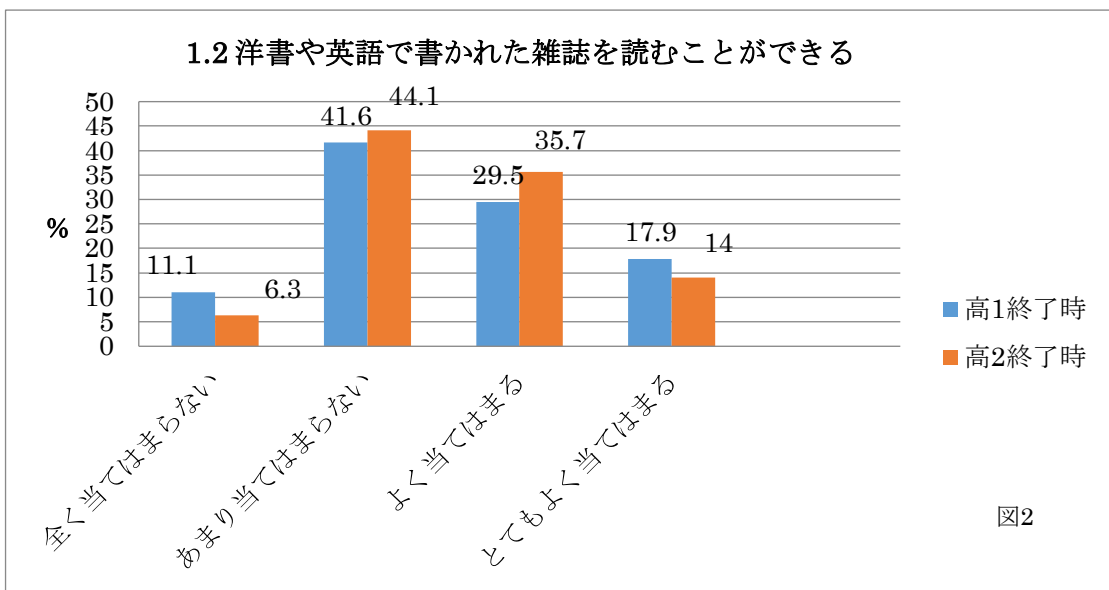
WWL 二期生(20 期生)の意識変化

先述のようにこのアンケートは「英語力」「知的好奇心 (習慣)」「グローバルリーダーへのモチベーション」の三セクションから成り立っている。全体的な結果から見ると、ポジティブな回答が高一年次よりも増加している。これは年齢が上がったことの精神的な成長もあるが、グローバルな視野を持つことでより外の世界への意識が高まったことの表れであろう。

ア セクション1

「英語力について」においては、前年度の結果と比べネガティブな回答(「まったく当てはまらない」、「あまり当てはまらない」)の層がポジティブな回答(「とてもよく当てはまる」、「よく当てはまる」)へ動いたと思われる結果が多く見られた。特に「1.1 外国の人と英語で話することができる」、「1.2 洋書や英語で書かれた雑誌を読むことができる」、「1.5 インターネットの英語サイトを利用することができる」という3つの項目では、後ろ向きな回答から前向きな回答への変化が大きいと思われる。1.1 に関しては、フロリダやシンガポールの姉妹校の生徒の受け入れ、またイスラムに関してのゲストスピーカーとの交流などの場で非常に意欲的な姿が見られたことから、生徒側の実感が高まっていることがいえる。また1.2に見られるように「読む」こと全般に対する抵抗感も減少していることが分かる。1.5 に関しては、地理や家庭科の知識をベースに、英語でも文献にアクセスしプレゼンテーションなどに生かす、といった流れを授業でも採用していたことから、英語のサイトに対して少しずつ壁がなくなっていると推察される。

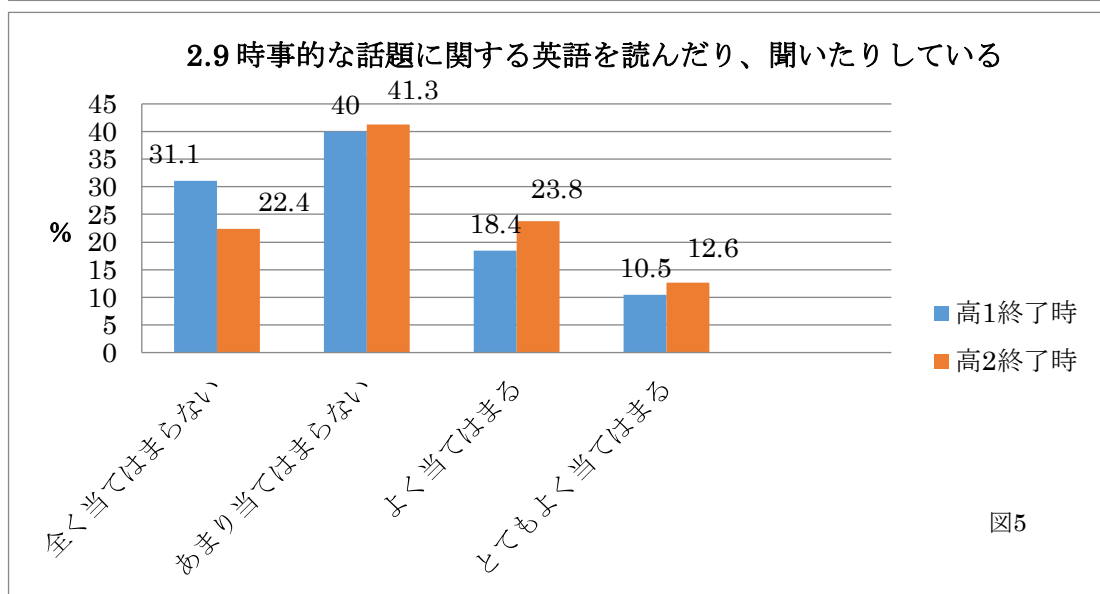
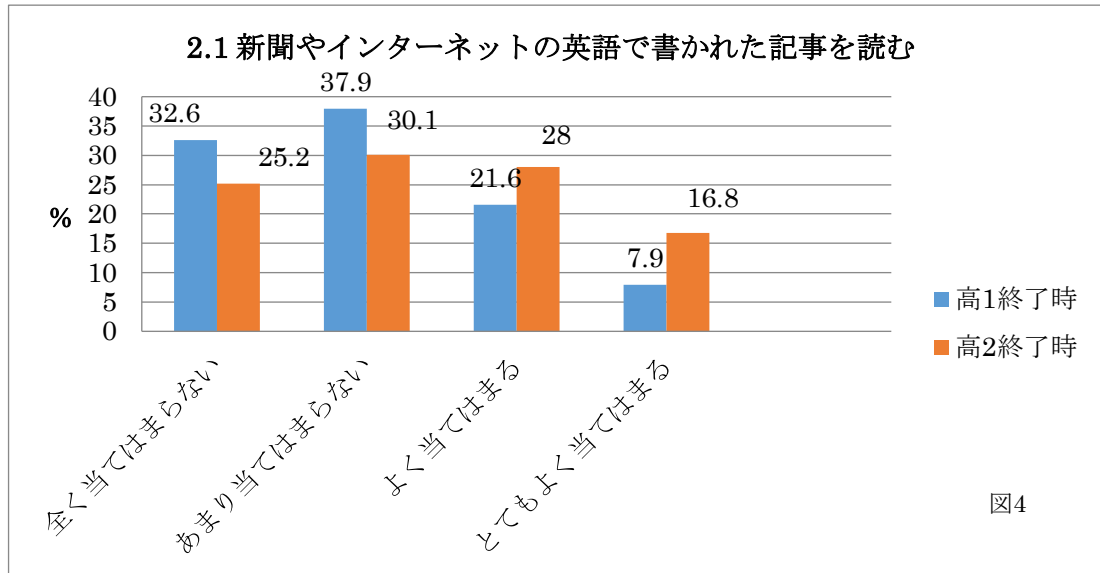




イ セクション2

「知的好奇心（習慣）」は、以下の2項目によりポジティブな回答が多く見られるようになった。2.1の「新聞やインターネットの英語で書かれた記事を読む」に関しては、セクション1「英語力」の1.5にも見られるように、英語で書かれた文章については紙、インターネットを問わず、読むことに前向きな姿勢が見られるようになっている。特に「とてもよく当てはまる」が8.9%も増加しているが、自調自考論文や各授業でのプレゼンテーションなど、ある目的のために英語での文章を通して情報を得るといった習慣がついてきていると思われる。また2.9「時事的な話題に関する英語を読んだり、聞いたりしている」に関しては、2020年の初めより新型コロナウイルス感染症

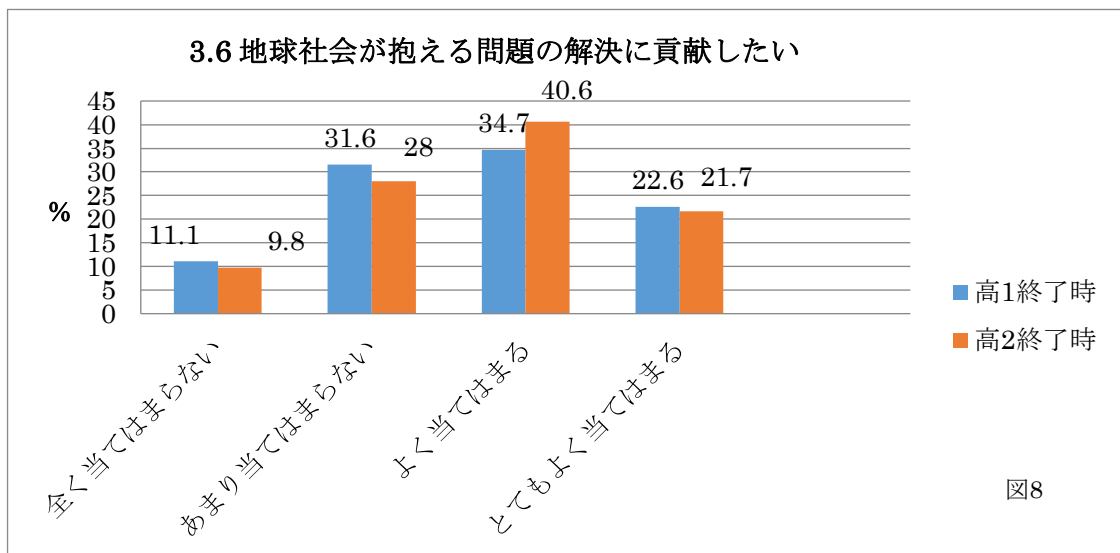
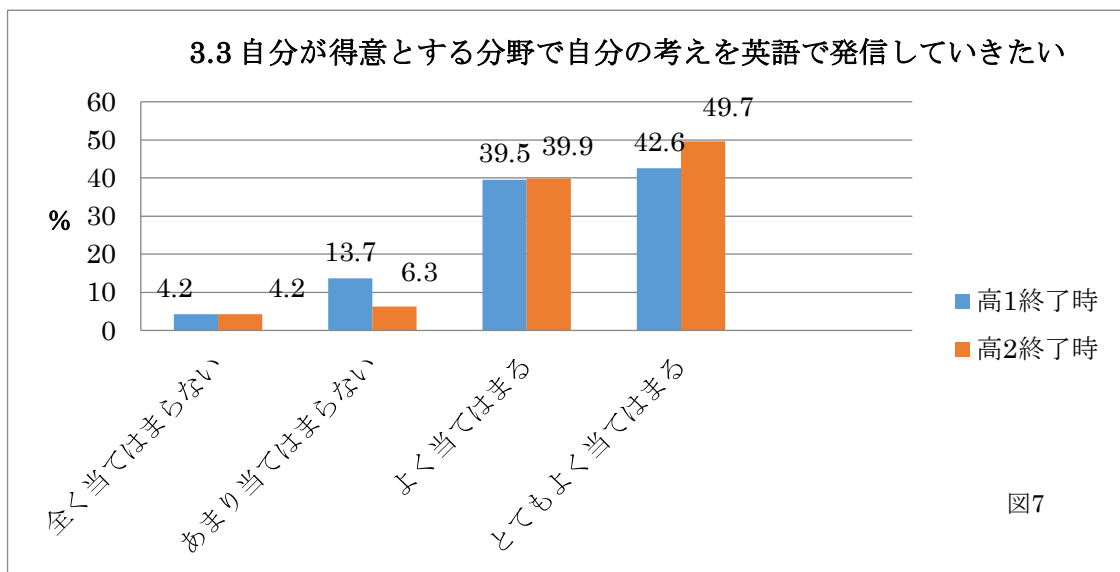
に関してのニュースや話題が増える中で、CNN や BBC の簡単なニュース記事やサイトなどを紹介すると、英語で書かれた記事に関してもより「自分事」として捉え、情報を収集する姿勢が多く見られたことも関係しているのではないかと推察される。

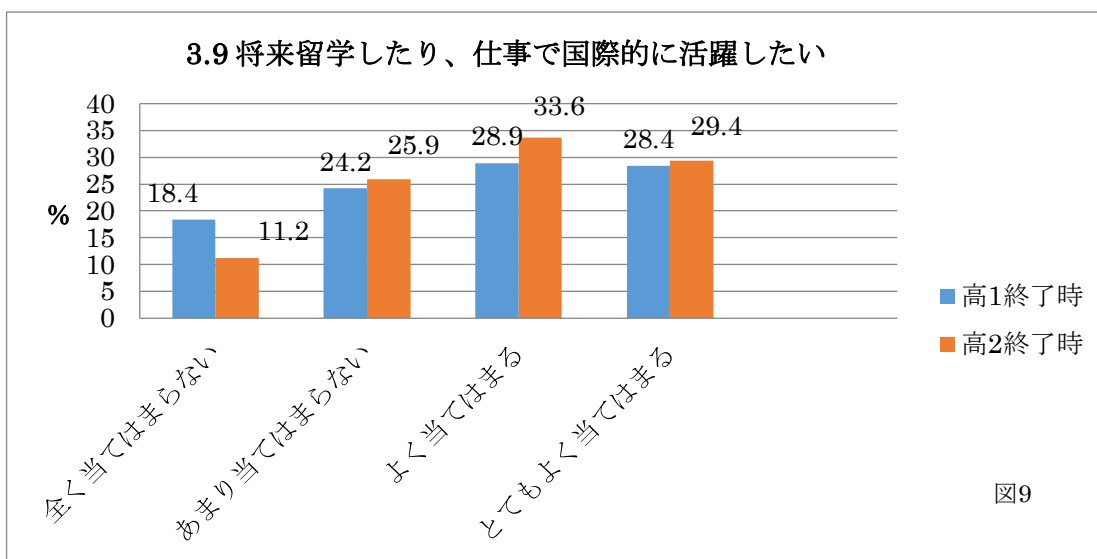


ウ セクション3

「グローバルリーダーへのモチベーション」は、全体的には微増・微減となっている。3.3「自分が得意とする分野で自分の考えを英語で発信していきたい」という項目に関しては、高一年次より元々ポジティブな回答が多く見られていたが、今回はそれをさらに強めた結果となった。ソーシャル・ジャスティスの活動を英語で報告する際にも、自分たちの行ってきたことを英語で発信する難しさや楽しさを感じたという生徒もいた。また分野ごとに異なる語彙や表現の幅などを知るいい機会となり、自分が得意とする分野を発見し、

このような英語での発信を今後もしてきたいという感想も見られた。また、同じようにソーシャル・ジャスティスでの活動を通して、3.6にある「地球社会が抱える問題の解決に貢献したい」という項目にもポジティブな回答が増えたのでは、と思われる。さいごに、3.9の「将来留学したり、仕事で国際的に活躍したい」という項目でも「全く当てはまらない」が大きく減少し、将来日本の枠組みから飛び出して活躍したいと感じている生徒が多く見られるようになった。このことから、SGHとWWLの計2年間の取り組みを通して、多くの生徒が将来の自分の姿をより具体的に想像できるようになったのではないかと考えられる。





(3) 高校1年生 (WWL 第三期生)

WWL 三期生である高校一年生 (21 期生) 58 名 (匿名) から得られた回答を、昨年度開始に同様のサンプルに対して同様に行ったアンケート (176 名) の結果と比較、検証したい。

※ただし、コロナ禍による授業変更により、授業中ではなくオンラインでアンケートを行ったため、回答数が同一母集団の中の 58 名と少なくなっている。ゆえに、年度開始と年度終了の数値の比較については、あくまで参考値程度である可能性があるという事情を前提にしつつ、以下記述する。

WWL 三期生(21 期生)の意識変化

全体的な結果を見ると、「英語力について」での「全くあてはまらない」という自信の無さが大幅に減少した、「グローバルリーダーへのモチベーション」で「日本の地位を存在価値の向上・地球規模の問題の解決に対する主体性」が大幅に向上した、という二点の大きな変化が見て取れる。

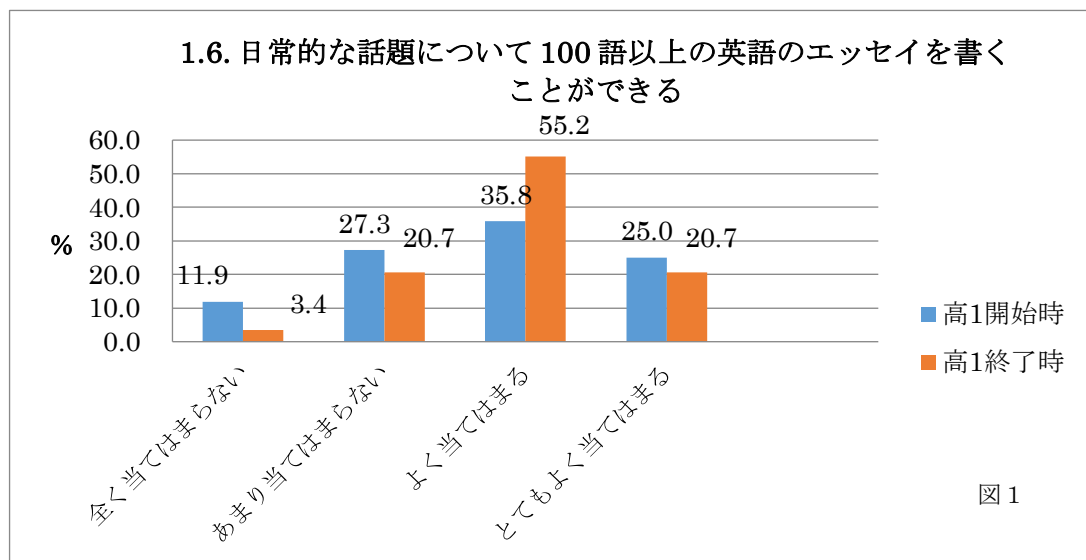
ア セクション1

「英語力について」においては、自身のセクション1「英語力について」は、前月 (中3・3月) の3週間のオーストラリア研修を経た高1開始直後の自信を反映した「とてもよく当てはまる」は寧ろ減少傾向にあるが、二つの点で大きく向上が見られる。一点目は、1.6「日常的な話題について 100 語以上の英語のエッセイを書くことができる」、1.7「地球社会が抱えている問題に関して 200 語以上の英語のエッセイを書くことができる」という、エッセイを書くことへの自信のなさが減少していることである。二点目は、1.8「地球社会が抱えている問題に関してとっさに英語で何らかの説明をすることができる」、1.9「地球社会が抱えている問題に関して自分の考えを英語で発言することができる」、1.10「地球社会が抱えている問題に関して英語でディベート、あるいはディスカッションすることができる」の「全く当てはまらない」という回答の減少で

ある。1.10は流石にまだポジティブな回答にまで至った生徒は少なく、何回も授業中に行ったディベートでは寧ろ授業中に自分の力不足を感じたであろう機会が増加してポジティブな回答も減少しつつあるが、21%もの生徒が「全く当てはまらない」から抜け出している。1.10ほど高いレベルまでは求められないではない1.9においては「よく当てはまる」が堅調な伸びを示している。

これは、WWLの枠組み以外の授業において、多くの話題について「賛成反対を含めたライティングを宿題として、それに基づきディベート・ディスカッションする」という流れを作ったことも一因と言えるが、各学期におけるWWLプロジェクトにおいて発信を多く求められたことも大きな要因となっていると推察される。特に、1.1-6といった日常的項目よりも、1.7-10といったよりWWLの授業との直接的関連が高いだろう項目に伸長が見られるのが、この学年の特徴と言えるだろう。

一方で、1.1-6のような日常的な英語運用能力や、4技能（5領域）ならびにそれを支える英語知識も含めて「バランスよく伸長させる」必要があるのも事実である。夏期課題も含め、授業では、様々な日常会話局面を素材としたリスニング冊子、高校生アルバイト・女性専用車両等の是非のディベート、英語コマercialの視聴等、日常生活に近い話題も取り上げて学習した。今後、カリキュラム開発において、「PBLベースの授業」と「それ以外の授業」のバランスをさらに追及していく必要がある。



1.7. 地球社会が抱えている問題に関して200語以上の英語のエッセイを書くことができる

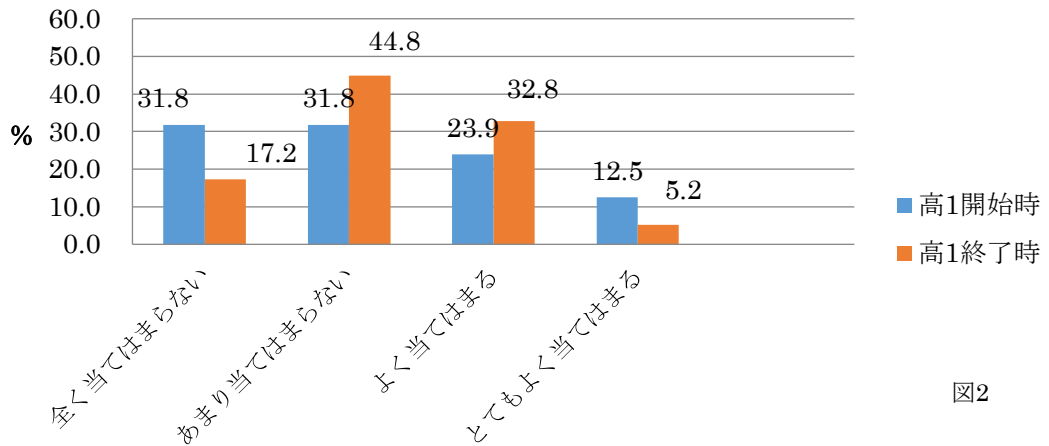


図2

1.8. 地球社会が抱えている問題に関してとっさに英語で何らかの説明をすることができる

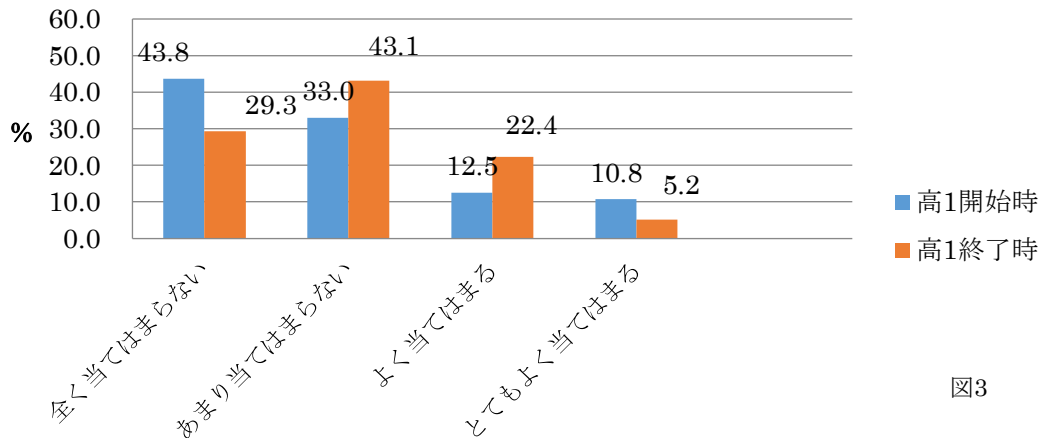


図3

1.9. 地球社会が抱えている問題に関して自分の考えを英語で発言することができる

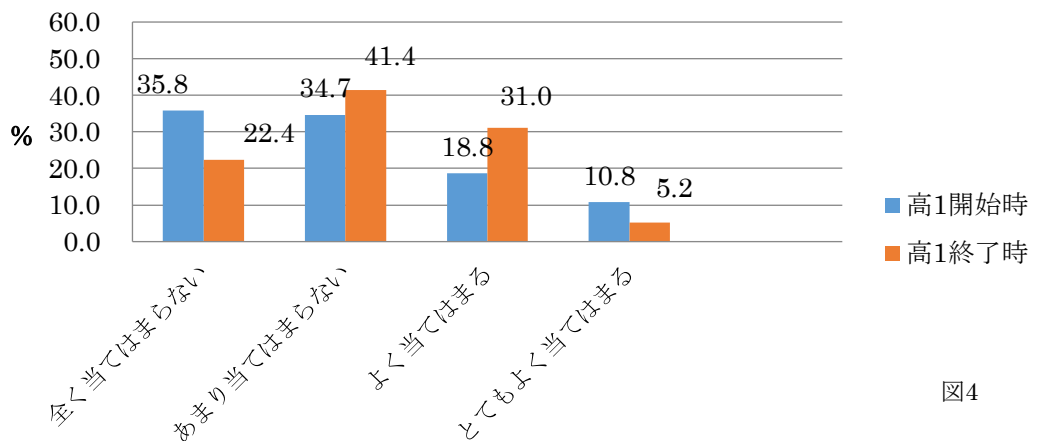
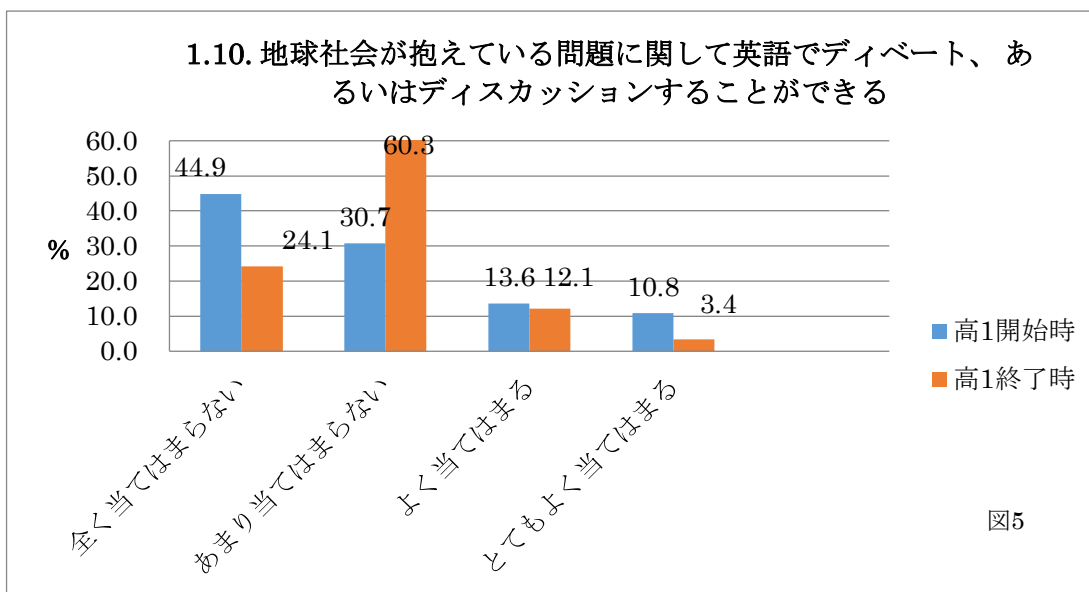


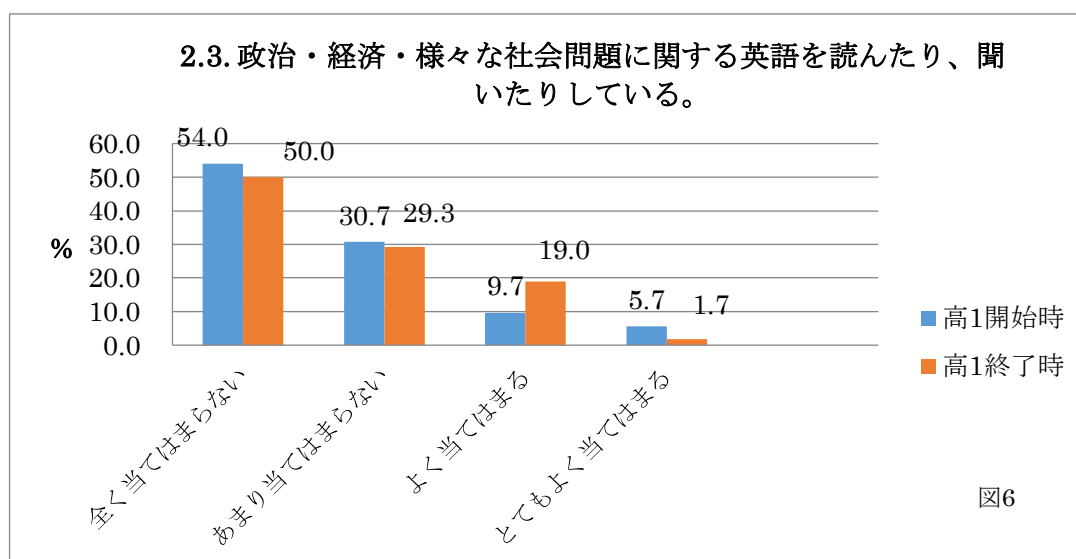
図4



イ セクション2

「知的好奇心(習慣)」は、差分において10%以上の大きな変化が見られた項目は存在しなかったが、全体的に微増傾向にある。9%の数値変動があったのは2.3「政治・経済・様々な社会問題に関する英語を読んだり、聞いたりしている」、2.9「その他、時事的な話題に関する英語を読んだり、聞いたりしている」である。

WWL 授業の素材として2.3のように様々な内容に触れる事が多かった(特に3学期のConflicts)ことを含めて、WWL 授業全体の内容から、関心が徐々に高まっていることが見て取れる。なお、細かい話ではあるが、このアンケートを取るタイミングが数値に微妙に影響を与えている可能性もなくはないだろう(3学期にConflictsを扱ったため関連の高い2.3が高まっているが、仮に1学期に扱った「AIと倫理」を3学期に扱っていたら2.2「科学技術、研究開発に関する英語を読む、あるいは聞く」が高まっていた可能性がある)。



2.9. その他、時事的な話題に関する英語を読んだり、聞いたりしている。

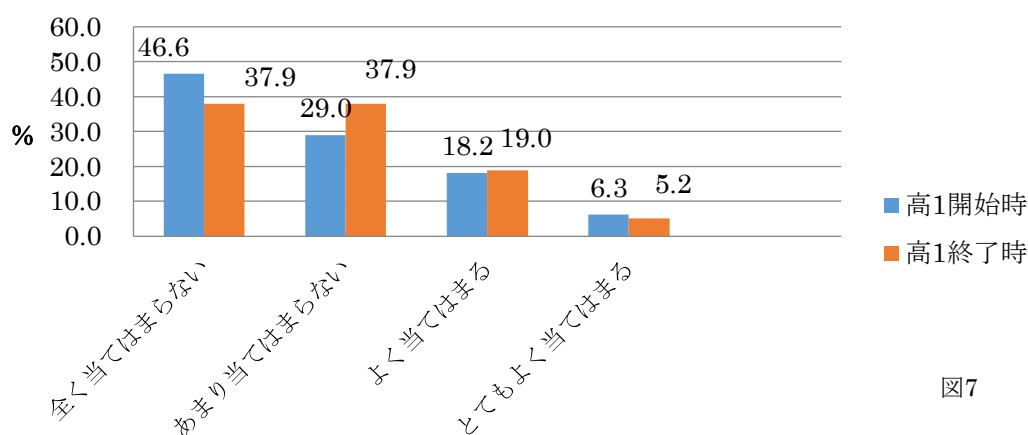


図7

ウ セクション3

「グローバルリーダーへのモチベーション」は、3.5「日本がグローバル社会の中で存在価値のある国になるように自分ができることをしたい」、3.6「地球社会が抱える問題の解決に貢献したい」において、「とてもよく当てはまる」が10%以上増加した。なお、9%ではあるが、3.2「自分が得意とする分野、興味を持っている分野を極めたい」、3.4「自分が得意とする分野で、リーダーとして活躍したい」においても「とてもよく当てはまる」が増加していることも付記しておく（その他は、微増・微減である）。

全体として、WWLの1年間の取り組みを通して、グローバルリーダーとしての動機づけが高まってきていることが感じられ、高2での更なる伸長を予感させる。

3.5. 日本がグローバル社会の中で存在価値のある国になるように自分ができることをしたい。

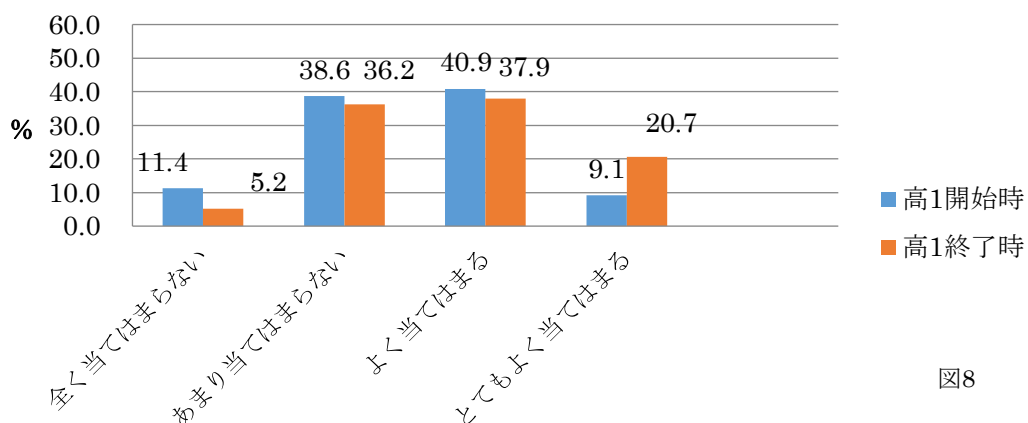


図8

3.6. 地球社会が抱える問題の解決に貢献したい。

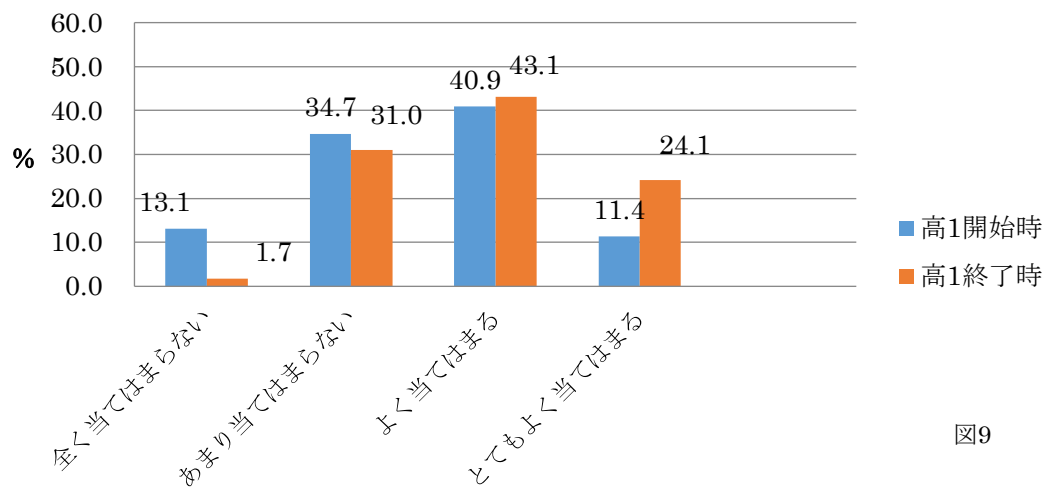


図9

以上